

仙台市文化財調査報告書第256集

# 若林城跡

— 第3次発掘調査報告書 —

2002年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第256集

# 若林城跡

— 第3次発掘調査報告書 —

2002年3月

仙台市教育委員会

# 序 文

仙台市内には古くは旧石器時代から、近世にいたるまで各時代の遺跡が数多く知られています。これらは私たちの祖先が築き上げてきた文化の証と言えるものです。このような貴重な文化遺産を守り、後世に伝えていくことが、今に生きる私たちの使命であると考えております。

今回の調査箇所を含む若林区若林・南小泉地区は、他の地区同様に住宅・商業地へと急速に変容し、開発に伴う生活環境の整備等も急務となっています。地域に残る貴重な歴史遺産を新しい街づくりの中で、どのように生かすことができるのかという点について、各地域の特色に応じて調整を図りながら、よりよい保存活用を目指し、事業の推進に取り組んでいるところです。

本報告書は、都市計画道路「南材木町・古城線」の拡幅工事に先だって行われた若林城跡の調査をまとめたものです。若林城跡は現在宮城刑務所となっておりますが、仙台藩祖伊達政宗が晩年を過ごした城として知られています。築城後10年程で政宗の死去にともない廃城となる歴史をもっています。廃城後幾たびかの変遷があったようですが、堀跡からは江戸時代終わり頃の木製品が大量に出土し、当時の生活を知る良好な資料となりました。

これらの調査成果の蓄積の中から、地域の歴史を再確認し、文化財を大切にする心が育まれることを切に願うものであります。今回の調査や報告書の作成に際し多くの方々のご指導、ご協力をいただきましたことに対しまして心より感謝申し上げます。

平成14年3月

仙台市教育委員会

教育長 阿部芳吉

## 例　　言

- 1 本書は、都市計画街路「南木材町・古城線」に伴う若林城跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、仙台市教育委員会文化財課渡部弘美・伊東真文が担当した。
- 3 本書の執筆・編集は伊東真文が行い、のち渡部が編集作業を引き継いだ。本書作成業は次の通り分担した。

○本文執筆	伊東
○遺構・地図トレース	柿沼幸子 山田やす子
○遺物実測	柿沼 山田 赤間淳子 伊東恵美子 大内孝子 小野さよ子 菊地和江 鈴木貴美子 曾根ちよ子 種田ふくよ 針生せつ子 依田光子
○遺物拓本	柿沼 山田
○遺物トレース	柿沼 山田 赤間 伊東(恵) 大内 小野 菊地 鈴木 曾根 種田 針生 依田
○遺物写真撮影	渡部 伊東
- 4 陶磁器・焼瓦の鑑定は、仙台市博物館佐藤洋氏に依頼した。
- 5 製文土器の鑑定は、仙台市教育委員会吉岡恭平が行った。
- 6 ヘギ板および建築材については、(財)文化財建物保存技術協会武藤正幸氏にご教示と資料の提供を得た。
- 7 宮城集治監、宮城刑務所時代の城跡周辺の状況については、次の諸氏に聞き取り調査を行い、貴重なご教示を得た。  
木村満氏(雄勝天然スレート株式会社) 佐藤正治氏(前宮城刑務所職員) 柴修也氏(宮城刑務所職員) 五十音順
- 8 本調査における出土遺物・実測図・写真などの資料は、仙台市教育委員会文化財課で一括保管しているので活用されたい。

## 凡　　例

- 1 本書中で使用した地形図は、建設省国土地理院発行の1:50,000「仙台」をもとにしたものである。
- 2 本書中の上色は、『新版標準上色帖』(小山・竹原1973)を使用した。
- 3 調査区は、平面直角座標系Xに位置づけている。
- 4 実測図中の水系高は、標高で統一している。
- 5 本書の文章・実測図中の方位は真北で統一してある。なお、仙台市周辺では磁北は真北に対して西偏約7°20'である。
- 6 本書で使用した遺構略号は次の通りである。  
SD:溝跡・堀跡 SK:土坑 P:ピット SR:河川・小流路跡
- 7 本書で使用した遺物略号は、次の通りで、それぞれ種類別に番号を付した。

A:繩文土器	C:非ロクロ土師器	D:ロクロ土師器	E:須恵器	F:丸瓦	G:平瓦
H:軒棟瓦	I:陶器	J:磁器	K:石製品	L:木製品	N:金属製品
- 8 土器・木製品の実測図中のスクリーントーンは、次の範囲を示している。



土器・黒色処理  
硯石・漆残存範囲  
漆器・透け漆  
竹釘



土器・赤彩範囲  
漆器・赤漆  
草履下駄・縫残存範囲  
樹皮残存範囲



石製品・自然面  
漆器・黒漆  
磁器  
焦げの範囲

- 9 遺構の規模は、図化した後に図上で計測したものである。
- 10 遺物の法量は、図化した後に図上で計測したもので、数値はすべて最大値である。

## 本文目次

I 調査に至る経緯 .....	1
II 遺跡の位置と環境 .....	2
1. 遺跡の位置と地理的環境 .....	2
2. 周辺の歴史的環境 .....	3
III 調査経過と調査概要 .....	10
1. 調査経過 .....	10
2. 調査概要 .....	13
IV 基本層序 .....	13
V 検出遺構と出土遺物 .....	14
1. 堀跡・溝跡・河川跡 .....	14
2. 土坑 .....	20
遺物図版・観察表 .....	23
VI まとめ .....	40
1. 検出遺構について .....	40
2. 出土遺物について .....	40
3. 若林城について .....	44
4. 結び .....	45
○引用・参考文献○ .....	46
○注○ .....	48

## 挿図目次

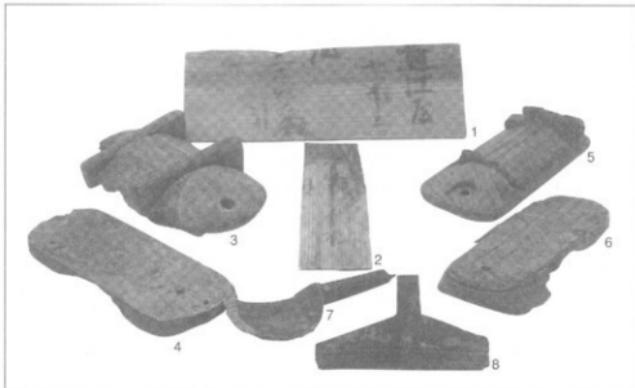
第1図 道路の位置と周辺の遺跡 .....	2
第2図 若林城跡周辺の調査地点と中・近世遺構の状況 .....	7
第3図 調査地点 .....	10
第4図 遺構配置図 .....	11
第5図 S D 1 堀跡平面図・断面図(1) .....	16
第6図 S D 1 堀跡平面図・断面図(2) .....	17
第7図 S D 1 堀跡平面図・断面図(3) .....	18
第8図 S D 1 堀跡平面図・断面図(4) .....	19
第9図 溝跡平面図・断面図 .....	20
第10図 S K 1 土坑平面図・断面図 .....	21
第11図 S K 2 ~ 7 土坑平面図・断面図 .....	22
第12図 出土遺物(1)繩文土器・土師器・須恵器・陶器 .....	23
第13図 出土遺物(2)瓦・銅製品・石製品 .....	24
第14図 出土遺物(3)木製品① .....	25
第15図 出土遺物(4)木製品② .....	26
第16図 出土遺物(5)木製品③ .....	27
第17図 出土遺物(6)木製品④ .....	28
第18図 出土遺物(7)木製品⑤ .....	29
第19図 出土遺物(8)木製品⑥ .....	30
第20図 出土遺物(9)木製品⑦ .....	31
第21図 出土遺物(10)木製品⑧ .....	32
第22図 出土遺物(11)木製品⑨ .....	33
第23図 出土遺物(12)木製品⑩ .....	34
第24図 出土遺物(13)木製品⑪ .....	35
第25図 出土遺物(14)木製品⑫ .....	36
第26図 出土 ド甌の比較 .....	42
第27図 爪の種類の比較 .....	43
第28図 大口北遺跡出土提灯底板とヘギ板 (L61) .....	43
第29図 若林城跡周辺旧字名 .....	45
第30図 若林城跡概要平面図 .....	45
第31図 若林城跡各絵図 .....	45

## 表 目 次

第1表 遺跡地名表.....	2	第4表 出土遺物観察表(1).....	37
第2表 若林城跡周辺の中・近世の遺構と遺跡.....	6	第5表 出土遺物観察表(2).....	38
第3表 南小泉遺跡の中世屋敷跡の消長 (発種園遺跡・若林城跡・国分氏) .....	6	第6表 出土遺物観察表(3).....	39

## 写真図版目次

写真1 若林城跡とその周辺の航空写真.....	51	写真13 SK 2断面(4トレンチ・東から) .....	54
写真2 SD 1確認状況(2トレンチ・西から) .....	52	写真14 SK 3断面(4トレンチ・西から) .....	55
写真3 SD 1完掘状況(4トレンチ・西から) .....	52	写真15 SK 4完掘状況(4トレンチ・南から) .....	55
写真4 4トレンチ・東壁断面(西から) .....	53	写真16 SD 1・SK 1断面(3トレンチ・東から) .....	55
写真5 SD 1断面(4トレンチ・東から) .....	53	写真17 SK 7確認状況(2トレンチ・南から) .....	55
写真6 SD 1完掘状況(1トレンチ・西から) .....	54	写真18 SD 6断面(5トレンチ・西から) .....	55
写真7 SD 1本製品出土状況(4トレンチ・西から) .....	54	写真19 出土遺物(1).....	56
写真8 SD 1断面(3トレンチ・西から) .....	54	写真20 出土遺物(2).....	57
写真9 SD 1断面(5トレンチ・北から) .....	54	写真21 出土遺物(3).....	58
写真10 2トレンチ西壁断面(SD 1・SR 1重複状況) .....	54	写真22 出土遺物(4).....	59
写真11 SD 1・SR 1重複状況(1トレンチ・西から) .....	54	写真23 出土遺物(5).....	60
写真12 SD 3完掘状況(4トレンチ・南から) .....	54		



SD 1-B出土木製品

1. L 57 木札
2. L 59 ヘギ板
3. L 16 差歯下歫
4. L 2 無歯下歫
5. L 22 差歯下歫
6. L 1 無歯下歫
7. L 25 汁杓子
8. L 28 刷毛

## I 調査に至る経緯

本調査は、都市計画街路「南材木町・古城線」拡幅工事に関わる事前調査である。「南小泉・古城線」は、仙台市若林区の通称「宮城野萩大通り」から西にのびる都市計画街路で、建設工事は平成5年に始まり、過去それに伴う調査（南小泉遺跡第22次調査－斎野：1994）も実施されている。今回の工事範囲は、その大半が若林城跡遺跡範囲に含まれるため、道路部街路課と協議の上、事前調査を実施した。試掘調査は、平成10年9月25日～9月28日にかけて2カ所にトレーニングを設定し行った。その結果、当初の予想通りいずれのトレーニングでも若林城の堀跡が確認されたため、本調査の実施が必要と判断した。発掘届は、平成11年5月13日に提出され、それを承け、平成11年8月23日より本調査を開始した。

### 調査要項

- 1 遺跡名 若林城跡（宮城県遺跡番号01030 仙台市遺跡番号C-511）
- 2 調査原因 都市計画街路「南材木町・古城線」拡幅工事
- 3 所在地 仙台市若林区古城二丁目地内
- 4 調査対象面積 1,375m<sup>2</sup>
- 5 調査面積 表土掘削面積…約760m<sup>2</sup> 実調査面積（遺構検出面積）…約370m<sup>2</sup>
- 6 調査期間 <試掘調査> 平成10年9月25日～9月28日  
 <野外調査> 平成11年8月23日～10月26日  
 <室内整理> 平成12年2月1日～3月17日 平成12年11月2日～12月21日  
 平成13年1月9日～3月23日
- 7 調査主体 仙台市教育委員会
- 8 調査担当 仙台市教育委員会文化財課
- 9 担当職員 <試掘調査> 鶴原信彦 渡部弘美 伊東真文 松本知彦  
 <本調査> 渡部弘美 伊東真文
- 10 野外調査参加者  
 赤間淳子 芦野ヒデ子 板橋祝子 伊東恵美子  
 伊藤はるよ 遠藤清子 大内孝子 奥田美津子  
 奥山妙子 奥山祐子 小野榮子 小野さよ子  
 柿沼幸子 葛西郁子 菊地和江 日下啓子  
 酒井正雄 佐藤すみ子 佐藤よし子 佐野靖男  
 萩田徳郎 庄子範男 鈴木貴美子 曽根ちよ子  
 種田ふくよ 土屋みどり 中里とわ子 永野くみ子  
 永野泰治 針生あなよ 針生せつ子 三浦市子  
 鎌水芳子 吉田アキヨ 依田光子 渡辺イチ子  
 渡辺真子
- 11 室内整理参加者  
 赤間 伊東 大内 小野 柿沼 菊地 鈴木 曽根  
 種田 針生(せ) 山田 依田



調査風景

## II 遺跡の位置と環境

### 1. 遺跡の位置と地理的環境

若林城跡は、JR仙台駅の南東約3km地点に位置している。遺跡の規模は、南北が約300~320m、東西が約360~400mで、遺跡面積は約117,500m<sup>2</sup>である。遺跡内は、若林城の堀跡の名残を残す凹地、城内の土塁跡など起伏に富むが、標高11~14mの範囲内にある。

この若林城跡を含む南小泉地区<sup>1)</sup>は、広瀬川（流路長：約40km・流域面積約310km<sup>2</sup>）左岸の自然堤防上に位置し



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

遺跡名	文 地	時 代	遺跡名	文 地	時 代
1 若林城跡	自然堤防	古墳・平安・中世・近世	27 尾山遺跡	自然堤防・後背湿地	後世・古墳・奈良・平安・中世・近世
2 四の泉丘跡	自然堤防・後背湿地	純文・後立・古墳・奈良・平安・中世・近世	28 西ノ浦遺跡	自然堤防	純文・後立・古墳・奈良・平安・中世
3 石船山遺跡	自然堤防	純文・後立・古墳・奈良・平安・中世・近世	29 田ノ森遺跡	自然堤防	田ノ森・純文・後立・古墳・奈良・中世・近世
4 佐原前山跡	自然堤防	純文・奈良・平安・中世・近世	30 鶴見遺跡	自然堤防	純文・後立・古墳・平安
5 高塚山古墳	自然堤防	古墳	31 愛宕山御所跡	丘陵地形	古墳・奈良
6 佐原城内跡	自然堤防	西朝	32 伊勢寺跡	丘陵地形	古墳・奈良
7 須和田分水跡	自然堤防	奈良・平安・中世・近世	33 伊勢山遺跡	丘陵地形	純文
8 鮫田岡分水跡	自然堤防	奈良・平安	34 関原山遺跡	自然堤防	古墳
9 志成遺跡	自然堤防	奈良・平安	35 旗ヶ崎城跡	丘陵	中世
10 行者塚跡	自然堤防	中世	36 旗ヶ崎遺跡	丘陵地形	純文・奈良・平安
11 天神社遺跡	段丘	純文(淡路)	37 白石山御所跡	丘陵	純文
12 田井町御所跡	段丘	中世	38 八木山御所跡	丘陵	純文・奈良・平安
13 田井城跡	冲積平野	中世	39 田丘山遺跡	丘陵	純文
14 丸山遺跡	自然堤防・後背湿地	中世	40 二ノ沢遺跡	丘陵	純文
15 朝日山遺跡	自然堤防	奈良・平安	41 一ノ堀跡	後背湿地	古墳
16 千七家遺跡	自然堤防	平安	42 丸山里遺跡	丘陵	古墳?
17 千七家末尾跡	自然堤防・田河川	先生・古墳・奈良・平安・中世・近世	43 丸山一丁目遺跡	丘陵	純文・後立・奈良・平安
18 月影城跡	自然堤防	平安	44 朝日町遺跡	丘陵	奈良・平安
19 田中城跡(三郎)	後背湿地	奈良・平安・中世	45 上ノ内遺跡	丘陵	純文・奈良・平安
20 田中城跡	自然堤防・後背湿地	中世	46 上ノ内御所跡	丘陵地形	奈良・平安?
21 仲村遺跡	自然堤防	純文・後立・古墳・奈良・平安	47 壱ノ口遺跡	丘陵	純文・後立・平安
22 仲村1号跡	自然堤防	古墳・奈良・平安	48 二神原遺跡	段丘	純文・平安
23 中村西走跡	自然堤防	先生・古墳・奈良・平安	49 金谷川遺跡	段丘	古墳
24 仲村2号跡	自然堤防	古墳・奈良・平安	50 京原跡	段丘	先生・古墳・奈良・平安
25 沢井遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安	51 三ノ坂跡	段丘	奈良・平安
26 北ノ城跡	自然堤防	40世・近世	52 向山城跡	丘陵	中世・若葉

第1表 遺跡地名表

ている。この地域は、大きくは六郷堀<sup>②</sup>、按配堀、七郷堀の3本の用水堀が東流している。これらは、東に行くほど分岐を重ね、仙台市東部の田園地帯を潤している。七郷堀は、若林区役所付近で、東に向かう仙台堀と、陸奥国分寺跡～陸奥国分尼寺跡の間へ北進する高砂堀に分岐する。按配堀は七郷堀から分岐するもので、遠見塚付近から佐久間堀と呼称される。六郷堀・按配堀・七郷堀の起源を記す史料はないが<sup>5</sup>、六郷堀・七郷堀近隣の調査<sup>③</sup>では、現在の流路とほぼ併走する古代～中世の河川跡を検出しており、この二つの用水堀の起源は旧河川にあると思われる。そのように考えると、少なくとも若林城跡北面から七郷堀方向に向かっては、旧河川に隔てられた東西に細長い自然堤防があり、南小泉遺跡西部～養種園遺跡の基盤となっている。また、若林城跡2次調査（佐藤甲二：1986）や、若林城跡の南東部の9次調査（菊地・佐々木：1983）では、北西～南東方向の河川跡（年代不明）を確認しているが<sup>6</sup>、この北東にある遠見塚にも発達した自然堤防があり、古墳時代以降集落が営まれている。それに対し、遠見塚古墳の北西～北側に向かっては町並みの乱れが顕著であり、小流域が複雑に入り込んでいると考えられる。以上のように、南小泉地区の微地形は、微高地と旧河道が入り組む複雑な様相を呈するなかで、比較的よく発達した二つの自然堤防を指摘できる。また、南小泉に入り込む旧河川は、生活用水、水運、また東方に所在したと見られる生産域への用水の便といった、水の恵みをもたらし、人々の生活を支えてきたのである。

## 2. 周辺の歴史的環境

若林城跡がある南小泉地区には、南小泉遺跡・養種園遺跡・保春院前遺跡・遠見塚古墳・法領塚古墳など多数の遺跡がある。以下、これらの諸遺跡の調査成果を含めながらこの地域の歴史を概観する。なお、中・近世以降についてはやや詳細に記述を行う。調査名について特に遺跡名を記さないものは南小泉遺跡を指す。

**〔縄文時代〕** 現在のところ、縄文時代の遺構は確認されていないが、包含層が確認されており、土器が少量出土している。17次調査（佐藤洋：1990）では大木10式～南境式の土器1点、19次調査（佐藤淳：1990）では晩期最終末大洞A式の土器（図示25点）が石器とともに出土している。養種園遺跡1次調査（佐藤洋：1997）では下層調査の際、黒色シルト・粘土層<sup>④</sup>より4点の繊維土器が出土しており注目される。養種園・保春院前遺跡では、その黒色粘土層よりも上位の黄褐色粘土質シルト（地山）層も、後・晩期（大洞A<sup>1</sup>主体）の包含層である。

**〔弥生時代〕** 昭和14、15年の霞目飛行場拡張工事の際、故伊東信雄氏らによって弥生時代の遺物が採集され、南小泉遺跡発見の契機となった。遺物は、大量の樹形圓式期の土器・石器で、土偶も1点見られる。また、合口土器棺15組も出土し、墓域が営まれていたことも明らかとなった。この事実から、住居跡の発見こそないものの、南小泉遺跡は弥生時代の中期を主体とする集落遺跡と認識されている。その後、霞目飛行場にはほど近い遺跡東部で実施された12次調査（佐藤甲二：1985）で、溝跡1条を検出し、樹形圓～天王山式の土器が出土している。養種園遺跡2次調査では、中世以降の遺構群が密度濃く分布する中で、樹形圓式期の土器棺墓を1基検出しており注目される。

**〔古墳時代〕** この地域では、遠見塚古墳・若林城内古墳・法領塚古墳の3基の古墳が調査されている。4世紀末に築造された遠見塚古墳は、東北地方の代表的な前方後円墳である。被葬者は初期大和政權と関係を取り結んだこの地の大首長と見られている。若林城内古墳は、若林城跡2次調査（佐藤甲二：1986）で発見された推定直径22mの円墳である。円筒埴輪が伴い、年代は5世紀後半～6世紀初頭である。法領塚古墳は、聖ウルスラ学院構内にある直径32mの円墳である。主体部は横穴式石室で、年代は7世紀前半である。古墳時代後期は古墳から横穴墓への過渡期にあたり、横穴式石室を持つこの古墳は貴重なものである（整備保存されている）。法領塚古墳の南南西380m地点には、猫塚古墳（少林神社境内）が、同じく南方280m地点には蛇塚古墳があるが詳細は不明である。

この地域の古墳時代の集落のようすは、各調査で徐々に明らかになってきている。前期の遺構は現在のところ少なく、住居跡は遺跡中央部南端で実施された20次調査（工藤哲司：1991）で1軒、他は遠見塚古墳西南西450m地点の26次調査（五十嵐：1998）で河川跡が確認されているのみである。中期になると、広範囲で住居跡が確認され、

集落の成長の様子をうかがうことができる。また、遺構からは土器のほか石製模造品も多数出土し、これらを用いた祭祀が盛んであったことがわかる。遺跡東部の12次調査では、この時期のカマドが見られない住居跡を検出し、古墳時代中期が地床炉からカマドへの移行期にあたることが立証された。16次調査（佐藤洋：1990）では、石製模造品の製作工房と推定される住居跡や粘土溜めをもつ竪穴遺構を検出し、鉄滓も出土していることから、この時期の集落内の生産部門を担った空間と考えられている。また、17次・30次（工藤・渡部・根本：1998）調査地点は、古墳中期～後期にかけての遺構密度が他の調査地点に比して高く、集落の中心として認識されている。養種園遺跡1次調査でもこの時期の住居跡を5軒確認している。

〔飛鳥時代〕 この時代、若林城跡の南方1.5kmの地点、広瀬川右岸に郡山遺跡（官衙）が出現する。この官衙跡は二期に区分され、時期はⅠ期官衙が7世紀半ば～7世紀末、寺院が付属するⅡ期官衙が7世紀末～8世紀初頭である。南小泉地区では、この官衙跡に前後ないし併行する集落跡が若林城跡北面の22次調査地点で発見されている（斎野：1994）。特に、Ⅰ期官衙造営以前一いわゆる「プレⅠ期」～Ⅰ期官衙の時期には、幅7mの大溝で区画された住居跡群がみられ、さらに関東系土器の一定量の出土から、当集落が関東からの移民に関わる可能性を示している（斎野：1994）。この時期の住居跡は、22次調査地点より西側の23次（斎野：1994）・31次（工藤・渡部・根本：1998）調査地点でも確認されており、関東系土器を伴う集落の広がりが推測される。31次調査の住居跡は、鍛冶に関わる遺物も伴っており注目される。なお、22次調査地点の集落はⅡ期官衙以降は散在的となる。

〔奈良時代〕 この時代前半には、陸奥国府が郡山から多賀城に移る。8世紀中葉<sup>85</sup>には、若林城跡北方1.5kmの木ノ下の地に陸奥国分寺・国分尼寺が造営される。この地域の奈良時代の様相はこれまで不明な点が多かったが、近年実施された南小泉遺跡北西部の28次調査地点、その西方の養種園・保春院前遺跡において奈良時代後半～末を主体とする住居跡を30軒程発見している。住居跡群の特徴としては、軸線をほぼ真北方向にそろえ、一定の規格性が見て取れることから、北方1kmに位置する陸奥国分寺・同尼寺に関わる計画集落の可能性がある。土師器壺は内外面ミガキ調整で器高が低く扁平ないわゆる「丸底風平底」が主体をしめるが、段ないし沈線を有し丸底なもの、外面調整がヘラケズリ・ヨコナデで行われるもの等これらと異なるものも含まれており、住居跡の所属年代がさらに細分される可能性がある。今後集落の変遷が明らかになると期待される。また、養種園遺跡2次調査では起源が奈良時代後半に遡るかと思われる流路ないし水路跡を確認しており、集落との関わりが注意される。

〔平安時代〕 この時代、南小泉遺跡中央部～西部にかけての広い範囲で、9世紀代を主体とする住居跡が散在的に確認されている。その中にあって若林城跡南東方300mにある6次調査（渡部弘美：1983）地点、同じく東方400mにある11次調査地点では、墨書き土器を含む土師器壺のまとまった出土が見られる。6次調査1号住居跡は、隅丸長方形で床面積60m<sup>2</sup>近いもので、この時代の住居跡としては異例の規模を誇るが、2基の貯蔵穴からは固化されただけでも70個体以上のロクロ土師器壺が出土している。うち30点に墨書きが見られ、「比」と書かれたものが大半を占める。他に高台付皿や灰釉陶器の影響が指摘される碗・小瓶がある。11次調査（結城・佐藤洋：1984）28号土壙からは、土師器壺16点と高台付壺2点が一括出土しており、うち9点に墨書きがある。このような出土状況は、他の調査地点では見られないものである。若林城跡周辺の調査（4<sup>86</sup>・6・7<sup>87</sup>・9・11次）では、計31軒の住居跡が確認されており、周辺地域が平安時代前半の集落の極をなす可能性が高い。若林城跡2次調査でも、住居跡4軒、竪穴遺構3基等を検出している。

10世紀代では、保春院前遺跡で一辺1.5m程度の小型住居跡<sup>88</sup>が調査されている。21次調査（金森・稻葉：1992）では、堆積土中に10世紀前半頃に降下した灰白色火山灰を含む小溝群を発見している。11世紀～12世紀後半にかけては、仙台平野では考古学的発見例が激減し様相がつかめなくなる。その背景として竪穴住居の消滅という居住形態の変化と、土器から木器へという食器の変容が考えられている。

なお、建立以来当地に深く関わる陸奥国分寺は、第3期多賀城政府を倒壊させた869年の貞觀の大地震で被災し

たが、まもなく復興されたと見られる<sup>13</sup>。しかし、934年に七重塔が雷火のため焼亡（『日本紀略』）すると以後復興されることではなく、僧の居住は別としても、その尙容は衰えたものとみられる<sup>14</sup>。

【中世一鎌倉・南北朝・室町時代】 1185年に平氏を滅ぼした源頼朝は、これに続き1189年に奥羽に侵攻、奥州藤原氏を滅ぼした。この文治五年奥州合戦の際、奥羽兵は本陣を国分原鞭櫛に置くが、阿津賀志山の防壁が抜かれるなど、主将藤原泰衡は鞭櫛から平泉に逃亡し、その後鎌倉の兵による残党狩りの際に、陸奥国分寺は悉く焼失したという<sup>15</sup>。この文治五年奥州合戦の後、奥羽の地には、鎌倉佛家人が地頭として下向する。当地域が含まれる宮城郡南部を領有したのは、有力な鎌倉御家人千葉常胤の五男胤道で、国分荘を領したことから以後国分氏を称したといわれている<sup>16</sup>。

12世紀後半には、掘立柱建物と井戸・土坑から構成される原初的な中世的屋敷が検出されている（17次調査屋敷C<sup>17</sup>）。13世紀になると、南小泉遺跡中央部には、かわらけや高級陶磁の出土から領主クラスの居館と考えられる屋敷Bを中心に、半町規模クラスの屋敷がいくつか成立する（第2・3表、第2図<sup>18</sup>参照）。屋敷Bは、14世紀前半頃には櫛や檜によって防御性を増し、14世紀中葉まで存続するが、その後14世紀後半には、幅15m・深さ3m程の巨大な堀と土塁を持つ城館に発展し、この頃の屋敷跡として幅4~5mの溝に囲まれた屋敷Iが想定されている（田中：1997）。他方、養種園遺跡ではこの時期の遺構として、1次調査ではほぼ真北方向に軸線を有する集落の一部を、2次調査では土坑墓を60基以上検出している。土坑墓は七郷堀の祖形と見られる河川跡の南側に展開しており、土坑墓群の東側では道路遺構を検出している。

【戦国時代～近世初頭】 15世紀中頃には、南小泉の城館跡は廃絶し、それに代わって15世紀末～17世紀初頭にかけて西方のより標高の高い養種園遺跡に大規模な遺構群が展開する。遺構には、区画溝<sup>19</sup>・掘立柱建物<sup>20</sup>・廃棄土坑・井戸・竪穴建物がある。これらの遺構群の一部は、その規模から家臣クラスの居住地と考えられる。遺跡東方120m地点（南小泉遺跡）では、戦国時代の道路跡も発見されている<sup>21</sup>。遺物には、陶磁器・石製品・瓦質土器・土師質土器<sup>22</sup>等があるが、坩埚（ないし取鍋）・繩の羽口・鉄滓・鍛造剥片等、金属製品の製造に関わる遺物が相当量出土している。1次・2次調査では、鍛冶炉・廃棄土坑からなる鍛冶工房も調査されている。出土した坩埚の中には、金・銀の合金が付着したものや銅が付着したものも見受けられ、鉄滓が大量に投棄された土坑もある。また、保春院前遺跡の戦国時代末～近世初頭の土坑からは、この時期のものとしては東北地方では稀少な鉄鍋の鋳型が出土している。以上のことから、金属加工に関わる職人の居住<sup>23</sup>も明らかとなった。

これら養種園遺跡の遺構群は、若林城ないしそれに北接する地点に存在が推定される国分氏居城の小泉城の城下町として評価されている。その都市的な場の範囲はこの頃国分氏が保護していた陸奥国分寺と同寺域内にある国分氏神の白山神社を包摂する範囲と推定されている（以上、市史：2000）<sup>24</sup>。

養種園遺跡の遺構群は、出土遺物から見て15世紀末には成立したと見られるが、国分氏没落直後の16世紀末から17世紀初頭に一つの大きな画期を見いだすことができる。この時期には、1次調査II区に建物・堀を囲い込む大溝が出現する。また、2次調査区でも区画溝が新たに出現している。また、養種園遺跡西部の鉄滓が大量投棄された16世紀末～17世紀初頭の土坑や、保春院前遺跡の16世紀後半から17世紀初頭の瓦質土器が共伴する鉄鍋の鋳型が出土した土坑の存在は、金属加工職人の居住地が西方へ移動したことを示唆している。この頃には、前代の職人居住地を示す鍛冶炉は永楽通寶<sup>25</sup>6枚の六道錢を伴う土坑墓に切られ、逆に前代に掘られた2次調査区の大溝は、この時期には中位まで埋没し溝としての機能を失い、鍛造剥片が大量に投棄されている。これらも金属加工職人の西方への域内移動を示している。この16世紀末～17世紀初頭には、南小泉遺跡の屋敷跡・堀跡の一時的な再興が見られる（田中：2000）、これらの現象は国分氏領國から伊達氏直轄領という支配者の変化と時期的にほぼ整合する。

【近世一日町住人の城下移住から若林城下町形成まで】 廉長5（1600）年12月、政宗は青葉山の地に縄張りを行い翌廉長6（1601）年1月より仙台城の築城を開始、廉長7（1602）年5月には一応の完成を見た<sup>26</sup>。これと併行

No	遺構・出土品等社名	年 代	聞 考
1	雁巣を区画する塀	戰国時代？	上輪3m、深さ1.3m往、原山V字型。石臼、板状陶土（馬鹿足なし）。北邊は、地中で遮られる。北側中央に5束又は3束で南北走る北側走壁、建物は見えず、一部に無土・灰化物が検出、3/4枚位は人為的に切られる。
2	大雲寺前に施設した大壇	16世紀末～	上輪幅5.5m、深さ2.5m。原山V字型で、土中に屈曲。
3	大空寺前に施設した区画柵	16世紀末～17世紀初頭	上輪1m、深さ80cm。敷地内の小区画の柵です。
4	銀御伊御	戰国時代	戰国時提出。
5	銀造作所・堤壩が大量に出土した人骨	戰国時代～近世初期	上輪1m、深さ2m程。廻りかいてV字型。中層位より則て古来古見。それ以下の層は、大空寺まで。鐵鋸片等は中層より出土。最上層は、人為的に埋められている。
6	鉢谷が大量に出土した人骨	近世初期	鈴鹿丹波造跡（大空寺）：縄文土器、輪文土器、木炭出土。
7	鉢谷の堤壩が出土した人骨	戰国時代～近世初期	16世紀後半～17世紀初頭の瓦張鉢跡併存。
8	墳主が出土した人骨（複数あり）	戰国時代	下層：大空寺Ⅱ・Ⅲ期。 大崩崩の痕が廻り古来古見。
9	墳主が出土した井戸跡	戰国時代～近世初期	井戸跡の痕が廻り古来古見。
10	安安土塁	日町鹿島～石城体地下以前？	堆積：古空寺・明・青花。
11	発現土塁	若林町下町原	堆積：古空寺（明治海岸製品）。
12	井戸跡	若林町下町原	指標：古空寺Ⅰ期（日向川系流）他に井戸探査等出土。
13	土塁跡	篠原東～近世初期	水桶形甕も古空寺全セト。
14	土塁跡	戦国時代～近世初期	六道鏡に無文鏡1枚を含む。
15	上就墓	若林町下町原	全筒形丸肩出土。
16	穴柱理鉄錆	戰国時代？	50枚（明鏡、9枚を含む）。
17	志成町土塁	中世～戦国以前	36枚（明鏡含まず）。
18	庄廟寺～大量出土品	近世？	金鏡、銅鏡7約1,000枚。
19	平安道賀出土土塁	近世初期？	地主：廻田上（木板柱こましまり、六邊錆か？）。
20	平安道賀出土土塁	近世初期？	廻田上：廻田上（この場所に土塁基盤、六邊錆か？）。
21	追跡跡	中世初期～下限不明	戦国期の追跡群に切られる。
22	追跡跡	中世初期？（戦国以前）	土塁基盤と重複無し。
23	追跡跡	上限不明～戦国期？	ハラス敷き（瓦質土器埋蔵出土）。
24	河内路	不明	
25	河内路	不明	
26	河内路	中世～	鬼押舟下部の荷物帶とそれより上位の層は近世。下部に中世の遺物しか合まない層あり。
27	河内神（木路？）	奈良時代～?	島主：廻田上（木板柱こましまり、六邊錆か？）。
28	少林寺碑・御屏	不明	表記屏。
29	少林山保春庵	寛永12（1635）～	法燈院が創立した十三堂院にあたりその書籍のため創立。關山北山賞賛寺碑和扁額。
30	象頭社	戦国？	龍虎坐像を納める祠に、因に分霊祠と呼ぶ。近世には火除祭。
31	白山神社	古代～？	分霊守護寺として祀られる。近世には火除祭。
32	須彌神社（牛嶽天平・木ノ下）	古代～？	印傳寺守護の祠。十八番の歌のとして祀られる。印傳寺は火除祭。
33	須彌神社（河内郡）	不明	もとはノハナ下野守神の祠に復活した場合が河村寺（2000）。
34	毘沙門堂	不明	名取坂上にあったのを更に4（1627）年まで町方に移した。
35	三室堂霊光社	近世～	文德3（1503）年に華嚴教が開祖在前と号したといふ。近世には火除の神として南御治町の鐵轂殿が供奉。
36	愛宕山御坂（指定地）	16世紀前半？	瑞應4（1503）年に華嚴教が開祖在前と号したといふ。近世には火除の神として南御治町の鐵轂殿が供奉。
37	越ヶ崎城跡	中世～戦国？	16世紀の間に一時的に前田政長が築いた「手野城」に比定。系図によれば、宗政は手野口城から小虫に移る。

第2表 茅林城跡周辺の中・近世關係遺跡・遺構

道跡・庄敷など	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀	17世紀
岸敷A (15 - 26地)		---				
庄敷B (16)		---				
岸敷C (16)		---		---		
庄敷C (17)	?	---		---	---	---
岸敷D (17 - 30)		---				
庄敷E (17 - 30)		---	區域		區域	
岸敷F (17 - 30)		---				
岸敷G (17)		---				
庄敷H (18)		---		---		
庄敷I (4)		---		---		
庄敷J (11)		---				
庄敷K (11)		---				
岸敷L (9)		---				
庄敷M (9)		---				
豪族居宅跡						
若林城跡					---	---
田舎城	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)(7)(8)(9)(10)(11)

後石器時代1次期まで、この時期の獨立性出物群が発見されている。

②個会員、この頃宮城県議会として下向を

②この項、賜姓同姓式へ移行か。

③「平姓圖分系圖」(享保年間)によれば、日世盛行は文明12(1480)年に隠居し小泉に住むとある。

④康生3(1457)年銘上爰子源氏神社棧札「國分下野守宗治」  
⑤この頃、飯高城上空襲。永正3(1506)年小笠舟殿が飯高本郷

⑤この頃、田守氏と交戦。承和3(1006)年小幡合戦で田守方が園分方を敗る(田守方の源氏物語三郎の事件)。

⑥永正14(1517)年諸上谷刈八木訖明神様札「國分源正少弼玄成」息子「定

⑦天文5(1536)年銘上谷刈八木訖明神棟札「藤原朝臣長沼式部少輔宗治」

第3表 売小自走跡の内

第3表 間小泉遺跡の中世屋敷

<sup>④</sup>天文11(1542)年天文の乱……畠山宗政、伊達稙宗方につき、留守景宗を松森に破る(非定2000)。

⑨永禄3(1560)年鉢瀬勘神社様札「国分宗政」「国分宗元」

<sup>20</sup>水野 5 (1562) 年鉢上谷刈八木沢明神様札、「郷原朝臣長沼卿六大諸宗家」  
「元和五年正月二日」。同前文所引資料、「元和五年正月二日」。

弘治7(1564)年 保壽寺梵經銘「國分施主守非政」  
裏「保壽寺寫經」(卷頭1955)

〔天正5(1577)年 伊達政宗・部隊主(將軍) 国分領〕

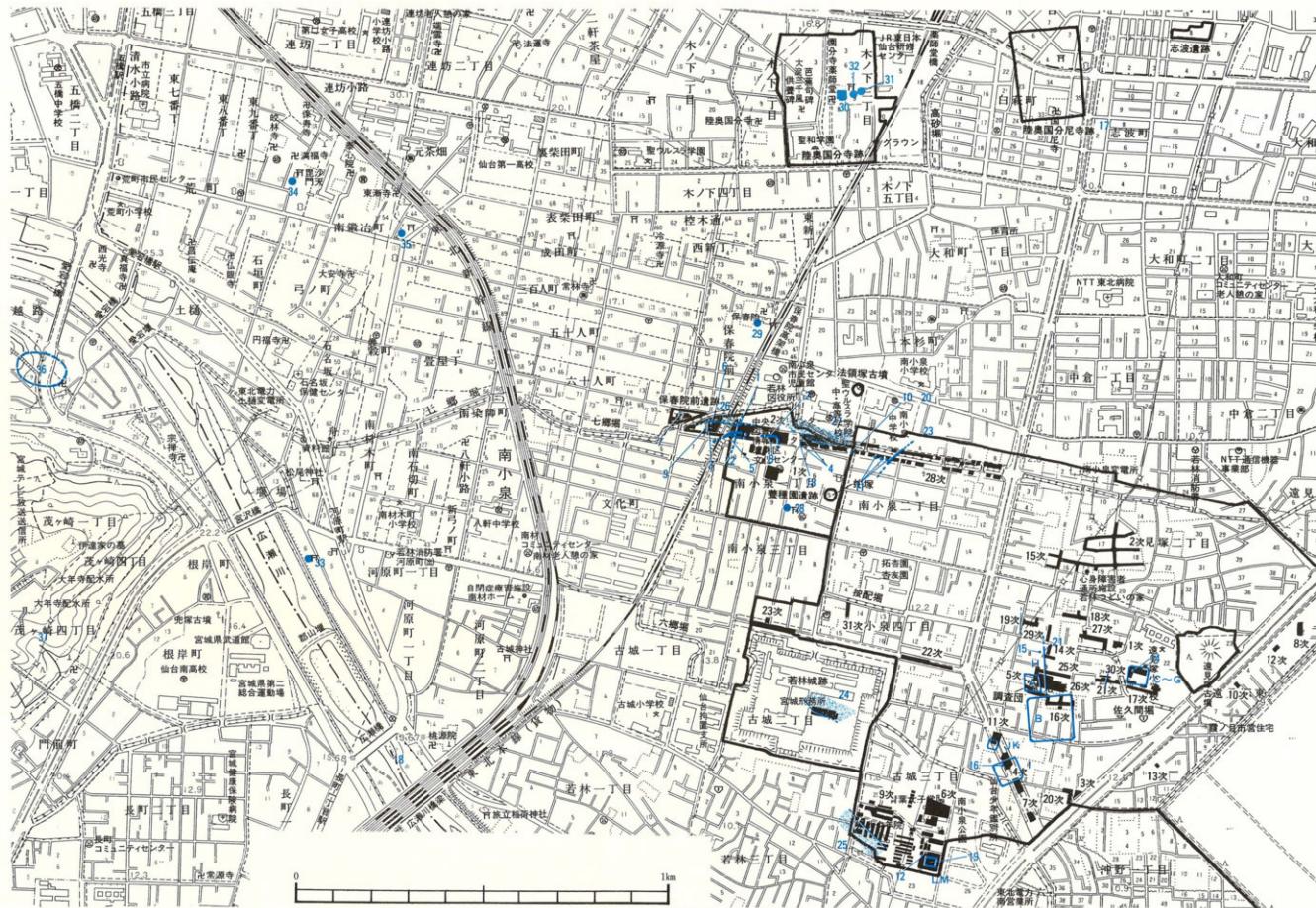
◎天正13(1585)年 隅奥国分寺覺師如來像厨子聯文

◎天正14(1586)年 国分家中に騒動、翌年国分氏威

馬と養種園遺跡：若林城：周辺氏

## 長と實権園道跡・石林城・園分氏

第3表 南小鳥遺跡の由世屋敷跡の消長と養種園遺跡・若林城・國分氏



第2図 若林城跡周辺の調査地点と中・近世遺構の状況

して城下町の建設が進められたが、慶長10（1605）年までには国分日町の住人は城下に移り（佐藤洋：1997）、国分町が割り出された<sup>222</sup>。しかし、この動きは戦国時代以来の都市空間の消滅を意味するものではなく、南小泉遺跡28次調査では、養種園遺跡に隣接する調査地点で、国分町の割り出しから寛永4（1627）年の若林城下町の形成に至る20数年間の枠内に収まる土坑を1基検出している<sup>223</sup>。また、この調査区では土坑墓を数基検出している。17世紀前半に流通したとされる「平安通寶」<sup>224</sup>が後世の盛土から出土している。六道銭が巻き上げられた可能性があり、これらの土坑墓群の年代の一端を示すものと考えられる（渡部・伊東：2000）。

慶長12（1607）年には陸奥国分寺薬師堂が造営され、国分寺寺域内にある国分氏の氏神、白山神社の祭礼には国分氏の遺臣（国分侍・国分衆）が毎年3月3日に流鏑馬の神事を行うのが慣しだったという。これらのことからも、陸奥国分寺～養種園遺跡～「小泉城」にいたる都市空間は、若林城の築城に伴う小城下町形成の時期まで大きく衰退することなく維持されたものと考えられる。

【近世一若林城とその城下町】 寛永4（1627）年、政宗の「屋敷」新築の願いを許可する旨の二月廿三日付「老中奉書」を受け、政宗は早速若林城の造営に着手する。若林城への移転を受けて、城下には一門・家臣団の屋敷<sup>225</sup>があり、「米町」「絹布町」という町人町もあった（市史：1954）。町奉行も2名置かれていたという（「奥山常良書状」）。戦国時代に起源を持つ（佐藤洋：1997）若林城下町の軸線<sup>226</sup>は、北は連坊小路、西は荒町、南西は南材木町・河原町、南東は若林城跡南東方、東は遠見塚古墳の西、北東は中倉付近まで、所々小樹形と思われる屈曲を持ちながら、貫徹している<sup>227</sup>。この範囲に含まれる町は、足軽町と町人町に大別される。足軽町は、連坊小路が寛永4・5（1627・1628）年頃、三百人町<sup>228</sup>は寛永7（1630）年、六十人町・五十八人町・成田町・柴田町・弓ノ町といった他の足軽町も三百人町とほぼ同時期か寛永10（1633）年までには成立したと推定される（『宮城県の地名』）。近隣の町人町では、寛永年間以前には舟丁（慶長18年初出）、荒町・石垣町は若林城築城に絡まる寛永4・5（1627・1628）年頃、南鍛冶町・穀町は寛永5（1628）年～寛永11（1634）年頃に割り出されたと推定されている（『宮城県の地名』）。また、南材木町は「若林材木町」として寛永11（1634）年に初出する（永沼頼家文書）。これらの町々は、若林城の築城と同時期かその後に割り出されており、若林城築城が仙台城下町の東南方への拡張の契機となったことを示している。

若林城とその城下町が存続した時期、南小泉遺跡では当時期の遺構が数地点で発見されている<sup>229</sup>。しかし、仙台堀（七郷堀）の北側の調査（南小泉28次）では、戦国時代の道路跡を除き、中・近世の遺構は確認されていない。調査区の制約上断言することはできないが、若林城下町域の北限は、部分的に七郷堀付近となる可能性がある。今後の発掘調査成果の蓄積が期待される。

【近世一若林城廃絶後】 寛永13（1636）年5月、政宗は江戸で死去し、その後若林城は廃城となった。城周囲の家臣屋敷も順次仙台城下に移り、若林城下町の一部は仙台城下町に統合され（菅野：1996）、残りは在郷分（小泉村）となった。寛永16（1639）年、二代藩主忠宗により仙台城二ノ丸の造営が始まるとき、若林城は解体され建築物は二ノ丸へ移築された。瑞鳳殿御供所は「竹櫻」と称した若林城内の書院、片平丁にあった茂庭氏屋敷の門は若林城の城門、八ツ坂松音寺山門も若林城から移したものという（三原：1948）。若林城解体の後は、藩の御薬園になった（菅野：1996）。

在郷分となったとはいえ、養種園遺跡地内に、二代藩主忠宗が万治年間（1658～1661）頃に御仮屋<sup>230</sup>置き、その後元禄5（1692）年には四代藩主綱村がこの地に「別荘」を造営した。これは一時衰えたが、宝暦年間（1751～1764）に六代藩主宗村がこれを再興した<sup>231</sup>。宝暦3（1753）年には、小泉屋敷に重層書院が完成したといわれる（以上、佐藤洋：1997）。養種園遺跡1次・2次調査では、屋敷を区画する堀跡・池跡・溝跡・土坑・井戸跡など、伊達家別荘に関わる遺構を検出している。若林城廃絶後、その領域を狭めながらも依然として当地にはこのように藩施設が置かれ、藩主・家臣団と関わりの深い土地であったことが知られる。また、保春院前遺跡の近世遺構からは相当量の溶解

炉・鋳型・輪の羽口の破片と鉄滓が出土しており、鋳造に関わる職人の居住が考えられる。金属加工職人の住む町は北鍛冶町・南鍛冶町であるが、これは米沢以来の伊達氏に関わる工人集団である。保春院前1次調査で明らかとなつた工人集団の居住地は、養種園遺跡の戦国期～近世初頭の調査成果を踏まえれば、系譜の異なる国分氏に関わるものだった可能性がある。なお、養種園・保春院前遺跡の北には「鍛冶屋敷」の旧字名が見られる（第29図参照）。

〔近代以降〕 明治維新後の若林城跡は、周知の通り宮城刑務所として現在に至るが、数少ない資料（宮城刑務所：1979、柴：1990）と聞き取り調査からその変遷を簡略にまとめてみた。

明治10(1877)年 西南戦争国事犯の収容と監獄改良の目的で、若林城跡に監獄の新築に着手する。六角放射状の「六角塔」の建築様式はフランスにならったものである。

明治12(1879)年 宮城集治監が設置される。宮城監獄署から西南戦争国事犯の移送を承ける。

明治13(1880)年 宮城監獄署から雄勝浜石盤採取作業を継承し、雄勝出役所を設置する（西南戦争国事犯も出役）。

明治19(1886)年 木柵囲障680間を自所製煉瓦石をもって改装、煉瓦堀とする。

明治29(1896)年 三陸大津波で雄勝出役所が甚大な被害を被る。翌年廃止。

明治36(1903)年 監獄官制発布により、宮城監獄となる。

大正11(1922)年 宮城刑務所と改称する。

昭和25・26(1950・1951)年頃 中程まで埋まつた堀跡を整地し、官舎を建設する<sup>⑩</sup>。

昭和48(1973)年 六角塔解体。この際、その廃材や炭殻を使って、堀を現地表面まで埋めたという。

昭和53(1978)年 宮城県沖地震で、外堀倒壊。翌年復旧する。

### III 調査経過と調査概要

#### 1. 調査方法

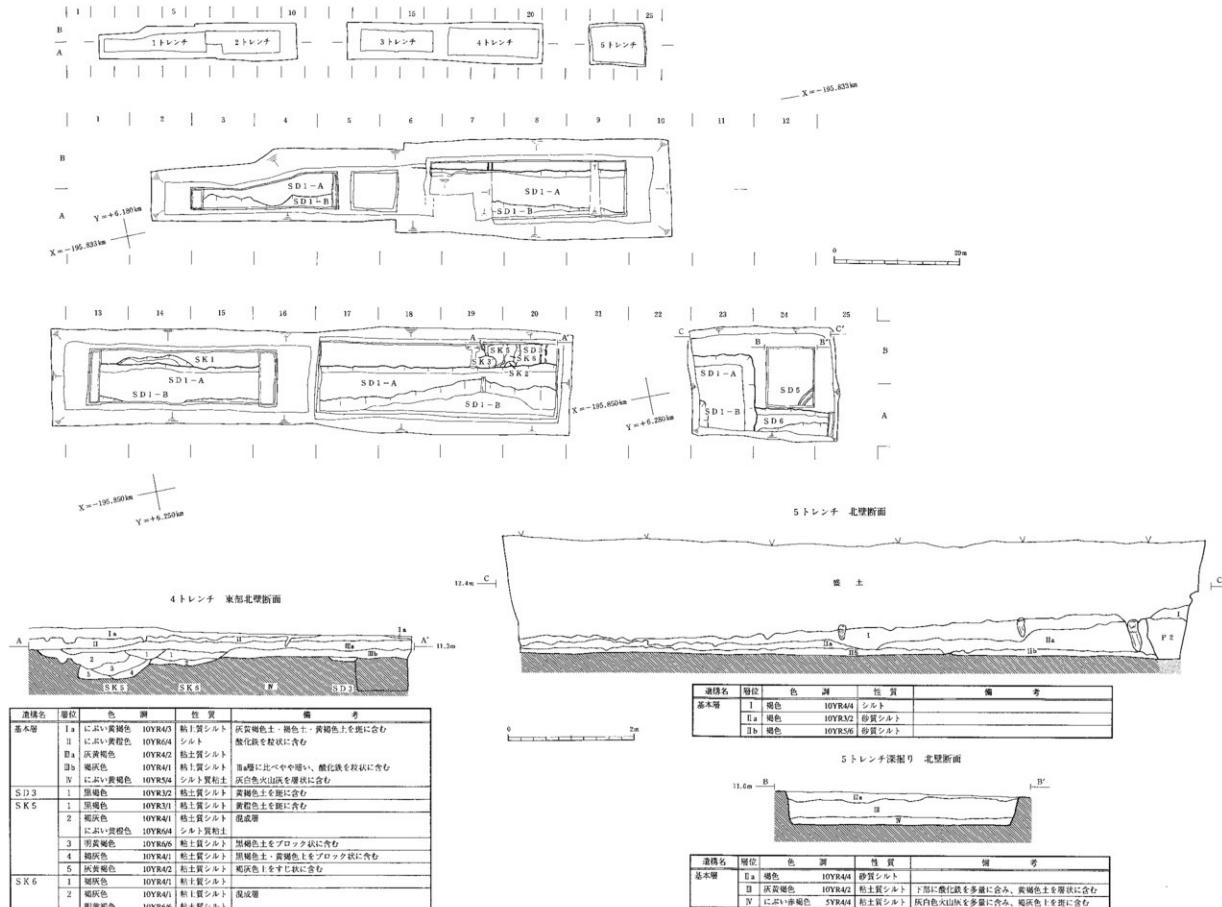
調査対象地は若林城跡北辺堀跡の西側部にあたる。東西125m・南北11mの東西に細長い調査区で面積は1,375m<sup>2</sup>である。当初、トレンチを4本設定し、西から順に1～4トレンチとした。

調査は、平成11年8月23日より開始した。まず、1トレンチ・3トレンチ、次にそれを埋め戻した後2トレンチ・4トレンチを調査した。また、4トレンチの調査中その東側で堀が屈曲することが推定されたため、新たに5トレンチを設定し堀のコーナー部分を確認した。

各トレンチとも、重機で表土と堀の盛土を除去したが、瓦・炭殻を多量に含むこの盛土が2メートル以上に及ぶことが判明していたため、その除去にあたっては安全上の配慮からかなり勾配を持たせて行った。そのため、調査の総面積は計370m<sup>2</sup>程度となった。



第3図 調査地点



また、調査区の制約から、下層の自然堆積層を良好に検出できたのは4トレンチのみで、他のトレンチではほとんど検出できなかった。さらに、盛土下では官舎建設の際の整地による削平が著しく、4トレンチ西部以西は遺構・基本層の残りが悪く、これらから調査期間は2ヶ月ほどで、平成11年10月26日には調査を終了した。

なお、実測原点は調査区南西角で、ここから5m×5mのグリッドを設定した。グリッドの名称は、南北方向が南から北へA～B、東西方向が西から東へ1～25である。南北基準線の方向は、N-11°-E、原点の国家座標値はX=-195,833.087m、Y=+6,174.930mである。

以上、調査区の配置、実測基準線については、第4図を参照されたい。

## 2. 調査概要

発見した遺構は、若林城の堀跡・溝跡5条・土坑7基・ビット2基、河川跡1条である。

若林城の堀跡は、1トレンチで発見したものをSD1、3トレンチで発見したものをSD2と呼んでいたが、2トレンチの調査の結果、SD1とSD2が同一の堀跡として確認できたためSD2を欠番とした。

出土遺物は、収納用平箱で31箱である。その内容は、繩文土器・非ロクロ土師器・ロクロ土師器・須恵器・平瓦・軒桟瓦・陶器・磁器・石製品・キセル・木製品である。このうち、8割近くを木製品が占め、この木製品の出土はSD1下部のグライ層(SD1-B)に限られており、堀のより内側にはさらに数多くの遺物が包含されているものと推測される。

## IV 基本層序

基本層は6層に大別される。この上に炭殻・ガラス・ビニール・瓦等を大量に包含する褐色の盛土(74cm～240cm)がある。盛土は5トレンチでは比較的薄いが、1～3トレンチでは200cm以上、4トレンチでは150～190cmある。概して東から西に向かって盛土が厚く、旧地表面(官舎時代)の勾配を示している。この盛土は、昭和48(1973)年の六角塔解体に伴う埋立のものである。

I層はすべてのトレンチに分布する。層厚は3トレンチで最大41cmを確認している。色調は暗褐色・褐色・にぶい黄褐色で、土質は粘土質シルトないしシルトである。小礫や炭化物と共に下層の土を巻き上げこれを斑に含んでいる。1・2・4トレンチではグライした部分があり、これをIb層として区別した。層中からは、非ロクロ土師器3点・ロクロ土師器1点・土師質土器1点・摩滅した土師器片3点・須恵器2点・平瓦4点・陶器3点・磁器10点・漆皮膜1点が出土した。陶磁器には現代物と思われるものも含まれており、官舎時代の表土で耕作による形成層として理解した。この層を除去しSD1を確認している。

II層は遺存状況のよい4トレンチ東部～5トレンチでのみ確認した自然堆積層である。4トレンチ東部と5トレンチで色調・土性がやや異なり、トレンチ相互での対応関係は不明である。4トレンチではにぶい黄褐色のシルトで、酸化鉄を粒状に含む。層厚は最大17cmである。5トレンチでは2層に細分される。IIa層は褐色の砂質シルトで最大層厚57cmである。IIb層は暗褐色の砂質シルトで最大層厚16cmである。層中から摩滅した土師器小片が1点出土しているのみで情報に乏しい。II層上面でSD6を確認した。

III層は自然堆積の包含層である。4トレンチでは色調・土質は酷似するが、2層に細分される。上部のIIIa層は灰黄褐色の粘土質シルトで固くしまる。最大層厚16cmである。検出遺構はない。下部のIIIb層は褐色の粘土質シルトで、酸化鉄を粒状に含み固くしまる。最大層厚16cmである。SK2～6はIIIb層上面確認の遺構である。層中からは、非ロクロ土師器23点・ロクロ土師器2点・摩滅した土師器小片100点・須恵器3点が出土している。5トレンチでは、灰黄褐色の粘土質シルトで部分的に黄褐色土を層状に含む。最大層厚は35cmである。5トレンチからは、

非クロコロ土師器7点・ロクロ土師器1点・摩滅した土師器小片15点・須恵器3点とともに13世紀代の龍泉窯系無文青磁碗の破片が1点出土しており、Ⅲ層の堆積年代の一端を示している。

IV層は1トレンチでは全面SD1-Aのため失われているが、2~4トレンチでは調査区全面に確認された黄褐色の粘土質シルトを基調とする自然堆積層である。2~4トレンチ中央部までは、このIV層上面で遺構確認を行った。各トレンチで色調・土質がやや異なり、相互の対応関係は不明である。2~3トレンチ中央では黄褐色~褐色の粘土で、にぶい黄橙色土をブロック状に含んでいる。層厚は最大10cm程で、I層の落ち込みも激しい。層厚が薄いため部分的にV層が確認される。明黄褐色粘土質シルトと黄褐色シルトの互層となり層厚も43cmと厚い。4トレンチでは、にぶい赤褐色を呈し灰白色火山灰を多量に含んでいる。層厚15cmまで確認した。IV層からは遺物が出土していないが、10世紀前半に降下したといわれる灰白色火山灰を二次堆積として含んでいることから、上限が知れる。検出遺構にはSD3~5がある。

V層は総じてにぶい黄橙色~にぶい黄褐色の砂層ないし砂礫層で、1~4トレンチで確認した。最大確認層厚は、試掘時の124cm（本調査2トレンチ内）であるが、4トレンチでは薄く、17cmしかない部分もある。総じて西に向かうほど層厚が増す。3トレンチでは層上部より、縄文晩期の土器片が1点出土している。V層は河川堆積土として理解される。

VI層は酸化鉄が凝固した極めて堅く締まった砂礫層で、当調査地点では地山面となる。SD1-BはこのVI層上面まで掘り込まれている（確認地点の標高9.83m、現地表面より-3.24m）。

なお、遺構確認は全面がSD1-Aであった1トレンチでは盛土除去下、2~4トレンチ中央部はIV層上面、4トレンチ東部以西はII層上面・III層上面・IV層上面で確認した。

## V 検出遺構とその出土遺物

### 1. 堀跡・溝跡・河川跡

#### (1) SD1堀跡

調査区全域にわたって検出した若林城の堀跡である。調査区の制約上、張り出し部分の北辺と東辺の片辺のみの部分的な確認である。I層除去下で確認した。形状と溝方向からSD1-A（人為堆積）とSD1-B（自然堆積）の2条の堀として調査を進めた。

#### ①SD1-A

調査区に並行に直線的に延び、5トレンチで南に直角に屈曲する。検出長は105.33mで、上端幅4.51m・下端幅3.68m・深さ1.06mまで確認した。北辺軸方向はN-80°-Wである。壁はきつい勾配で立ち上がるが、断面形は不明である。堆積土は6層に分層され1トレンチではグラウンドヒートしている。大半は人為堆積土である。出土遺物は、縄文土器2点・非クロコロ土師器49点・ロクロ土師器11点・摩滅した土師器片13点・須恵器13点・土師質土器1点・瓦質土器2点・土製品（レンガ片？）4点・丸瓦2点・平瓦4点・棟瓦3点・細片のため種別不明な瓦片4点・陶器10点・磁器42点・石製品（硯・硯石・スレート）8点・金属製品1点・木片1点がある。このうち、縄文土器1点・ロクロ土師器1点・須恵器1点・陶器2点・丸瓦1点・硯と硯石各1点・金属製品（キセル吸い口）1点を図化した。平瓦はプレス瓦かと思われる。棟瓦はいわゆる「引っ掛け棟瓦」である。陶器・磁器には現代のものも含まれている。硯は硯石の破損を防ぐために採石場で塗られる漆を残しており、製作過程で投棄された未製品ないし破損品である。また、硯石の切断面は近世に行われていたような鋸引きの粗いものと異なり、電動鋸による細かいものである。宮城刑務所では、昭和26年前後に雄勝町から石材を搬入し所内労働で硯やスレートを作成していたら

しく（聞き取り調査）、その際に投棄されたものと考えられる。こういった遺物の状況と、崩落土以外は人為堆積であることを踏まえると、堆積土は昭和25～26年に行われた官舎建設の際の整地に関わる埋め戻し土であろう。堆積状況は、崩落土と解されるもの以外は水平であり丁寧な埋め戻しが行われている。堆積土には、基本層を多量に含んでおり、埋め戻しの際には堀岸の削平も伴ったようである。直線的なSD1-Aの上端は、埋め戻しの際の切り岸によって形成されたものと考えられる。

#### ② SD1-B

1～3トレンチでは概ね直線的に延びるが、4トレンチ東部で大きく膨らみ、5トレンチ内で南へ屈曲する。検出長は101.39m、上端幅3.02m・下端幅2.11m・深さ1.43mまで確認した。部分的に平坦面がみられるが、試掘時の断面を見るとさらに南側に向かって深く落ち込むようである。立ち上がりは急である。断面形は不明である。堆積土は7層に分層されグライ化している。砂と粘土が複雑に入り組み、水性堆積の様相を呈している。出土遺物には、非ロクロ土師器4点・須恵器2点・丸瓦1点・平瓦1点・陶器4点・石製品1点・木製品480点がある。特に堆積土下部から多量の木製品が出土している。瓦は焼瓦で、陶器は大堀相馬白湯釉碗（底面）・同白湯釉瓶類、瀬戸美濃産陶器（19世紀）・東海産山茶碗窯系甕で、いずれも近世までのものである。石製品は砥石である。木製品には、下駄19点・下駄の齒21点・汁杓子1点・箸2点・刷毛1点・桶ないし樽の側板11点・樽の栓2点・提灯の底板？を含む円盤状木製品6点・刃物の柄1点・傘の輪轂1点・ヘラ状木製品1点・くさび状木製品3点・杭6点・板材5点・竹釘？2点・一定の法量に切りそろえた割竹17点・ヘギ板216点・棒状ないし板状木製品としか表現し得ない破損の著しいものと端材がある。年代が特定できる遺物の中で、19世紀代の瀬戸美濃陶器片と、文化・文政期に出現するとされる（市田：2000）無歯下駄ないし草履下駄が最新のものと思われる。このことからSD1-Bの堆積層の上限は19世紀前半頃に求められる。なお、図化した遺物は須恵器1点・丸瓦1点・石製品（砥石）1点・木製品177点である。

#### （2）SD3溝跡

4トレンチのB-20グリッドで検出した。確認面はIV層上面である。SD1に切られる。南北方向に直線的に延び、軸方向はN-15°-Eである。規模は確認長164cm・上端幅50cm・下端幅28cm・深さ8cmである。断面形は逆台形を基調とする。底面はほぼ平坦で中央がやや深く落ち込むが、南北で高低差は認められない。堆積土は1層である。出土遺物は、純文土器1点・非ロクロ土師器坏1点・赤焼土器坏？1点・摩滅した土師器片1点である。

#### （3）SD4溝跡

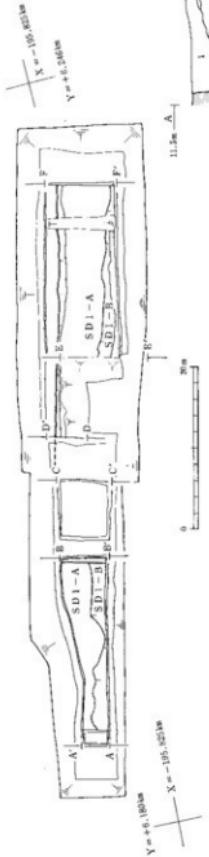
2トレンチのB-7グリッドで検出した。確認面はIV層上面であるが2トレンチはⅡ・Ⅲ層が失われており、より上位の可能性がある。SD1-Aに切られる。南北方向に直線的に延び、軸方向はN-10°-Eである。規模は確認長70cm・上端幅34cm・下端幅28cm・深さは最深部で22cmである。断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦であるが一部落ち込みが見られる。南北で高低差は認められない。堆積土は1層である。出土遺物はない。

#### （4）SD5溝跡

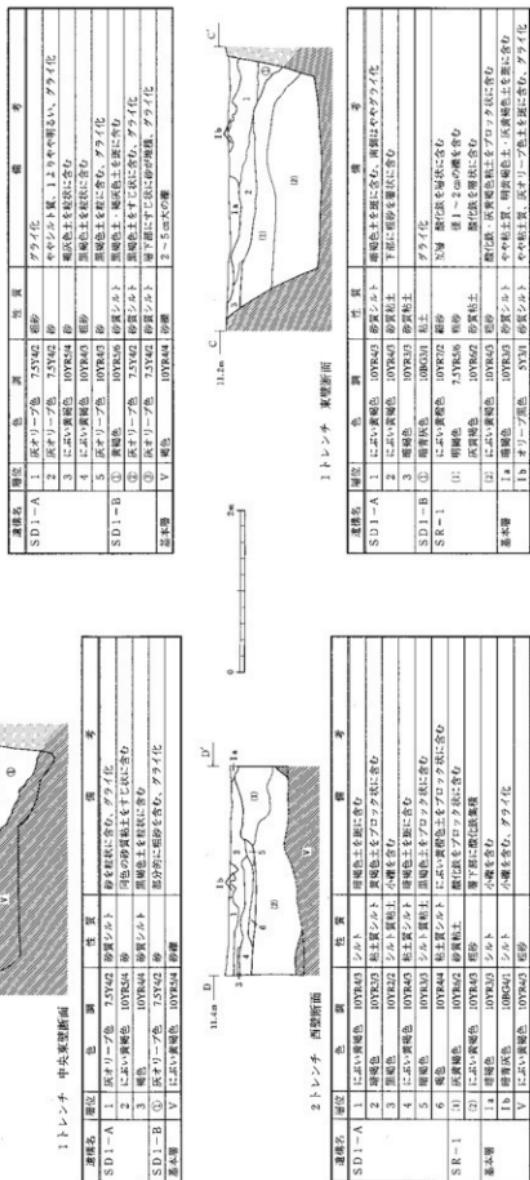
5トレンチのA-24グリッド下層調査で検出した。確認面はIV層上面である。軸方向はN-54°-Eだが、やや湾曲している。規模は、確認長192cm・上端幅は52cm・下端幅30cm・深さ22cmである。断面形は逆台形を基調とする。底面はやや凹凸があるが高低差は認められない。堆積土は1層である。出土遺物はない。

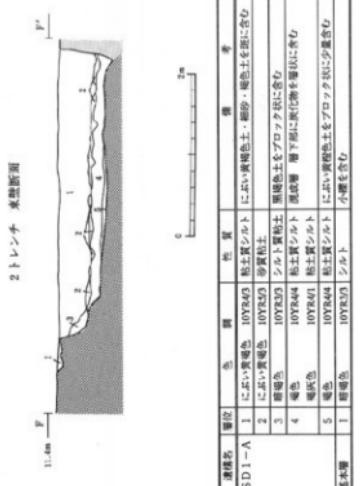
#### （5）SD6溝跡

5トレンチのA-24～25グリッドで検出した。確認面はII層上面である。SD1-Aに切られる。溝北側部のみの確認である。軸方向はN-73°-Wである。規模は、検出長594cm・確認上端幅190cm・深さ36cmである。底面はほぼ平坦であるがゆるく南側へ落ちている。堆積土は2層で、底面には酸化鉄が集積凝固する。断面形は不明である。出土遺物は、非ロクロ土師器9点・ロクロ土師器2点・摩滅した土師器片2点がある。

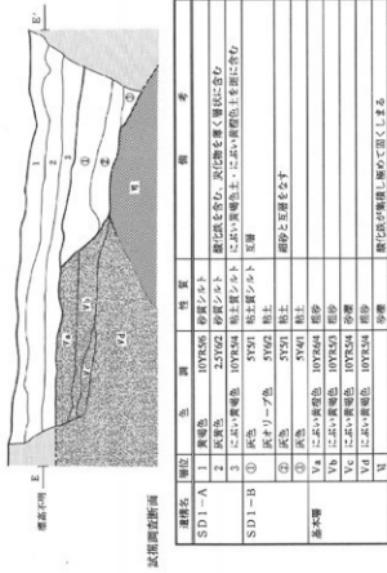


第5図 SD1断面図・断面図(1)

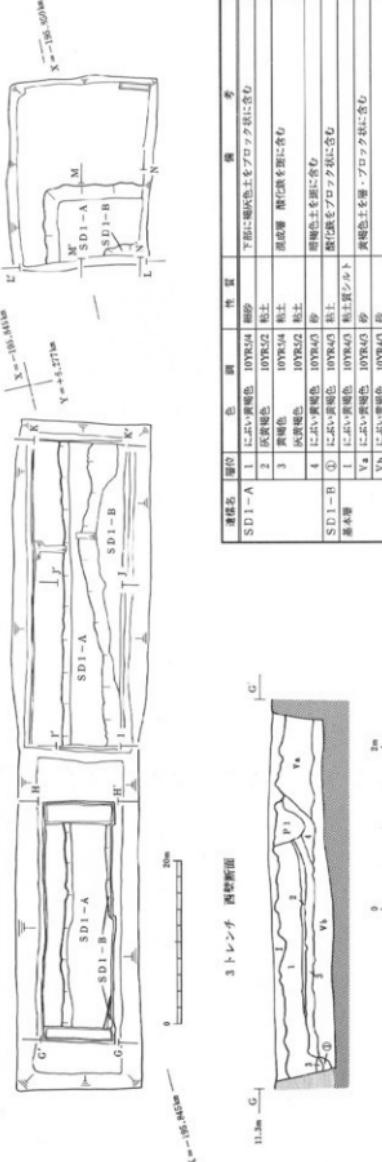




第6圖 SD1掘跡平面圖・斷面圖(2)



第6図 SD1 捕跡平面図・断面図(2)



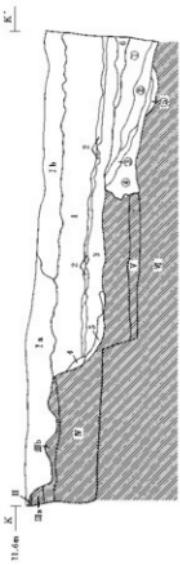
図・断面図(2)

## 3 レンチ 基準断面

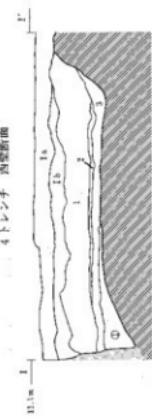


第7図 S D 1 基準断面図 (3)

## 4 レンチ 基準断面



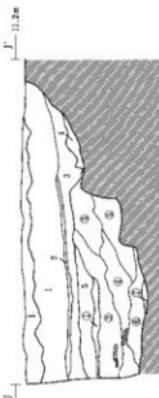
地塊名	層位	色	調	性	質	備
S D 1 - A	1	にぶい黄褐色	10YR5/4	細粒	下部に風化色とアプロック状に含む	
	2	灰黄褐色	10YR5/2	粘土		
	3	黄褐色	10YR5/4	粘土	風成帶 砂に風化に含む	
	4	灰黄褐色	10YR5/2	粘土	風成帶 砂に風化に含む	
S D 1 - B	①	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	風化色を砂に風化に含む	
基木層	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土・風化シルト	風化色をアプロック状に含む	
	2	明黄色	10YR5/6	粘土・風化シルト	風成帶に風化に含む	
	3	黄褐色	10YR5/6	シルト	風成帶 砂に風化に含む	
Va	にぶい黄褐色	10YR5/5	砂	風成帶 砂に風化・アプロック状に含む		



地塊名	層位	色	調	性	質	備
S D 1 - A	1	灰黄褐色	10YR5/2	粘土	風化色・根鉢を含む、風成下に灰化物	
	2	灰黃褐色	10YR5/2	粘土	ややダラ化	
	3	灰黃褐色	10YR5/2	粘土	部分的アプロック状に含む	
	4	灰黃褐色	10YR5/2	粘土	細分をアプロック状に含む	
	5	褐色	10YR4/4	粘土	風成帶 鮫状風化に含む	
	6	灰褐色	7.5YR5/2	粘土	風化色・根鉢を含むD、グライ化	
S D 1 - B	①	青灰色	10R5/1	粘土	風成帶 木本・落葉を多く含む、グライ化	
	②	オリーブ灰色	7.5YR5/1	粘土	互層 木材・根鉢を多量に含む、グライ化	
	③	紺灰色	10G5/2	砂粘土	等下部・溶出風化、ややダライ化	
	④	褐色	10YR4/6	砂粘	風化色を含む、木本を少含む	
基木層	1	にぶい黄褐色	10YR4/6	粘土・風化シルト	ダライ化	
	2	褐色	10YR5/1	粘土	風成色・・風化色を含む	
	3	灰褐色	10YR5/2	粘土	風成色・根鉢を含む風化を含む	
	4	灰褐色	10YR5/2	粘土	風成色・根鉢を含む風化を含む	
	5	灰褐色	10YR5/2	粘土	風成色・根鉢を含む風化を含む	
	6	灰褐色	10YR5/2	粘土	風成色・根鉢を含む風化を含む	
	7	灰褐色	10YR5/4	シルト	風成色・根鉢を含む風化を含む	
	8	灰褐色	10YR5/4	シルト	風成色・根鉢を含む風化を含む	
	9	灰褐色	10YR5/4	シルト	風成色・根鉢を含む風化を含む	
	10	灰褐色	10YR5/4	シルト	風成色・根鉢を含む風化を含む	
	11	褐色	10YR4/4	シルト	風成色・根鉢を含む風化を含む	

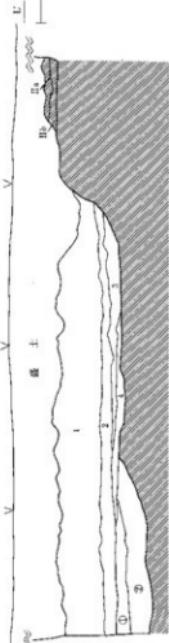
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100

中央西壁漸面

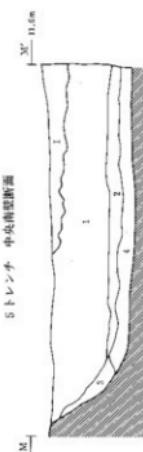


第8図 SD1 堀跡平面図・断面図 (4)

アーティスト

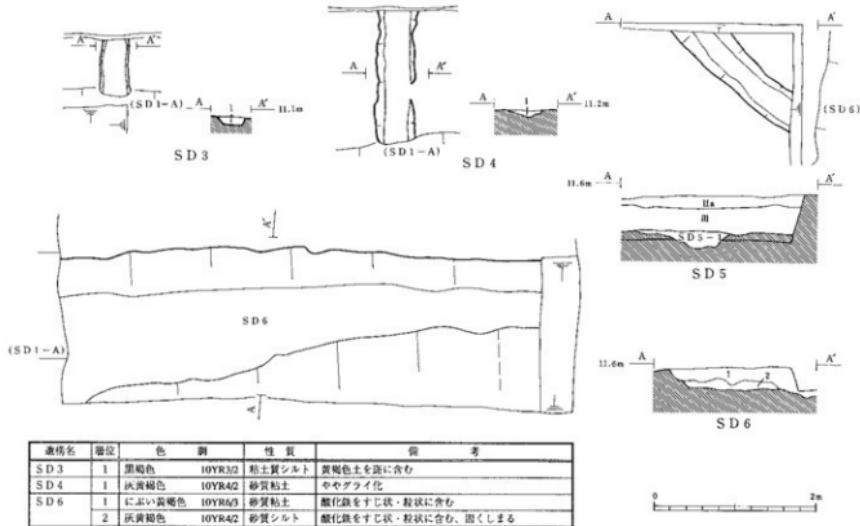


標準名	部位	色	質	備考
SD 1-A				
① 淡黄褐色	107YR6/2	褐色	軟地・粗砂質に含む。質は滑らかで含む。	
② 深黃褐色	107YR8/2	褐色	上部・粗砂質に含む。、タリ化。	
③ 暗褐色	107YR4/4	褐色	颗粒化・粗砂質に含む。	
④ 暗褐色	107YR6/2	褐色	粗砂質	
⑤ 深暗褐色	107YR2/2	褐色	泥炭質	泥炭質を含む。
SD 1-B				
① 深色	7.5YR4/1	褐色	炭化物を少量含む。タリ化。	
② 深褐色	10YR6/2	褐色	細砂・木質を多く含む。タリ化。	
③ 暗色	7.5YR4/1	褐色	地盤小石を含む。炭化物を多く含む。	
④ 暗色	2.5YR6/2	褐色	瓦質・粘土質を多く含む。タリ化。	
⑤ 深色	2.5YR6/2	褐色	木質を多く含む。タリ化。	
⑥ 深色	10YR4/1	褐色	粗砂質を多く含む。木質を多く含む。タリ化。	
⑦ 深褐色	2.5YR7/1	褐色	粗砂質を多く含む。木質を多く含む。タリ化。	
⑧ 深褐色	10YR6/2	褐色	粗砂質を多く含む。木質を多く含む。タリ化。	
⑨ 深褐色	2.5YR7/1	褐色	粗砂質を多く含む。木質を多く含む。タリ化。	



運送名	原穴	色	調	性質	備考
SD 1 - A	1 銀色	10YR5/1	砂質ルート	涼爽地	
	2 銀色	10YR5/4	砂質ルート	涼爽地	仁に銀色地。
	3 銀色	10YR5/1	砂質ルート	やや熱地。青、下部に暗紅色地。	地極地。
	4 明銀色	10YR5/1	砂質ルート	熱地。土を含む。	地極地。
SD 1 - B	① 銀色	10YR5/1	粘土	砂質ルート	地極地。
	② 銀色	10YR5/1	粘土	砂質ルート	地極地。
基本層	③ 銀色	10YR4/4	砂質ルート	砂質ルート	10YR5/4

通路名	部位	色調	性質	備考
S D 1 - 1	1	褐色	10YR5/1 彩質シルト	底成層
	2	灰褐色 灰褐色	10YR4/4 10YR4/4 彩質シルト	中砂粒土質、下部に底成層
	3	褐色	10YR4/6 彩質シルト	中砂粒土質、灰褐色土を含む
S D 1 - 2	4	褐色	10YR5/6 彩質シルト	瓦砾、砂を含む
	①	明褐色	10YR5/6 粘土	谷筋沿いに含む
S D 1 - 3	②	暗褐色	10YR5/1 粘土	谷筋沿いに含む
	③	褐色 褐色	10YR5/1 粘土 10YR5/1 粘土	谷筋沿いに含む



第9図 溝跡平面図・断面図

#### (6) SR-1河川跡

1 トレンチ東部～2 トレンチ西部にかけて検出した（断面観察）。確認面はV層上面である。断面観察から、方向は概ね北西～南東方向で、検出範囲内では若林城内へと向かっている。規模から見て河川跡というよりは小流路跡といった方が適切かも知れない。堆積土は、上部は粘土と砂の互層、下部は砂疊層で酸化鉄が斑に入る。出土遺物は、縄文土器1点・非クロロ土師器16点・ロクロ土師器8点・摩滅した土師器片6点・須恵器5点である。うち、縄文土器1点・非クロロ土師器2点・ロクロ土師器2点・須恵器2点の計7点を図示した。

## 2. 土坑

### (1) SK 1 土坑

3 トレンチA・B-13～15グリッドで検出した。確認面はV層上面であるが、検出地点はV層の隆起が著しく、上位層は昭和25～26年の官舎建設に伴う地盤変動であり、確認面は不確定なものである。SD 1-A・Bに切られる。規模は、長軸670cm・短軸398cm・深さ134cmを測る。極めて大型の土坑である。平面形は、上端は検出面が砂層のため崩落し不整形であるが、下端では楕円形に近い。底面は平坦で北側の立ち上がりはほぼ垂直でオーバーハング気味でさえある。堆積土は4層に分層される。上部2層は固くしまり、最下層はグライしている。自然堆積である。出土遺物には、縄文土器7点・非クロロ土師器10点・ロクロ土師器2点・摩滅した土師器片2点があり、うち縄文土器7点を図示した。

### (2) SK 2 土坑

4 トレンチB-20グリッドで検出した。確認面はIIIb層上面である。SK 6を切り、SD 1-Aに切られる。規模は、長軸100cm・短軸71cm・深さ28cmである。平面形は円形と思われる。底面はほぼ平坦である。堆積土は1層

で、10cm大の礫が多量に入り固くしまる。出土遺物は、ロクロ土師器の小片が1点ある。

#### (3) SK 3 土坑

4トレンチB-19グリッドで検出した。確認面はⅢb層上面である。SK 4を切り、SD 1-Aに切られる。規模は、長軸176cm・短軸160cm・深さ64cmである。平面形は不整な円形である。底面は方形形状で浅い落ち込みが見られる。堆積土は4層に分層され、自然堆積である。出土遺物には、摩滅した土師器片1点と須恵器小片1点がある。

#### (4) SK 4 土坑

4トレンチB-19グリッドで検出した。確認面はⅢb層上面である。SD 1-A、SK 3に切られる。規模は、長軸108cm・短軸80cm・深さ24cmである。平面形は隅丸の方形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層である。出土遺物には、非ロクロ土師器2点がある。

#### (5) SK 5 土坑

4トレンチB-19グリッドで検出した。確認面はⅢb層上面である。SK 6を切り、SD 1-A・SK 3に切られる。規模は、長軸206cm・短軸196cm・深さ54cmである。平面形はやや不整であるが方形を基調とする。底面は平坦である。堆積土は5層に分層され、自然堆積である。遺物は、繩文土器1点・非ロクロ土師器9点・ロクロ土師器4点・摩滅した土師器小片26点・須恵器1点が出土している。

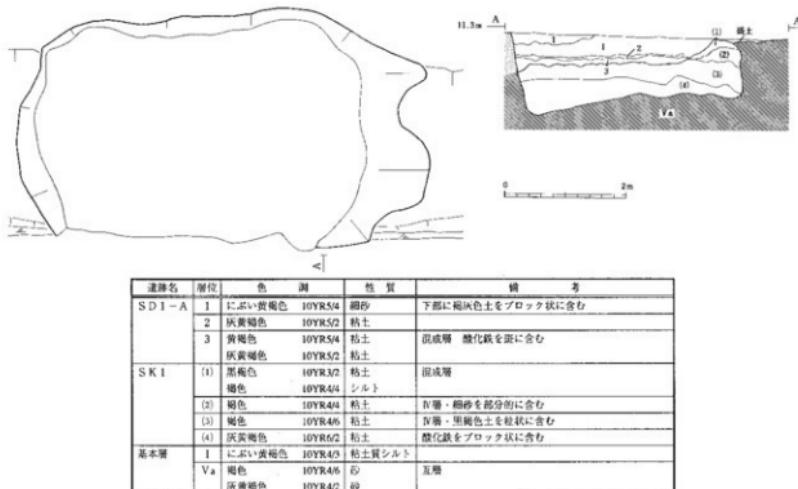
#### (6) SK 6 土坑

4トレンチB-19~20グリッドで検出した。確認面はⅢb層上面である。SD 1-A・SK 2・SK 5に切られる。検出規模は、長軸184cm・短軸110cm・深さ34cmである。平面形は不明である。壁面は緩やかに落ち、底面は平坦である。堆積土は2層に分層され、自然堆積である。出土遺物はない。

#### (7) SK 7 土坑

2トレンチA・B-8グリッドで検出した。確認面はV層上面であるが、SD 1-A底面での検出のため、より上位の可能性がある。規模は、長軸470cm・短軸202cm・深さ36cmで、大型の土坑である。平面形は不整な円形

図

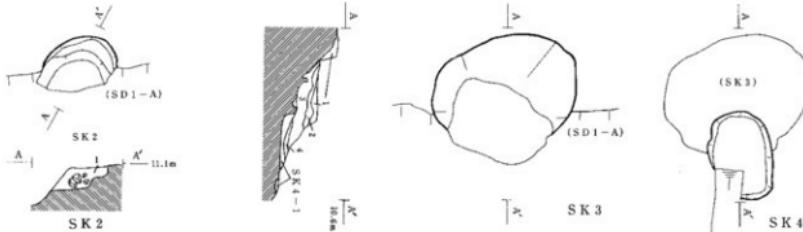


第10図 SK 1 土坑平面図・断面図

である。壁面総じて緩やかだが、各方向で角度に違いがあり規則的なものではない。底面は平坦である。堆積土は1層で、人為堆積である。出土遺物はない。

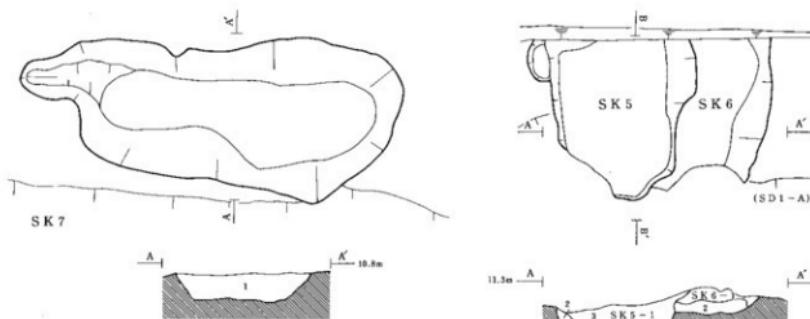
### 3. 遺構外出土遺物

非クロコ土師器9点・ロクロ土師器5点・摩滅した土師器片6点・土師質土器1点・須恵器2点・軒棧瓦3点・陶器9点・磁器11点・石製品1点がある。うち、軒棧瓦3点を図示した。H1の瓦当文様は、小巴部分が連珠に左巻き三巴で、垂れ部分は均整唐草風の意匠である。H2・H3は、文様全体を示していない資料であるが、H1と同一であろう。これらの軒棧瓦の文様は、明治10~12年に建設された宮城集治監にあった六角塔の軒棧瓦（宮城刑務所：1979）と同一である。



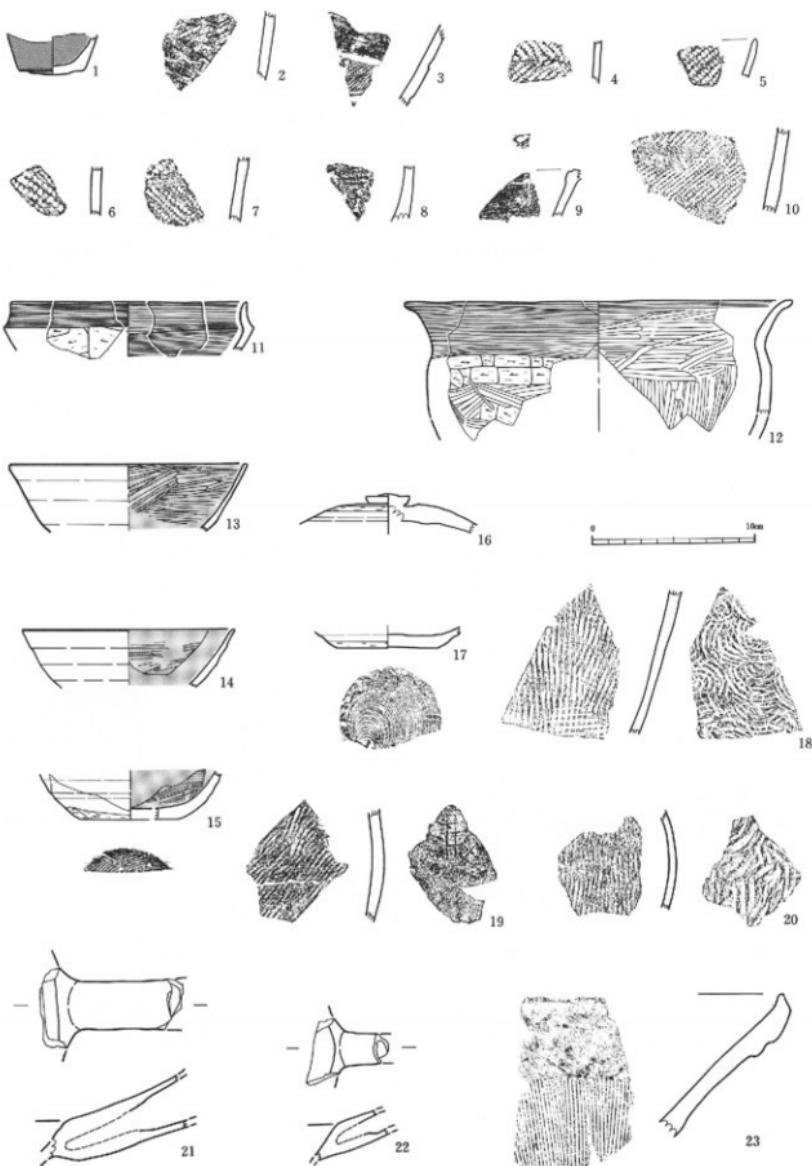
遺構名	層位	色調	性質	備考
SK2	1	褐色色	I0YR4/1	粘土 粘化鉄を斑に含む、径10cm内外の擦を多量に含む
SK3	1	明黄褐色 黒褐色	I0YR7/6 I0YR3/1	シルト 泥炭層
	2	灰黄褐色	I0YR4/2	シルト 粘化鉄を斑に含む
	3	褐色色	I0YR4/1	シルト 黄褐色土・粘化物を粒状に含む
	4	黒褐色	I0YR3/2	粘土質シルト 灰白色土をすじ状に含む
SK4	1	洪黃褐色	I0YR5/2	粘土質シルト 黑色土を層状に含む

0 2m

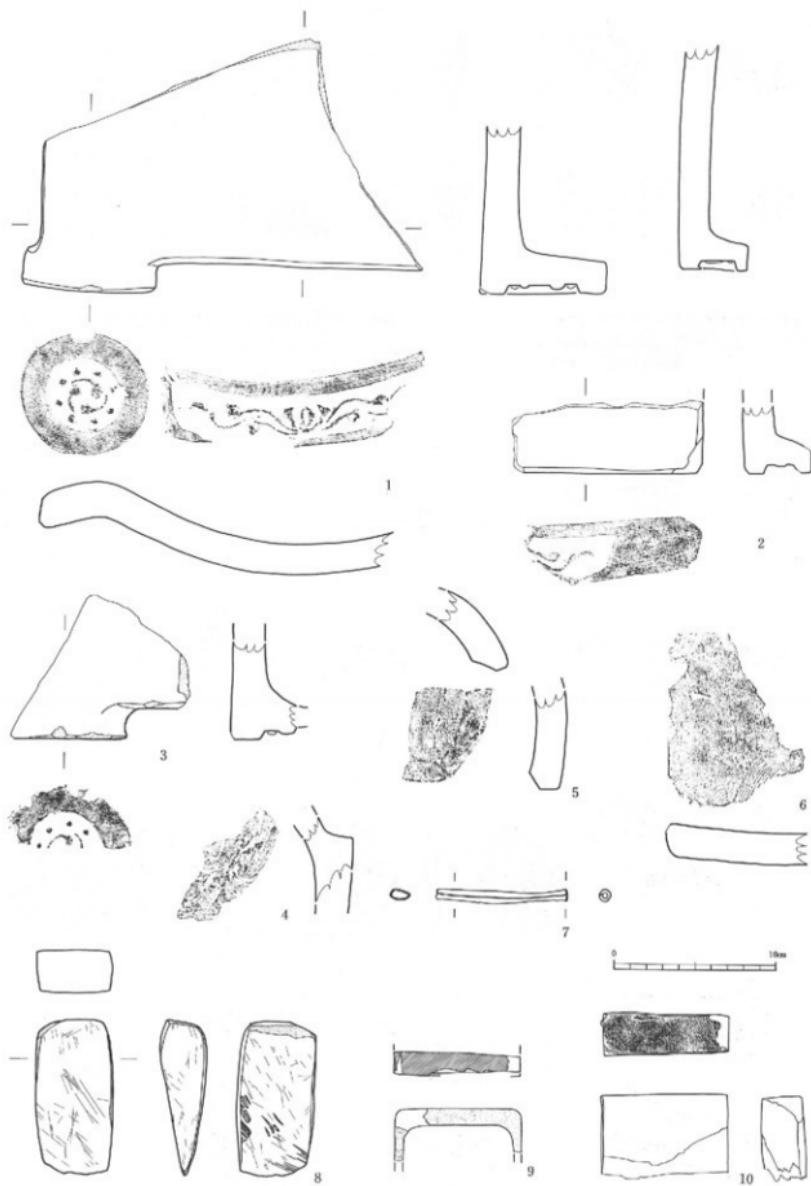


遺構名	層位	色調	性質	備考
SK5	1	褐色色 明黄褐色	I0YR4/1 I0YR6/6	粘土質シルト 粘土質シルト
	2	黒褐色	I0YR3/1	粘土質シルト 互層
	3	灰褐色	I0YR4/5 I0YR3/1	粘土質シルト シルト質粘土
SK6	1	黒褐色	I0YR3/2	シルト質粘土 洪黃褐色土・褐色土を層状に含む
	2	黒褐色	I0YR3/2	シルト質粘土 互層 灰白色火山灰を柱状に含む
	3	明黄褐色	I0YR6/6	シルト質粘土
SK7	1	にい黄褐色	I0YR5/4	砂質シルト 褐色土をブロック状に含む

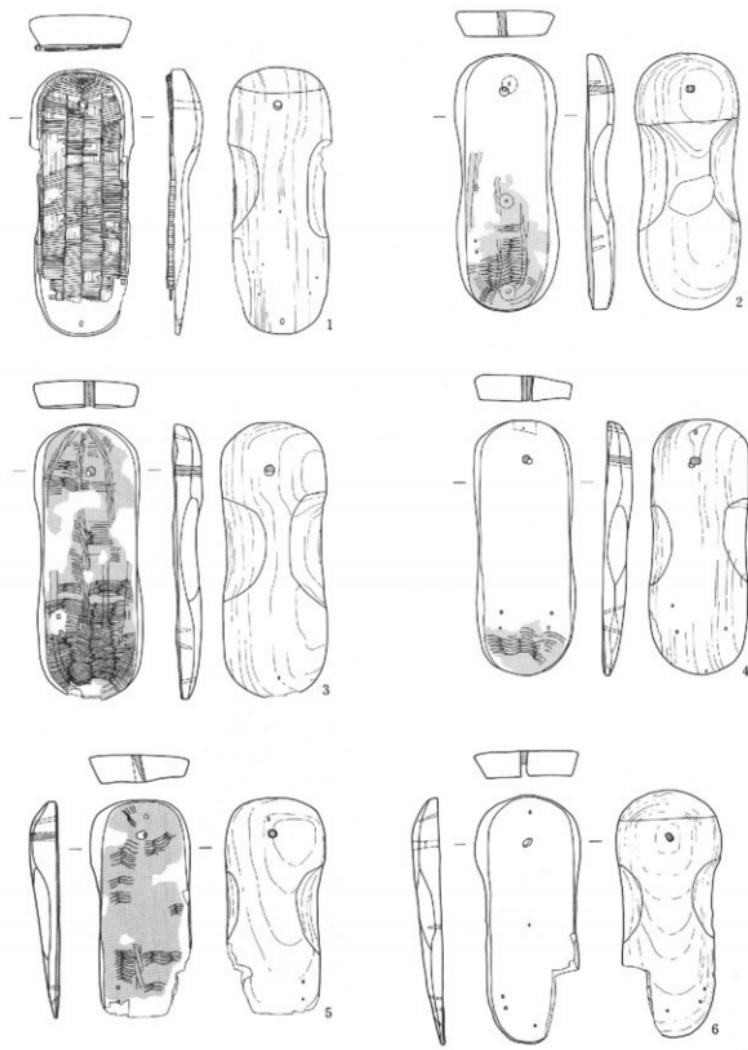
第11図 SK2 ~ 7 土坑平面図・断面図



第12図 出土遺物(1) 繩文土器・土師器・須恵器・陶器



第13図 出土遺物(2) 瓦・銅製品・石製品

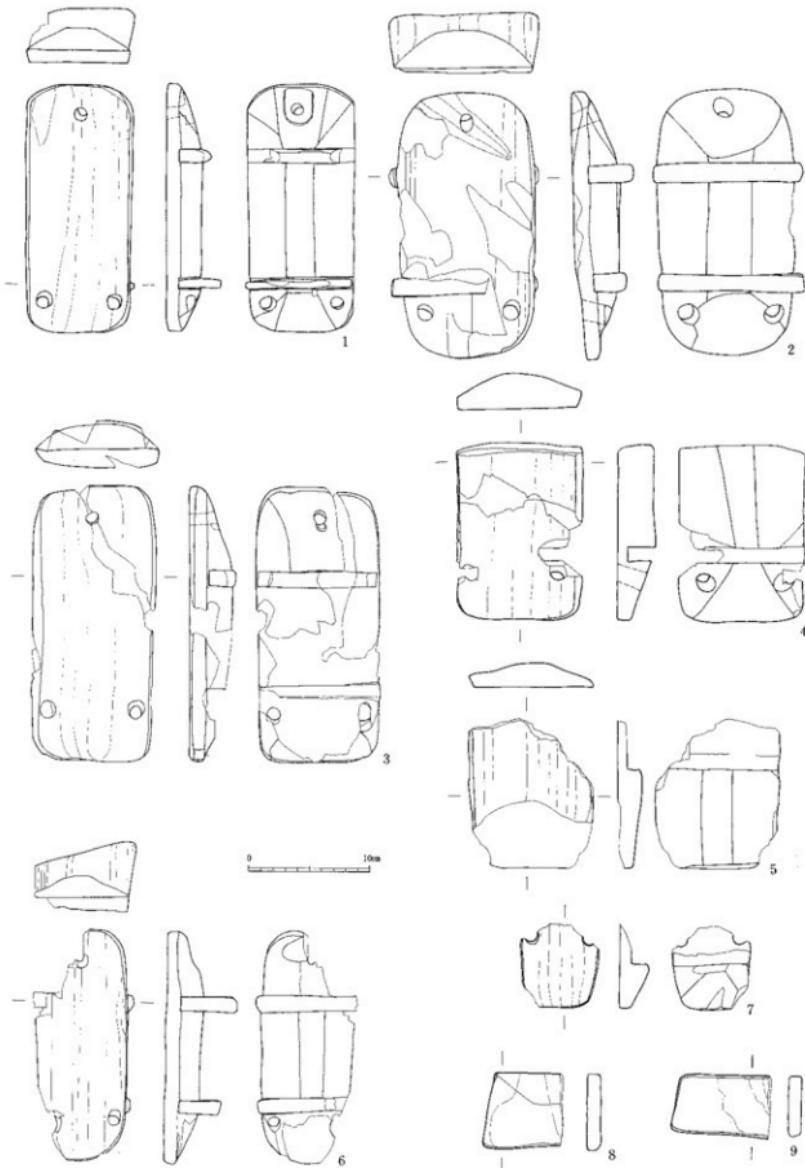


0 10mm

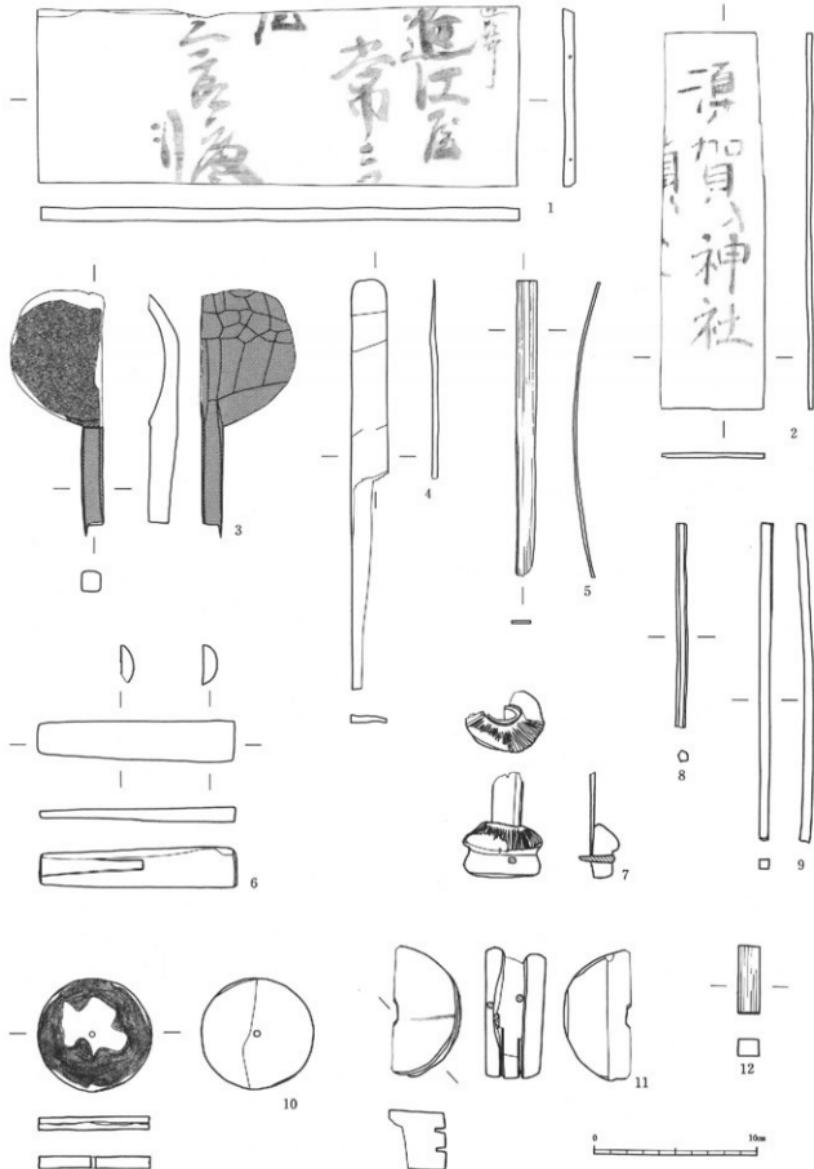
第14図 出土遺物(3) 木製品①



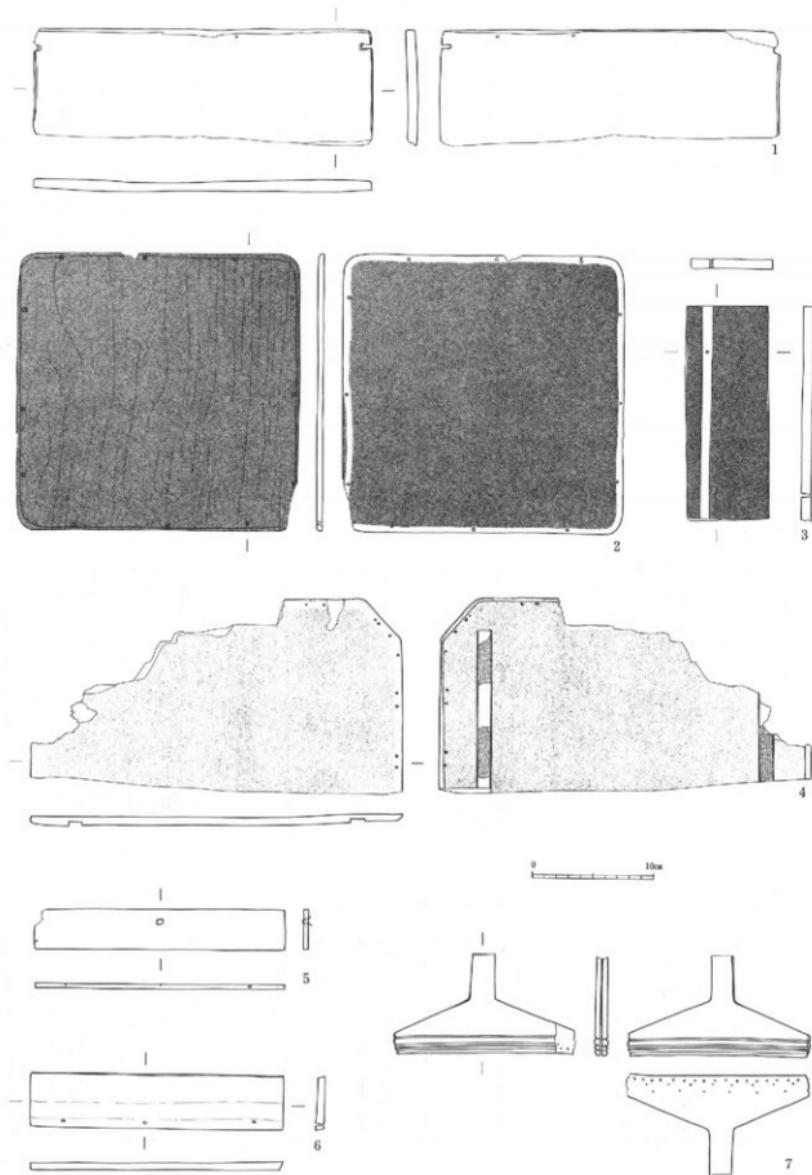
第15図 出土遺物(4) 木製品②



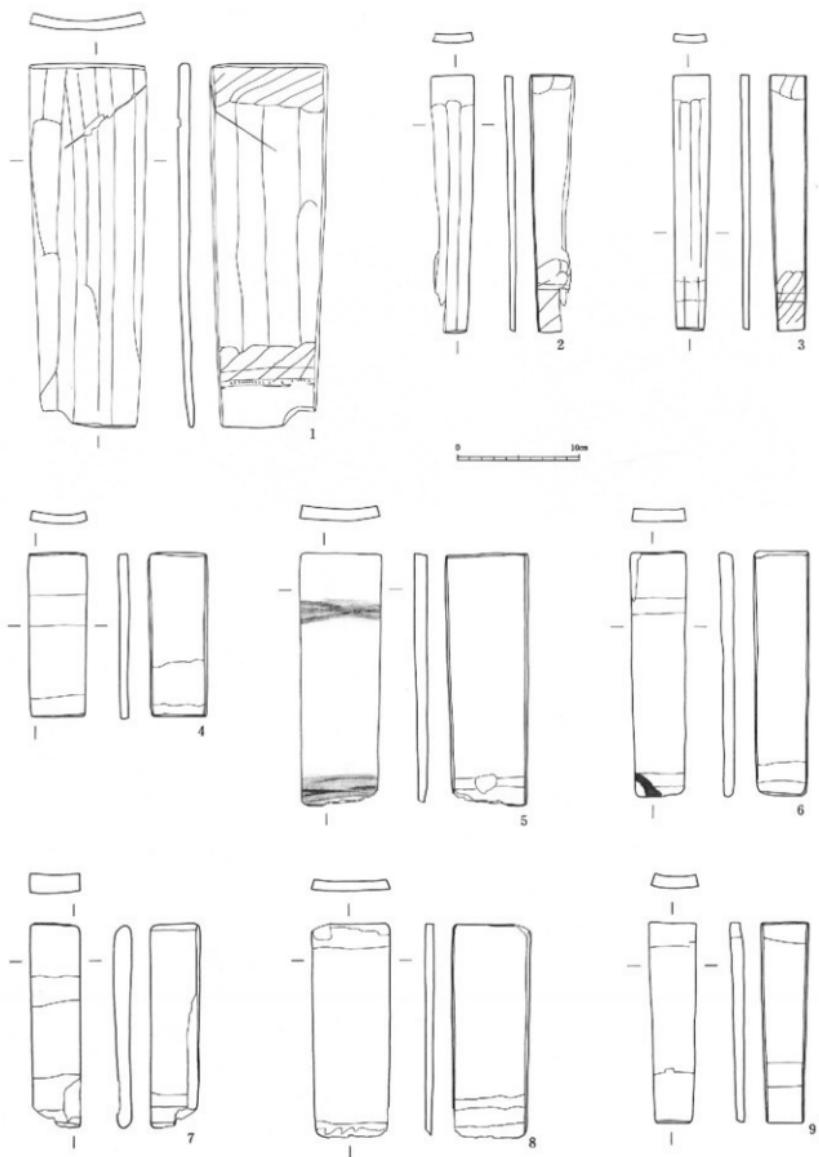
第16図 出土遺物(5) 木製品③



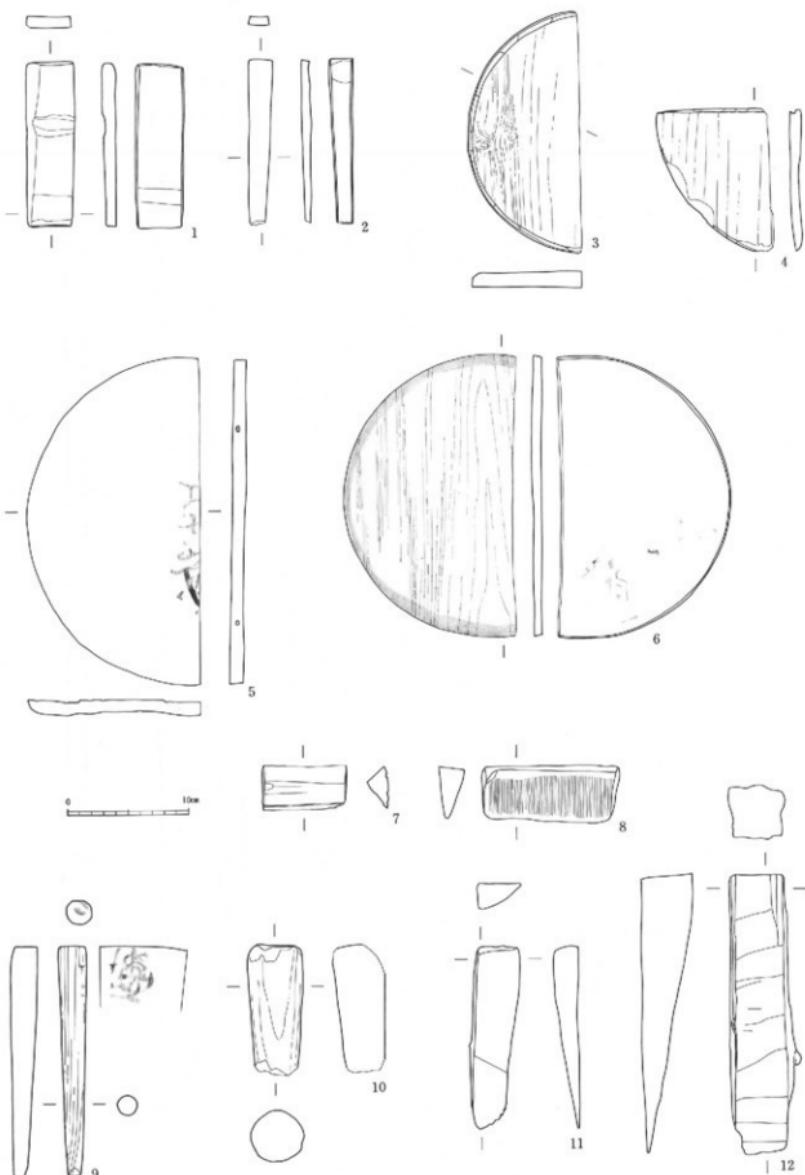
第17図 出土遺物(6) 木製品④



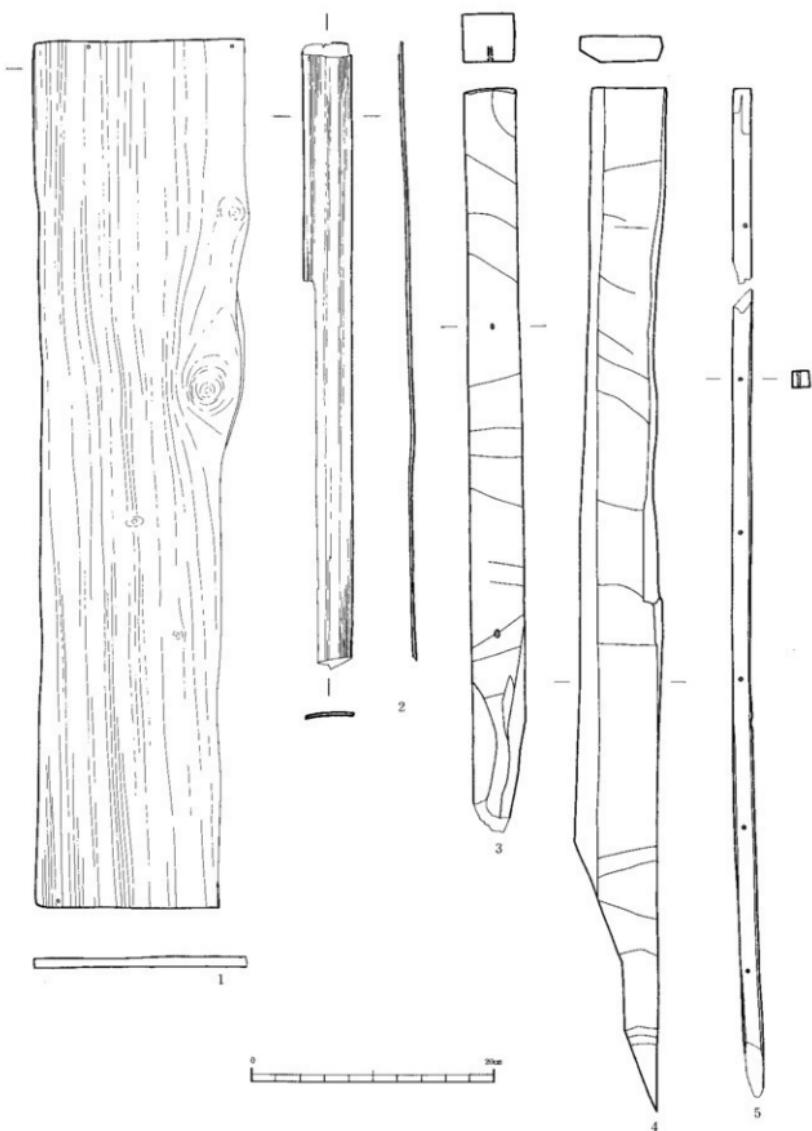
第18図 出土遺物(7) 木製品⑤



第19図 出土遺物(8) 木製品⑥



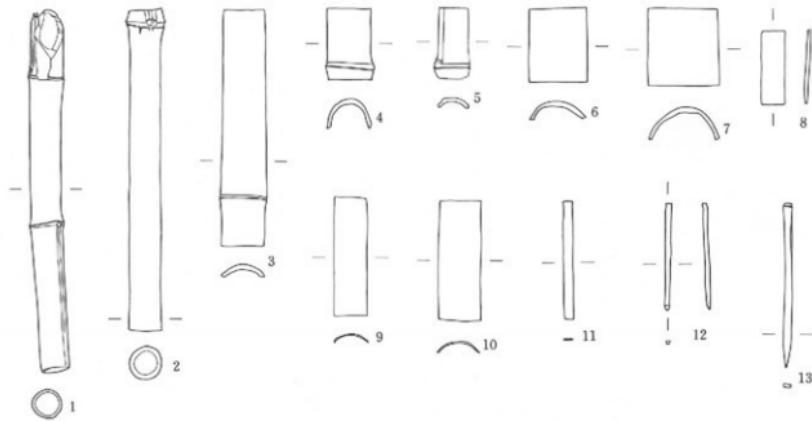
第20図 出土遺物(9) 木製品⑦



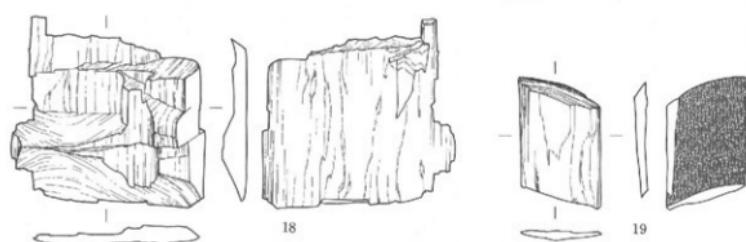
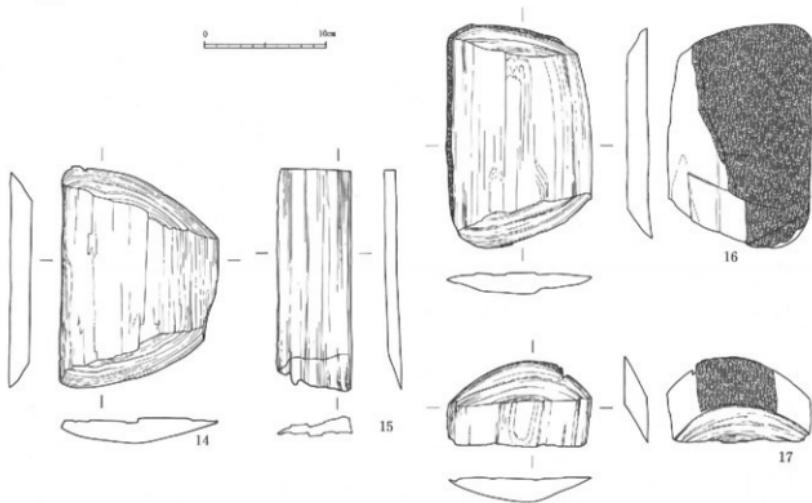
第21図 出土遺物(10) 木製品⑧



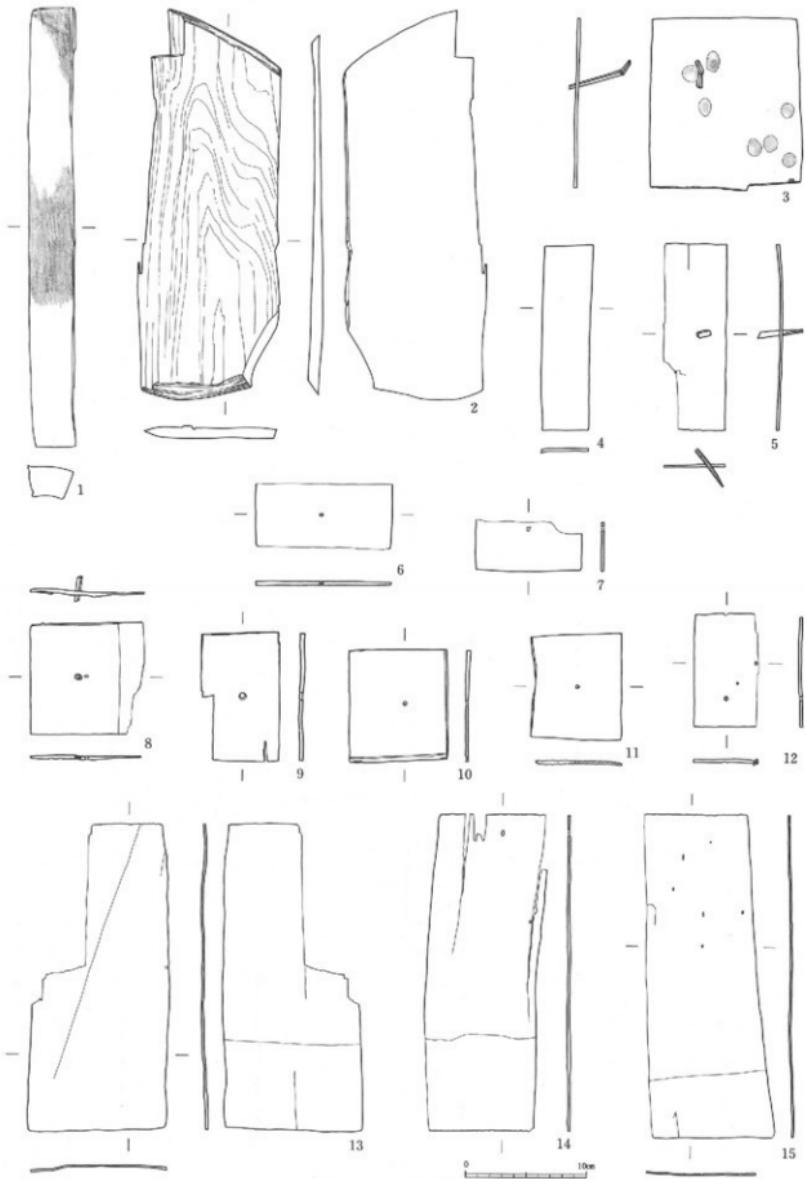
第22図 出土遺物(11) 木製品⑨



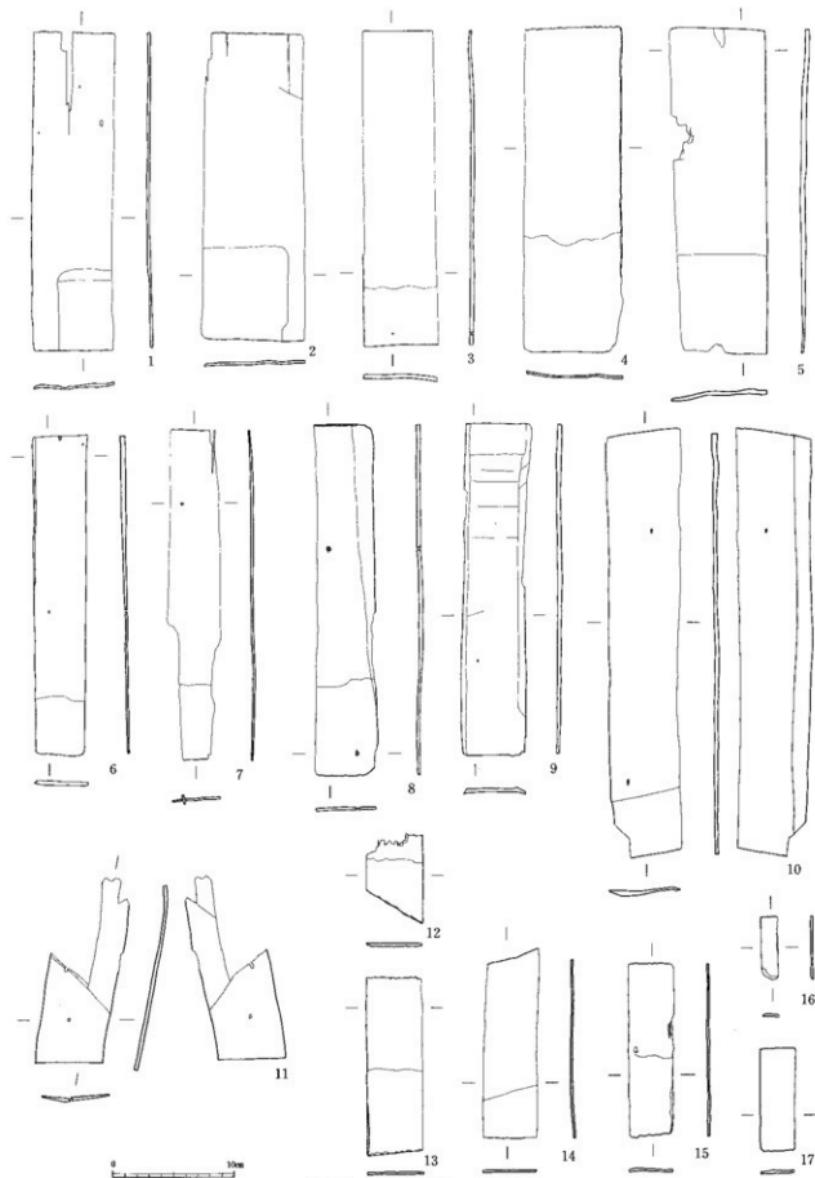
0 10cm



第23図 出土遺物(12) 木製品⑩



第24図 出土遺物(13) 木製品①



第25図 出土遺物(14) 木製品②

## 陶土器

図版番号	遺物番号	トレンチ	遺構・基本層	器種	特徴	時期	特徴	例	写真番号
12-1	A 1	3	S K I (埋土)	ミニチュア土器	複数	【外】ミガキ・丹後引	【内】丹後引	【外】ミガキ・丹後引	19-1
12-2	A 6	3	S K I (埋土)	不明	不明	【外】耦文・縫跡文	【内】	【外】耦文・縫跡文	-
12-3	A 5	3	V 帶	焼鉢?	複数	【外】焼鉢焼 (L.R.) → 甌藏	【内】	【外】焼鉢焼 (L.R.) → 甌藏	19-2
12-4	A 10	1	S R I	不明	鉢・焼鉢	後・晚唐	【外】羽状焼文 (L.R.-R.L.)	【外】羽状焼文 (L.R.-R.L.)	-
12-5	A 9	3	S D I - A	焼鉢	鉢・焼鉢	後・晚唐	【外】耦文 (L.R.)	【外】耦文 (L.R.)	-
12-6	A 4	3	S K I (埋土)	不明	不明	【外】耦文 (R.L.)	【外】耦文 (R.L.)	【外】耦文 (R.L.)	-
12-7	A 3	3	S K I (埋土)	不明	鉢・焼鉢	後・晚唐	【外】耦文 (R.L.-縫跡)	【外】耦文 (R.L.-縫跡)	-
12-8	A 8	3	S K I (埋土)	不明	不明	【外】耦文	【外】耦文	【外】耦文	-
12-9	A 7	3	S K I (埋土)	焼鉢?	鉢・焼鉢	後・晚唐	【外】赤彩・口部部に剥離	【外】赤彩・口部部に剥離	-
12-10	A 2	3	S K I (埋土)	不明	焼鉢	【外】耦文 (L.R.-縫跡)	【外】耦文 (L.R.-縫跡)	【外】耦文 (L.R.-縫跡)	19-3

## 土師器・須恵器・陶器

図版番号	遺物番号	トレンチ	遺構・基本層	種類	器種	法量 (mm)	型式・年代	特徴・調整など	写真番号		
12-11	C 1	1	S R I (埋土)	土器部	环	14.6	- (35)	鬼高式	【外】口縁部: ヨコナゲ、体部: ハラケズリ → ヘラミガキ	19-4	
12-12	C 2	2	S R I (埋土)	土器部	裏	239	- (85)	四分円下唇式	【外】口縁部: ヨコナゲ、体部: ハラケズリ → ヘラミガキ 【内】ヘラミガキ	19-5	
12-13	D 1	2	S D I - A (埋土)	土器部	环	148	- (48)	表弦ノ八式	【外】ロクロ調整	【外】ヘラミガキ(縫跡)・黒色処理	19-8
12-14	D 2	2	S R I (埋土)	土器部	环	132	- (36)	表弦ノ八式	【外】ロクロ調整	【外】ヘラミガキ(縫跡)・黒色処理	-
12-15	D 16	2	S R I (埋土)	土器部	环	-	60 (28)	表弦ノ八式	【外】ロクロ調整、体部下端: 手持らべカゼリ、底部: 回転余切り	【外】ヘラミガキ(縫跡)・黒色処理(再酸化)	-
12-16	B 24	4	目置	須恵器	蓋	-	-	平安時代?	鈎状つまみ、【外】ロクロ調整	19-7	
12-17	E 9	3	S D I - A (埋土)	須恵器	环	-	62	-	平安時代	【外】ロクロ調整	-
12-18	H 1	1	S R I (埋土)	須恵器	裏	-	-	平安以前?	【外】平行タテキ	【内】同心円文のオサエ	19-6
12-19	H 17	1	S R I (埋土)	須恵器	逆口縁	-	-	平安以前?	【外】平行タテキ	【内】平行タテキ	-
12-20	H 2	4	S D I - B (埋土)	須恵器	裏?	-	-	古墳時代	【外】平行タテキ	【内】同心円文のオサエ	-
12-21	I 3	5	埋器	陶器	焰塔	-	-	18世紀以降	初期	19-10	
12-22	I 2	2	S D I - A (埋土)	陶器	焰塔	-	-	18世紀以降	初期、小形	19-11	
12-23	I 1	3	S D I - A (埋土)	陶器	焰鉢	-	-	近代	内外装飾、外面に交帯1条、その上肥厚し口縁部内溝 括弧内に入り単位補遺	19-9	

## 瓦

図版番号	遺物番号	トレンチ	遺構・基本層	器種	法量 (mm)	特徴	例	写真番号	
13-1	H 1	2	埋器	斜枝瓦	(246) (139) 19 86 43	小巴: 通体に巻き三巴、垂れ: 均整唐草?	【外】小巴: 通体に巻き三巴、垂れ: 均整唐草?	19-14	
13-2	H 3	-	表枝	斜枝瓦	(125) (115) 18 -	- (34)	新羅: 通體に巻き三巴?	19-13	
13-3	H 2	-	表枝	斜枝瓦	(88) (96) 20 (78)	-	小巴: 通体に巻き三巴	19-12	
13-4	F 1	4	S D I - B (埋土)	瓦	-	- 23 -	-	玉緑、粗な目付、コピキB	19-16
13-5	F 2	5	S D I - A (埋土)	瓦	(55) (61) 18 -	-	内裏に巻き唐草 (未製品なし) 壁面	19-17	
13-6	G 3	4	I 置	平瓦	108 89 20 -	-	凸面に導脚 (单紀不明)	19-15	

## 石製品・金属製品

図版番号	遺物番号	トレンチ	遺構・基本層	種別	器種	法量 (mm)	特徴	例	写真番号
13-7	N 1	5	S D I - A (埋土)	陶製品	キセル	81 8 12	匂い口部分	【内】同心円文のオサエ	19-18
13-8	K 1	4	S D I - B (埋土)	石製品	砥石	96 47 27	使用面3面	【外】平行タテキ	19-20
13-9	K 2	4	S D I - A (埋土)	石製品	鏡	(32) 78 (14)	外表面に巻き残る (未製品なし) 镜面	【外】平行タテキ	19-19
13-10	K 3	3	S D I - A (埋土)	石製品	硯石	(51) 78 1 27	切断痕あり (電動鋸切)	-	-

## 下駄

図版番号	遺物番号	遺構・層位	種別	法量 (mm)	特徴	例	写真番号
14-1	L 1	S D I - B (埋土)	無釉下駄	219 86 29	舟形: 前1-後ろ1各の木釘留め、台裏: 鹿丸取り (頭・木釘併用留め)	【外】舟形: 前1-後ろ1各の木釘留め、台裏: 鹿丸取り (頭・木釘併用留め)	20-6
14-2	L 3	S D I - B (埋土)	無釉下駄	210 84 23	舟形: 前1-後ろ2各の木釘留め、台裏: 鹿丸取り (頭・木釘併用留め)	【外】舟形: 前1-後ろ2各の木釘留め、台裏: 鹿丸取り (頭・木釘併用留め)	20-8
14-3	L 2	S D I - B (埋土)	無釉下駄	225 87 26	舟形: 前1-後ろ2各の木釘留め、台裏: 鹿丸取り (木釘留め)	【外】舟形: 前1-後ろ2各の木釘留め、台裏: 鹿丸取り (木釘留め)	20-11
14-4	L 4	S D I - B (埋土)	無釉下駄	210 81 21	舟形: 前1-後ろ2各の木釘留め、台裏: 鹿丸取り (木釘留め)	【外】舟形: 前1-後ろ2各の木釘留め、台裏: 鹿丸取り (木釘留め)	20-7
14-5	L 5	S D I - B (埋土)	無釉下駄	(178) 82 23	舟形: 前1-後ろ2各2つの木釘留め、台裏: 鹿丸取り (木釘留め)	【外】舟形: 前1-後ろ2各2つの木釘留め、台裏: 鹿丸取り (木釘留め)	20-10
14-6	L 6	S D I - B (埋土)	無釉下駄	204 86 21	舟形: 前1-後ろ2各2つの木釘留め、台裏: 鹿丸取り (木釘留め)	【外】舟形: 前1-後ろ2各2つの木釘留め、台裏: 鹿丸取り (木釘留め)	-
15-1	L 9	S D I - B (埋土)	無釉下駄	(172) 88 25	舟形: 前1-後ろ2各2つの木釘留め、台裏: 鹿丸取り (木釘留め)	【外】舟形: 前1-後ろ2各2つの木釘留め、台裏: 鹿丸取り (木釘留め)	20-9
15-2	L 14	S D I - B (埋土)	朝引下駄	(116) 57 14	舟形: 前1-後ろ2各2つの木釘留め、台裏: 鹿丸取り (木釘留め)	【外】舟形: 前1-後ろ2各2つの木釘留め、台裏: 鹿丸取り (木釘留め)	21-9
15-3	L 7	S D I - B (埋土)	無釉下駄	(214) 74 23	舟形: 不明 (頭・木釘併用留め)	【外】舟形: 不明 (頭・木釘併用留め)	20-5
15-4	L 10	S D I - B (埋土)	無釉下駄	216 58 20	舟形: 不明 (木釘留め)	【外】舟形: 不明 (木釘留め)	20-4

第4表 出土遺物観察表 (1)

## 下駄

試験番号	遺物番号	構造・原位	種 別	法 量 (mm)	特 徴	写真番号
15-5	L11	S D 1-B (埋土)	中折り下駄	237 66 16	鼻筋:不明、後部:不明 (木釘留め?)、台裏:平坦	20-12
15-6	L 8	S D 1-B (埋土)	中折り下駄	242 76 28	鼻筋:前1-後ろ不明の木釘留め、鼻筋後存 (2本継りで鉢を作りさらに1本 (5本一組) を逆方向に巻く)、台裏:鋸歯状 (木釘留め)、台裏:平坦	20-13
16-1	L 22	S D 1-B (埋土)	逆曲下駄	204 88 45	角形、台裏鼻筋穴の周縁に抉りがある	21-1
16-2	L 16	S D 1-B (埋土)	逆曲下駄	218 113 50	長円形	21-7
16-3	L 17	S D 1-B (埋土)	逆曲下駄	227 101 38	角形	21-2
16-4	L 18	S D 1-B (埋土)	逆曲下駄	(145) 104 (31)	角形	21-8
16-5	L 21	S D 1-B (埋土)	逆曲下駄	(224) 102 (20)	角形?	—
16-6	L 15	S D 1-B (埋土)	逆曲下駄	191 76 59	長円形	21-6
16-7	L 20	S D 1-B (埋土)	逆曲下駄	(68) 64 (24)	後曲穴が後曲の前に位置する	21-5
16-8	L 23	S D 1-B (埋土)	下駄の底	輪(66) 高63 厚12	—	21-3
16-9	L 24	S D 1-B (埋土)	下駄の底	輪(82) 高52 厚11	—	21-4

## 木製品・調材

試験番号	遺物番号	構造・原位	種 別	法 量 (mm)	特 徴	写真番号	
17-1	L 57	S D 1-B (埋土)	板材 (本札?)	(110) 294 9	「...近江屋常三...屋...」の認書あり、鉢穴あり	20-2	
17-3	L 25	S D 1-B (埋土)	汁杓子	(155) (56)	凹面の直線、無企画面、新幹の断面利用	—	
17-4	L 107	S D 1-B (埋土)	ヘラ状木製品	254 22 5	先端を削り崩す	22-12	
17-6	L 105	S D 1-B (埋土)	万字の柄	119 26 9	表面横円形、内面に窓の痕跡あり	—	
17-7	L 380	S D 1-B (埋土)	章の模様?	外径49 内径16 高34	木町を側面から差し込み、押さえに使っている	23-22	
17-8	L 27	S D 1-B (埋土)	箸	(126) 7 5	箋面五角形	—	
17-9	L 29	S D 1-B (埋土)	箸	195 6 5	箋面四角形	—	
17-10	L 29	S D 1-B (埋土)	円盤状木製品	径70 10	中央に穿孔、片面に錐付孔、側面に溝が切られている	22-20	
17-11	L 30	S D 1-B (埋土)	円盤状木製品	径80 10	中央に不完全の穴、無面に2条の溝が切られ木町が3本打ち込まれる	22-21	
17-12	L 55	S D 1-B (埋土)	不明木製品	43 13 11	長方形の小型品	—	
18-1	L 56	S D 1-B (埋土)	板状木製品	279 95 10	両端部の凹み、上部に剣穴	22-23	
18-2	L 31	S D 1-B (埋土)	物持	232 228 5	木板、厚縁部に穴あり、片面側縁を給ひ両面舟縁	—	
18-3	L 33	S D 1-B (埋土)	物持	(177) 69 9	片面のみの穿孔 (複合舟縁)、鉢穴あり	22-25	
18-4	L 32	S D 1-B (埋土)	腰?	306 (160) 7	腰切、上: 舟縁を斜めに削き下: 舟縁被着用の痕?、凹縫刻穴あり	22-24	
18-5	L 35	S D 1-B (埋土)	腰?	207 33 4	4個板、舟縁と斜めに鉢穴あり、中央に板?の痕度が潜してある	22-22	
18-6	L 34	S D 1-B (埋土)	腰?	209 45 7	4個板、下部に鉢穴	—	
18-7	L 28	S D 1-B (埋土)	腰毛?	(82) 149 10	上部は削り後着?、通し穴数多あり	—	
19-1	L 42	S D 1-B (埋土)	棒・棒	300 95 9	側板、板目、外側に舟縁2条、内面下部に鉢方向の削り、内面下部は切り曲げ	22-1	
19-2	L 50	S D 1-B (埋土)	棒・棒	212 (35) 6	側板、板目、外側に舟縁2条、内面下部に鉢方向の削り	22-3	
19-3	L 49	S D 1-B (埋土)	棒・棒	210 30 7	側板、板目、外側に舟縁2条、内面下部に鉢方向の削り・底板痕	22-4	
19-4	L 47	S D 1-B (埋土)	棒・棒	135 48 8	側板、板目、外側に舟縁2条、内面下部に舟縁2条	—	
19-5	L 102	S D 1-B (埋土)	棒・棒	207 65 10	側板、板目、外側に舟縁2条、内面下部に底板の痕痕	22-5	
19-6	L 46	S D 1-B (埋土)	棒・棒	201 46 11	側板、板目、外側に舟縁2条、内面下部に底板の痕痕	22-2	
19-7	L 43	S D 1-B (埋土)	棒・棒	167 40 15	側板、板目、外側に舟縁2条、内面下部に底板の仕様、上端部に丸みあり	22-7	
19-8	L 104	S D 1-B (埋土)	棒・棒	176 65 8	側板、板目、外側に舟縁2条、内面下部に底板の仕様	—	
19-9	L 45	S D 1-B (埋土)	棒・棒	165 39 11	側板、板目、外側に舟縁2条、内面下部に底板の痕痕	22-6	
20-1	L 44	S D 1-B (埋土)	棒・棒	135 39 11	側板、板目、外側に舟縁2条、内面下部に舟縁2条	22-9	
20-2	L 48	S D 1-B (埋土)	棒・棒	(136) 21 7	側板、板目、内面下部に削り	22-8	
20-3	L 38	S D 1-B (埋土)	円盤状木製品	径202 13	底縁部取抜	22-14	
20-4	L 39	S D 1-B (埋土)	円盤状木製品	径248 —	9	22-13	
20-5	L 41	S D 1-B (埋土)	円盤状木製品	径270 —	11	墨痕あり、縦手の鉢穴2ヶあり	22-16
20-6	L 40	S D 1-B (埋土)	円盤状木製品	径230 —	8	墨痕あり、舟縁部変色	22-15
20-7	L 68	S D 1-B (埋土)	くさび状木製品	69 37 16	—	21-12	
20-8	L 39	S D 1-B (埋土)	くさび状木製品	113 48 20	22-1		
20-9	L 36	S D 1-B (埋土)	くさび状木製品	191 24 11	墨痕あり、縦手の鉢穴2ヶあり	22-11	
20-10	L 37	S D 1-B (埋土)	くさび状木製品	(107) 24 9	墨痕あり	22-10	
20-11	L 110	S D 1-B (埋土)	くさび状木製品	149 38 20	—	—	
20-12	L 117	S D 1-B (埋土)	くさび状木製品	229 58 26	木板を止めるために打ち込まいわゆる「ヌキ」	21-10	
21-1	L 100	S D 1-B (埋土)	板状木製品	712 (174)	5 板目	22-18	
21-3	L 98	S D 1-B (埋土)	舟枕	(612) 42 40	鉢穴あり	23-14	
21-4	L 99	S D 1-B (埋土)	平枕	846 68 22	—	23-15	
21-5	L 312	S D 1-B (埋土)	板材?	(820) 14 14	12cm間隔で鉢穴あり、木板残る	—	
22-1	L 101	S D 1-B (埋土)	板状木製品	338 145 10	板目、片面に焦げあり	22-17	
22-2	L 297	S D 1-B (埋土)	板状木製品	314 (73) 12	板目	—	
22-3	L 51	S D 1-B (埋土)	板状木製品	216 (90) 6	6 板目	—	
22-4	L 53	S D 1-B (埋土)	板状木製品	126 128 8	8 板目、底縁1カ所三角形に肥厚	23-21	
22-5	L 342	S D 1-B (埋土)	縞材A	74 39 14	三角筋、船面台形	—	
22-6	L 341	S D 1-B (埋土)	縞材A	— 絆125 44	大材	21-18	
22-7	L 377	S D 1-B (埋土)	縞材A	123 43 45	數寄屋造の柱の素材か (4寸角、樹皮を意識的に残す)	21-13	
22-8	L 331	S D 1-B (埋土)	縞材A	117 79 45	—	21-16	
22-9	L 339	S D 1-B (埋土)	縞材A	— 78 23	丸材、施打ちの跡あり	21-17	
22-10	L 353	S D 1-B (埋土)	縞材A	26 63 14	脚料? 什器	—	
22-11	L 54	S D 1-B (埋土)	板状木製品	86 50 19	板目、木目、柱3mmの貫通孔あり、焼け印あり	20-3	
22-12	L 118	S D 1-B (埋土)	板状木製品	285 37 16	先端が尖る	—	
22-13	L 116	S D 1-B (埋土)	板状木製品	262 径30	先端が尖る、樹皮が残る先材	21-11	

第5表 出土遺物観察表(2)

## 木製品・籠材

団体番号	遺物番号	構造・部位	種 別	法 量 (mm)			特 徴	写真番号
				長さ	幅	高さ		
22-14	L.292	S.D.I-B-(埋土)	竹竹	241	20	4	先端が尖げる	-
22-15	L.108	S.D.I-B-(埋土)	竹竹	(207)	25	4	ヘラ状、先端が丸くなる	-
22-16	L.294	S.D.I-B-(埋土)	竹竹	181	42	2		23-25
22-17	L.106	S.D.I-B-(埋土)	竹竹	(190)	20	3	先端が尖る	23-27
23-1	L.296	S.D.I-B-(埋土)	竹	265	径26	4	先端が尖る	23-24
23-2	L.295	S.D.I-B-(埋土)	竹	299	径24	3		23-23
23-3	L.293	S.D.I-B-(埋土)	竹竹	193	39	4		23-26
23-4	L.288	S.D.I-B-(埋土)	竹竹	58	40	4		23-36
23-5	L.282	S.D.I-B-(埋土)	竹竹	58	29	3		23-30
23-6	L.287	S.D.I-B-(埋土)	竹竹	62	47	5		23-35
23-7	L.284	S.D.I-B-(埋土)	竹竹	63	58	5		23-32
23-8	L.283	S.D.I-B-(埋土)	竹竹	60	19	3		23-31
23-9	L.285	S.D.I-B-(埋土)	竹竹	97	28	1		23-33
23-10	L.286	S.D.I-B-(埋土)	竹竹	99	35	1		23-34
23-11	L.291	S.D.I-B-(埋土)	竹竹	97	10	1		-
23-12	L.279	S.D.I-B-(埋土)	竹竹?	88	5	3		-
23-13	L.52	S.D.I-B-(埋土)	竹竹?	135	7	3		-
23-14	L.96	S.D.I-B-(埋土)	籠材B	182	128	20		23-28
23-15	L.220	S.D.I-B-(埋土)	籠材B	182	62	13		23-12
23-16	L.89	S.D.I-B-(埋土)	籠材B	183	117	17		-
23-17	L.90	S.D.I-B-(埋土)	籠材B	70	117	18		21-15
23-18	L.97	S.D.I-B-(埋土)	籠材B	142	159	20		21-20
23-19	L.236	S.D.I-B-(埋土)	籠材B	97	65	10		21-14
24-1	L.329	S.D.I-B-(埋土)	籠材B	360	38	28	先端	23-13
24-2	L.95	S.D.I-B-(埋土)	籠材B	317	116	10		-

## ヘギ板

団体番号	遺物番号	構造・部位	町 穴 数 (うち残存数)	木目状況	法 量 (mm)			特 徴	写真番号
					長さ	幅	高さ		
17-2	L.59	S.D.I-B-(埋土)	-	直	232	(63)	3	-	「地質神社」の墨書きあり
17-5	L.120	S.D.I-B-(埋土)	-	直	(183)	17	2	-	張紙に傳来
21-2	L.87	S.D.I-B-(埋土)	-	直	514	40	2	-	
24-3	L.60	S.D.I-B-(埋土)	1 (1)	直	142	126	2	-	片面にシミあり、竹針長55mm
24-4	L.77	S.D.I-B-(埋土)	-	直	153	41	3	-	
24-5	L.61	S.D.I-B-(埋土)	1 (1)	直	153	(52)	2	-	残存竹針長40mm
24-6	L.66	S.D.I-B-(埋土)	1 (1)	直	112	(54)	3	-	中央に刻文あり
24-7	L.145	S.D.I-B-(埋土)	1 (-)	直	88	(41)	2	-	中央に刻文あり
24-8	L.61	S.D.I-B-(埋土)	2 (1)	直	(95)	92	3	-	残存竹針長21mm
24-9	L.64	S.D.I-B-(埋土)	1 (-)	直	107	64	4	-	中央に刻文?
24-10	L.65	S.D.I-B-(埋土)	1 (-)	直	93	82	3	-	縫合に圧痕あり
24-11	L.62	S.D.I-B-(埋土)	1 (-)	直~中	87	75	3	-	中央に刻文あり
24-12	L.148	S.D.I-B-(埋土)	4 (1)	中	93	(53)	2	-	中央に刻文あり
24-13	L.80	S.D.I-B-(埋土)	-	直	251	115	2	72	斜打する正面向あり
24-14	L.74	S.D.I-B-(埋土)	2 (-)	直	260	92	2	78	
24-15	L.76	S.D.I-B-(埋土)	6 (-)	直~中	265	101	2	56	やや重む
25-1	L.75	S.D.I-B-(埋土)	3 (-)	直	262	(67)	2	67	
25-2	L.70	S.D.I-B-(埋土)	-	直	253	(85)	2	76	
25-3	L.82	S.D.I-B-(埋土)	1 (-)	直	261	(61)	3	49	
25-4	L.65	S.D.I-B-(埋土)	-	中	(258)	(81)	2	89	
25-5	L.86	S.D.I-B-(埋土)	-	直	267	(79)	4	82	
25-6	L.78	S.D.I-B-(埋土)	-	直	264	(46)	3	49	
25-7	L.123	S.D.I-B-(埋土)	-	直	271	(43)	2	82	
25-8	L.83	S.D.I-B-(埋土)	2 (-)	直~中	288	(51)	3	79	
25-9	L.79	S.D.I-B-(埋土)	1 (-)	直	273	54	4	-	
25-10	L.84	S.D.I-B-(埋土)	2 (-)	直	350	(62)	5	51	斜打する直痕あり
25-11	L.127	S.D.I-B-(埋土)	1 (-)	直	152	(57)	3	-	
25-12	L.166	S.D.I-B-(埋土)	-	中	(73)	(47)	3	49	
25-13	L.141	S.D.I-B-(埋土)	-	直	146	47	2	76	
25-14	L.152	S.D.I-B-(埋土)	-	直	155	(45)	2	43	
25-15	L.143	S.D.I-B-(埋土)	1 (-)	直	144	(38)	2	56	
25-16	L.160	S.D.I-B-(埋土)	-	直	(52)	14	2	-	
25-17	L.149	S.D.I-B-(埋土)	-	中	85	(29)	3	-	

第6表 出土遺物観察表(3)

## VII まとめ

### 1. 遺構について

遺構については、年代を特定できるものについて、簡略に述べることにする。

#### (1) 20世紀以降：SD 1-A 堀跡

SD 1-Aの上端は、前述したように、昭和25~26年の官舎建設工事整地の折に、切岸によって形成されたものであろう。

#### (2) 近世-19世紀代：SD 1-B 堀跡

SD 1-Bの年代は、底面から大堀相馬白濁釉陶器が、最下層中から19世紀代の瀬戸美濃陶器が出土しており、概ね19世紀以降と理解される。また、文化・文政期に出現する無歯下駄（草履下駄）も出土しているが、これとも矛盾しない。次に下限の問題である。前宮城刑務所職員佐藤正治氏、宮城刑務所職員柴修也氏からは、集治監時代に所内で木工等の労働が行われ、その建材が投棄された可能性についてのご指摘もいただいている。しかし、SD 1-Bからは、近代に下る陶磁器他の遺物は一切出土していない。出土遺物からみて近世の枠内に収まるものと考えられる。

#### (3) 10世紀中葉～13世紀以前：SD 5 溝跡

SD 5は、灰白色火山灰を多量に含むIV層上面の遺構である。5トレンチⅢ層中からは、13世紀代の龍泉窯系無文青磁碗が出土しているので、下限は13世紀以前として理解される。

#### (4) 平安時代（10世紀中葉以降）：SD 3 溝跡、SK 2～SK 6 土坑

SD 3は、IV層上面検出である。IV層は層中に10世紀前半で降下したと見られる灰白色火山灰を二次堆積として含むことから、SD 3は10世紀中葉以降のものと考えることができる。出土遺物は、最新でロクロ土師器と赤焼土器坏と思われる小片である。SK 2～SK 6は、Ⅲb層上面で確認した。出土遺物は、最新でロクロ土師器と赤焼土器坏かと思われる小片である。SD 3の下限は4トレンチⅢb層堆積以前、SK 2～SK 6の下限はⅢa層堆積以前であるが、この4トレンチⅢ層（Ⅲa層・Ⅲb層一括取り上げ）の最新の遺物はロクロ土師器であり、128点の出土遺物に中世以降のものを含まない点、5トレンチⅢ層と年代的に一致するか疑問が残る。よって、概ね中世に下らない遺構として考えたい。

#### (5) 平安時代～灰白色火山灰降下以前：SR 1 河川跡、SK 1 土坑

SR 1から出土した遺物のうち、最新のものはロクロ土師器である。2トレンチでは、SR 1はIV層に覆われており、IV層堆積以前に埋没した河川跡である。堆積土にも灰白色火山灰が全く見られないため、概ね9世紀代の河川跡と思われる。SK 1は、V層上面で確認したが、3トレンチはV層の隆起が見られ、また上位の基本層の削平が著しいため、より上位より掘り込まれているものと推測される。出土遺物は21点で、縄文土器が多いが最新のものはロクロ土師器である。IV層との関係は不明であるが、概ね平安時代としたい。

#### (6) 年代不明：SD 4 溝跡、SD 6 溝跡、SK 7 土坑

その他の遺構は年代が絞りきれなかった。SD 6は5トレンチⅡ層上面で確認し、SD 1-Aに切られるが、Ⅱ層について堆積年代が不明であり、結論づけられなかった。SD 4については、本来の確認面が後代の削平によつて失われている可能性がある。規模・方向・形状ともにSD 3に似るが、出土遺物もないため不明である。SK 7は、SD 1-A底面での検出で出土遺物もないことから、これも不明である。

### 2. 出土遺物について

ここでは木製品に関して、分類と若干の類例紹介をしたい。木製品は、すべてSD 1-Bからの出土である。年

代に関しては、層位的な取り上げをしていないため厳密ではないが、最下層より19世紀代の瀬戸美濃製品が、底面より大堀相馬白濁釉製品が出土しており、概ね19世紀代と考えられる。

### (1) 下駄

下駄は、SD 1-Bより19点出土している。A~Eの5類に大別される。

A類：歯を持たない無歯下駄、いわゆる草履下駄のうち台裏側面と土踏まず部分が抉られる一群である。7点ある。

なお、これらは鼻緒の留め方にも共通点がある。前鼻緒は大きめの木釘1本、後鼻緒は小型の木釘を2本打ち込み留めている。A類は、台表に貼られるものの接合方法によって、さらに2類に細分される。

○A I類：主として鼻緒留めの木釘と鉢で留められるものである。台表に貼られるものの種類で、さらに2類に細分される。

○I a類：4枚の薄い板を骨とし、これにい草を巻いたもの。【L 1】

○I b類：稻藁製の表を貼り付けたもの。【L 3】

○A II類：主として鼻緒留めの木釘と、それを補い小型の木釘で貼り付け、鉢が用いられていないもの。

【L 2・L 4・L 5・L 6・L 9】

B類：歯をもたない無歯下駄であるが、台裏が扁平なものである。2点ある。これらは、A類と異なり、台表の鼻緒接合部分が凹面となる。台表には遺存してはいないが、鉢痕や細かな木釘が打ち込まれた小孔があるため、A類同様何か貼られていたものと思われる。この2点は、その台表の貼り物の留め方と台裏の形状で異なりを見せる。

○B I類：台表の貼り物の接合に鉢が用いられている。台裏側面にはごく軽い抉りが入る。【L 9】

○B II類：台表の貼り物の接合が木釘で行われている。台裏側面に抉りが入らず全く扁平である。【L 14】

C類：いわゆる「中折り下駄」ないし「中切下駄」と呼ばれるものである。歯を持たないが台が前部・後部よりも、貼り物と鼻緒でそれらを一体化する。2点ある【L 8・L 11】。L 8には稻藁製の貼り物が残存する。L 11の貼り物は不明である。L 8は鼻緒がついた状態で出土した（整理作業中に破損）。鼻緒は2本を右巻きに捻って芯とし、次に1本を逆方向に巻いている。

D類：歯を持つが台と歯が一体化しており、連齒状の下駄である。1点ある【L 14】。前の方が残存し、前鼻緒の穴が大きく空けられている。台表に黒漆、台裏凹部に赤漆が微かに残存する。

E類：台と歯が分離した差歛下駄である。いずれも台に穴を空けることなく接合しており、「陰卯差歛下駄」と呼ばれるものである。7点ある。後鼻緒の位置により2類に細分される。

○E I類：後鼻緒孔が、後歯よりも前に位置するものである。1点ある【L 20】。歯は残存せず圧痕のみが残る。後部のみの出土で、法量が小さい。

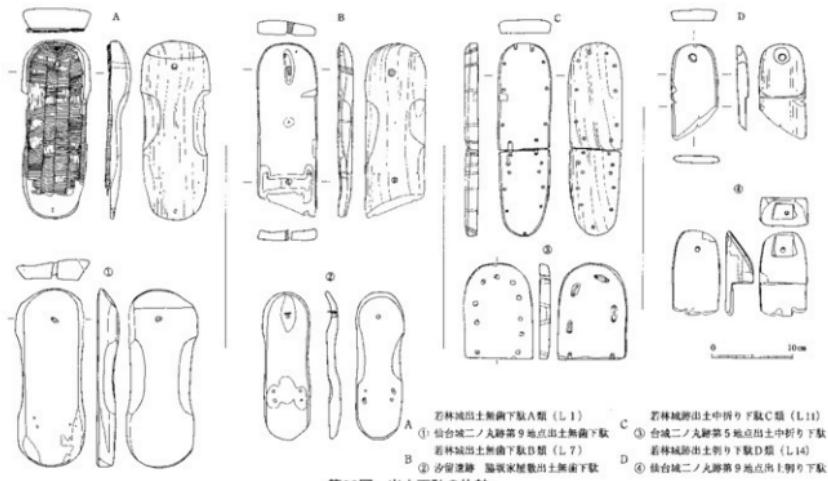
○E II類：後鼻緒孔が、後歯よりも後ろに位置するものである。6点ある。台の形状により、さらに2類に細分される。

○II a類：台の形状が、概ね角形の物である。【L 17・L 18・L 22】

○II b類：台の形状が、丸みを帯び長円形を呈する物である。【L 15・L 16 ※L 20もII b類か】

第26図は、他遺跡の出土下駄と本調査の出土下駄の主なものを比較したものである。

A類の類例としては、①仙台二ノ丸跡第9地点1号池出土資料（東北大理蔵文化財センター：1997※以下、東北大）がある。1号池の年代は19世紀中葉とされる。①の資料は台表の貼り物が存在していないが、台の形状などから、A類の類例と考えられる。報文によれば、鼻緒の接合について前は穴に通すと想定（東北大：1998）されているが、本調査のものには太めの木釘が残存している。市田京子氏によれば、草履下駄は文化文政期以降に出現（市田：2000）するとされている。



第26図 出土下駄の比較

B類の類例としては、第26図②沙留遺跡脇板家屋敷出土資料（東京都埋蔵文化財センター：1997）がある。年代は、19世紀出現とされている。

C類の「中折り下駄」の類例のうち、第26図には③仙台城二ノ丸跡第5地点出土資料（東北大：1993）を掲載した。市田氏によれば、中折り下駄は寛政年間出現（市田：2000）とされるが、第5地点出土資料は元禄年間のもので、これを遡る資料である。本調査資料よりも身幅があり、表に貼り付けられたものの留め方も異なるようで、本調査出土のものと形態的に異なっている。

D類は、構造としては「歯の一部もしくは全部が台裏から独立しない形式の『例り下駄』」（古泉：1987）に分類される。本調査資料は傷みが激しく裏面もかなり減っているが、遺存状況の良いものに、仙台城二ノ丸跡第9地点出土例り下駄がある。（第26図④）

E類の陰卯差歎下駄は、L20以外全て後緒穴の位置が後歎よりも後ろ側にある。L20は法量も他のものに比べて小さく、比較検討の対象としてはふさわしくない。近世の下駄がまとまって出土している東北大二ノ丸跡では、元禄年間を境として後歎の後ろ側に位置するものが増え、18世紀後葉にはそれに一元化されている（東北大：1998）。19世紀代と目される本調査資料も、二ノ丸跡の出土状況と矛盾しない。台の形状については、二ノ丸跡ではいずれの時期においても長円形と角形が併存しているとされている（東北大：1998）。

## (2) 円盤状木製品

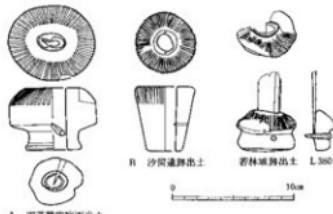
6点ある。円盤状木製品としたものには、桶の底板・樽の天板や底板・蓋物等が考えられるが、用途が特定できないため、円盤状木製品として一括した。

L29は、径が小さく、片面には煤が付着している。側面をみると溝が切られており、以上の形態的特徴から提灯の底板の可能性が指摘できる。煤付着側が内面と思われる。

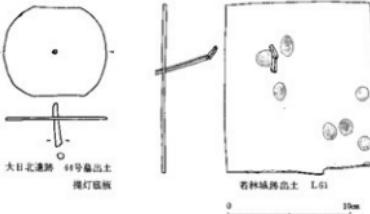
L38は、径に比して比較的厚手である。片側端部が削り取られ面取りが施してある。

L39には、段が見られ、そこから破損している。横木が接合されていた可能性があり、蓋物と考えられる。

L40は、片面の縁に7~8mmの一様な変色部がめぐりこれも蓋物と思われる。変色部側が内面で、墨痕が残る側が外側になる。



第27図 傘の軸轆の比較



第28図 大日北遺跡出土提灯底板とヘギボ (L61)

L41は最も径が大きく270mm程度と推定される。片側に墨書を残す(文字不明)。側面には釘穴のような小孔が二つあり、接合されていたと思われる。

L30は、中央に不定形に穿孔されており、何か芯棒のようなものに通されていたと思われる。片面には墨?が打ちたれている。断面には2条の細い溝があり、木釘が打ち込まれている。

#### (3) 桶・樽の側板

11点ある。形状から3類に大別される。

A類：内面上部に削りが入るもの。7点ある【L42・L45・L46・L48・L49・L50・L104】。

B類：内面上部に削りが入らないもの。5点ある【L47・L102】。

C類：断面において、上端が丸みを帯びるもの。2点ある【L43・L44】。

ほとんどのものは、外面にタガ痕が観察される。縦方向のケズリ痕が残る物もある。内面については、桶の製造段階で底板を固定するのに行われる「博の切り込み」(成田：1996)の痕跡は看取できない。鋭角なものではないが、わずかに底板付近に凹みが見られるものもある。A類の内上面部の斜方向の削り込みについては、蓋を載せるのではなく、受けけるためというようなことも推測できよう。L42については、身幅があるためか内面下部に、曲物を製造する際に行われる「切り曲げ」(成田：1996)のような技法が取られている。

#### (4) 傘の軸轆

L380は、和傘の軸轆と考えられるものである。第27図に類似資料を2点掲載した。本資料も含めて、上部に細かい切り込みが入れられている。また側面には小さな木釘が差し込まれている。なお、旧芝離宮庭園では、この側面の木釘が伴わないものも出土している。

#### (5) 竹

一定の長さに切りそろえた割竹である。長さ2寸程のものと3寸程のものがある。用途等不明である。2寸程のものがL282・L283・L284・L288で、これよりやや長い物でL287がある。3寸程のものにL285・L291がある。

#### (6) ヘギボ

厚さ2~3mmの柾目の材をヘギボと総称した。216点出土し木製品のうち最も出土量が多い。大半は破損が著しく遺存状況の良いものを図示した。図示資料は31点である。形態から2類に分けられる。

A類：ほぼ正方形のもの。中央付近に穿孔がみられ大きめの竹釘が刺さったままのものもある。

B類：長方形のもの。竹釘の穴や竹釘を残すものも見られる。片面に風化面を持つものもある。

A類の類例として、多賀城市大日北遺跡出土の提灯板(第28図)がある。形状は円形・隅丸正方形に大別されるが、経て丁寧に作られている。出土資料は、端部の調整も行われておらず粗製のものである。L61は他に比して法量が大きいが、蝶の痕跡が点状にシミが見られる。

B類には「こけら」の可能性をもつものも含まれる。武藤正幸氏に鑑定していただき、L82・L84・L123につ

いは竹釘の跡と風化面の痕跡から「こけら」の可能性を指摘された。B類の法量は、長さがほぼ240mm～280mmの範囲に収まるが、一部長い物と板端に短い物がある。長い物は総じて身厚である。破損品が多い中、L80は本来の幅を残していると観られ、115mmを測る。また、L59は「須賀神社」の墨書がみられ木札類と考えられる。

なお、ヘギ板観察表に設けた「木目」欄で、「密」とされているものは完全な柾目材である。「密～中」「中～粗」としたものは、柾目から板目へ移行する様子を現している。

#### (7) 端材

木製品の製作工程ないし構造物の建築の際に排出されたと考えられるものを端材と一括した。このうち、観察表に「端材A」としたものは、木製品の製作や建築に関わると考えられるものである。このうち、L377は4寸角の材で樹皮を意図的に残している点などから数寄屋造りに関するものではないかとの指摘をいただいている。

「端材B」としたものは、排出過程が不明のものである。法量には大小あるが、総じて木を斜方向に切断し、その後柾目方向に木をへいでいるように観察される。

### 3. 若林城について

若林城は、寛永4（1627）年、政宗の「屋敷」新築の願いを許可する旨の2月23日付「老中奉書」を受け築城されたものである。ところが工事は難航し、翌寛永5（1628）年5月には大雨によって「北之土居又破損之由候」<sup>224</sup>というようなこともあった。この際も政宗は、名取・国分・宮城中の茅を刈り、土居の高さに応じて上一重、茅一重というように念入りにつき固めるよう事細かに指示している<sup>225</sup>。築城成り、落成移徒の儀が執り行われたのは、寛政5年11月16日のことである。

城の規模は、「政宗記」には「屋敷を三町四方に取立」とある。若林城跡は、東西370m・南北290m程で、これに堀がめぐる。城の外郭は、「政宗記」にいう「弘さ（ママ）三十間の堀」・「二丈餘尺の土手」で囲まれ、北・東・西の三方に虎口があった。虎口部分の土塁は鍵形に屈曲し、それぞれ拠形状の形状をもっていたことが分かる。大手は「街道に近い西門であった」と推定されている（菅野：1996）。また、北西・北東・南・南西の4カ所には張り出しがある。このうち、南西の張り出しについては、表現されている絵図といかない絵図がある（第31図）。表現されている絵図としては、管見の限りでは宝暦7（1757）年～明和3（1766）年「仙台城下絵図」、安永元（1772）年～同7（1778）年「仙臺地圖」があるだけだが、築城当初からのものと考えられるであろう。若林城内の様子については、政宗の若林城普請に関する指図である寛永7（1627）年の「若林普請覚書」（市史：1995b）がある。これによれば、若林城内には庭園や的場が設けられ「御山里」と呼称されていたこと、その一角（の土手）には石垣が積まれていたことが分かる。また、「東奥老士夜話」<sup>226</sup>によれば、北に築山、東南の隅には櫓があったという。第31図に掲載した若林御薬園の墨書が見える「御修復帳」は、文化12（1815）～14（1817）年の補筆が推定されているものである。この頃までは若林御薬園の存続が確認できる。

若林城内は過去2回の発掘調査が行われている。1次調査では、中世から近世初期の幅におさまる可能性が大きい掘立柱建物跡と角柱痕跡を有するピット等を検出している（田中：1985）。2次調査では、平瓦が出土した土坑を検出し、若林城に関わる遺構として理解されている。他に、珠文帯左巻軒丸瓦・志野織部碗？が遺構外から出土している（佐藤甲二：1986）。

本調査で検出した基本層5トレンチⅢ層については、堆積年代が中世に下るもので、標高は11.4mである。これに対して当調査区の北側に隣接する南小泉23次調査区では、遺構検出面が14.5mであり、本調査Ⅲ層に対する比高差3.1mを測る。これは堀跡部分が元来旧河道起源の凹地で、この自然地形を生かした縄張りが行われたことを推測させるものである。なお、第29図に示したように、城の南には、「五谷」・「五ツ谷」といった谷地形に関わる旧字名が存在する。これらから、若林城は旧河道に挟まれた部分に築城したものと推測される<sup>227</sup>。

#### 4. 結び

- (1) 若林城跡は広瀬川北岸に形成された標高11~14mの自然堤防上に立地する。今回の調査は若林城跡北辺堀跡の北西部で行われた。

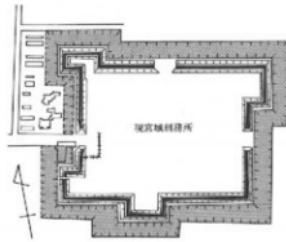
(2) 道路拡張建設工事に関わる遺跡地内の約370m<sup>2</sup>を調査し、若林城跡の堀跡の一部を確認した。他の検出遺構には、溝跡4条・河川跡1条・土坑7基がある。

(3) 堀跡は、形状・出土遺物からA・Bに分け調査を進めたが、城廃絶後の埋没過程での19世紀以降から宮城刑務所官舎建設の間における掘の状況の一端が窺われた。堀跡出土の木製品類等は外からの一括棄棄物である。江戸時代後期から終わりにかけての生活品類の出土は貴重な資料となりうる。

若林城跡の堀は極めて巨大なもので、現況確認でも堀北辺部から土壘基底部まで25m前後の幅を有する。今回の調査は堀跡の部分的な調査に留まり、堀本来の形状や深さなどは不明となっている。今後の調査に期待するものが大きい。



第29図 若林城周辺旧字名  
(原図:田中1999)

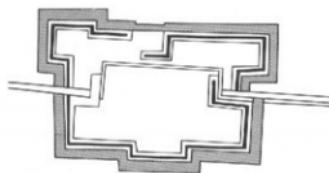


第30図 若林城跡概要平面図  
(藤沼邦彦ほか1981)

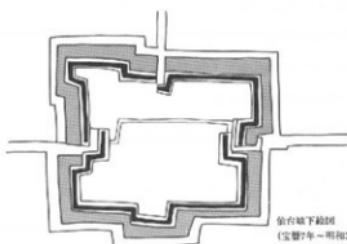
(輪郭線をトロース、黒塗は土壌、アミは根部分)



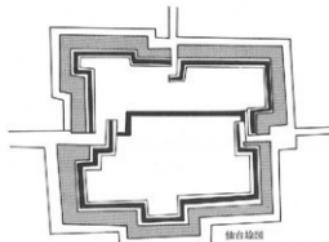
御修復額 作製年：寛文12・延宝8・貞享3・元禄11年  
補筆年：(推定)文化12~14年



安政補正改革仙廢給回  
(安政3年-6年間製作)



仙台城下繪圖  
(宝曆7年～明和3年間製作)



備註欄

### 第31図 若林城跡各繪図

## 引用・参考文献（五十音順）

- 飯村 均（1997）：「中世食器の地域性 〔2〕東北南部」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集
- 五十嵐康洋（1995）：『南小泉遺跡 第25次調査報告書』仙台市文化財調査報告書第196集
- 五十嵐康洋（1998）：『南小泉遺跡 第26次調査報告書』仙台市文化財調査報告書第225集
- 石村真一（1997）：『ものと人間の文化史82 桶・樽』I・II・III法政大学出版会
- 市田京子（2000）：『江戸時代の下駄』江戸遺跡研究会『江戸文化の考古学』吉川弘文館
- 伊東信雄（1937）：『仙台城下町人町の商業特権の変遷』『仙台郷土史の研究』宝文堂
- 伊東信雄（1952）：『仙台馬市の起源』『仙台郷土史の研究』宝文堂
- 井上喜久男（1992）：『尾張陶磁』ニューサイエンス社
- 小川淳一（1980）：『塙沢北遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第69集
- 沖野小学校（1982）：『沖野の郷土史』
- 奥津春生（1973）：『大仙台園の地盤と地下水』宝文堂
- 金森安孝・福留後一（1992）：『南小泉遺跡 第21次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第164集
- 金田章裕（1993）：『微地形と中世村落』吉川弘文館
- 菅野正道（1993）：『『国分盛重』と国分氏の滅亡』『仙台郷土研究』復刊18巻2号
- 菅野正道（1995）：『秋田県公文書館所蔵『国分文書』』『市史せんだい』vol. 5
- 菅野正道（1996）：『政宗の『總居所』若林城』『歴史群像名城シリーズ13 仙台城』学研
- 菊地逸夫・佐々木茂樹（1983）：『南小泉遺跡』宮城県文化財調査報告書第94集
- 木村孝文（1999）：『若林の散歩手帖』宝文堂
- 旧芝離宮庭園調査団（1988）：『旧芝離宮庭園 浜松町駅高架下歩行者道架設工事に伴う発掘調査報告』
- 工藤信一郎・渡部紀・根本光一（1998）：『南小泉遺跡 第30・31次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第226集
- 工藤哲司（1991）：『南小泉遺跡 第20次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第153集
- 黒沢泰輔（1963）：『陸奥国分寺』国分寺
- 小泉和子（1980）：『日本史小百科 家具』東京堂出版
- 小泉和子（1999）：『道具と暮らしの江戸時代』吉川弘文館
- 小泉和子（2000）：『くらしの中の桶と樽』 小泉和子編『桶と樽－脇役の日本史』法政大学出版会
- 古泉 弘（1987）：『考古学ライブライター48 江戸の考古学』ニューサイエンス社
- 小林清治（1996）：『仙台城築城－青葉の名城誕生す』『歴史群像名城シリーズ13 仙台城』学研
- 斎野裕彦（1994）：『南小泉遺跡 第22次・23次発掘調査報告書』仙台市文化財発掘調査報告書第192集
- 佐藤 淳（1990）：『南小泉遺跡 第19次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第141集
- 佐藤甲二（1985）：『南小泉遺跡 第12次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第80集
- 佐藤甲二（1986）：『若林城跡－平安時代の集落跡－』仙台市文化財調査報告書第90集
- 佐藤 淳（1987）：『南小泉遺跡 第14次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第109集
- 佐藤 淳（1990）：『南小泉遺跡 第16～18次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第140集
- 佐藤 淳（1997）：『姜裡園遺跡発掘調査報告書－伊達家別荘跡の調査－』仙台市文化財調査報告書第214集
- 沙留遺跡調査会（1996）：『沙留遺跡－沙留遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- 七郷の今昔を記録する会（1993）：『ふるさと七郷－もうひとつの仙台－』仙台市七郷市民センター
- 紫桃正隆（1974）：『史料仙台蒙内古城・館』第四巻宝文堂
- 柴 修也（1990）：『西南戦争余話』非売品

- 仙台市史編纂委員会（1950）：『仙臺市史 第3巻 別編1』
- 仙台市史編纂委員会（1953）：『仙臺市史 第7巻 別編5』
- 仙台市史編纂委員会（1954）：『仙臺市史 第1巻 本編1』
- 仙台市史編纂委員会（1994a）：『仙台市史 特別編1 自然』
- 仙台市史編纂委員会（1994b）：『仙台市史 資料編10 伊達政宗文書1』
- 仙台市史編纂委員会（1995a）：『仙台市史 特別編2 考古史料』
- 仙台市史編纂委員会（1995b）：『仙台市史 資料編1 古代中世』
- 仙台市史編纂委員会（1996）：『仙台市史 資料編2 近世1 藩政』
- 仙台市史編纂委員会（1999）：『仙台市史 通史編1 原始』
- 仙台市史編纂委員会（2000）：『仙台市史 通史編2 古代中世』
- 鈴木公雄（1999）：『出土錢貨の研究』東京大学出版会
- 武田健市（1998）：『大日北遺跡－近世墓の調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第49集
- 田中則和（1985）：「若林城跡」『年報6』仙台市文化財調査報告書第83集
- 田中則和（1997）：『宮城県南小泉遺跡』『東北の貿易陶磁貿易陶磁研究集会平泉大会資料』日本貿易陶磁研究会
- 田中則和（1999）：「一地域における中世から近世へ－南小泉遺跡と妻種園遺跡（一）－」『六軒丁中世史研究』第六号
- 田中則和（2000）：「一地域における中世から近世へ－南小泉遺跡と妻種園遺跡（二）－」『六軒丁中世史研究』第七号
- 東京都埋蔵文化財センター（1997）：『沙留遺跡1－旧沙留貨物駅跡地内の調査－』東京都埋蔵文化財センター調査報告第37集
- 東北大大学埋蔵文化財調査研究センター（1993）：『東北大大学埋蔵文化財調査年報 6』
- 東北大大学埋蔵文化財調査研究センター（1997）：『東北大大学埋蔵文化財調査年報 8』
- 東北大大学埋蔵文化財調査研究センター（1998）：『東北大大学埋蔵文化財調査年報 9』
- 日本美術刀剣保存協会宮城県支部（1973）：『仙臺藩刀銘譜』
- 成田壽一郎（1996）：『曲物・鎧物』理工学社
- 原田多加司（1999）：『檜皮葺と柿葺』学芸出版社
- 藤沼邦彦ほか（1981）：『日本城郭大系第三巻 山形 宮城 福島』新人物往来社
- 藤原相之助（1939a）：『仙臺郷土研究としての國分ものがたり（一）』仙臺郷土研究会『仙臺郷土研究』第十卷第八號
- 藤原相之助（1939b）：『仙臺郷土研究としての國分ものがたり（二）』仙臺郷土研究会『仙臺郷土研究』第十卷第十號
- 藤原相之助（1939c）：『仙臺郷土研究としての國分ものがたり（三）』仙臺郷土研究会『仙臺郷土研究』第十卷第十一號
- 松尾剛次（1998）：『中世都市鎌倉と寒河江・慈恩寺』西村山地歴史研究会『西村山地歴史の研究』第16号
- 南材木町小学校（1984）：『広瀬川と町 わが郷材』
- 三原良吉（1948）：『宮城刑務所と若林城』宮城刑務所
- 宮城刑務所（1979）：『宮城刑務所創立100周年記念 悠久』
- 宮城県持社序（1976）：『宮城縣持社名鑑』
- 『宮城県の地名日本歴史地理体系第4巻』平凡社
- 結城慎一（1982）：『南小泉遺跡 都市計画街路建設工事関係第1次調査報告』仙台市文化財調査報告書第35集
- 結城慎一・工藤哲司（1983）：『南小泉遺跡 都市計画街路建設工事関係第2次調査報告』仙台市文化財調査報告書第52集
- 結城慎一・佐藤 洋（1984）：『南小泉遺跡 都市計画街路建設工事関係第3次調査報告』仙台市文化財調査報告書第68集
- 結城慎一・佐藤洋ほか（1985）：『仙台城三ノ丸跡 発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第76集
- 渡部弘美（1983）：『南小泉遺跡－青葉女子学園移転新営工事地内調査報告－』仙台市文化財調査報告書第55集
- 渡部弘美・伊東真文（1999）：『保春院前遺跡・妻種園遺跡』『宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』

注1：ここでの「南小泉地区」とは、南小泉遺跡・養種園遺跡・保春院前遺跡・若林城跡を包摂する地域としている。南小泉遺跡は広範囲にわたるので、本報告書では、宮城野萩大通り以西を「西部」、宮城野萩大通りから国道4号線仙台バイパス間を「中央部」、国道仙台バイパス以東を「東部」とした。

注2：懸の名称は、いずれも現在の呼称である（出典—七都の今昔を語る会1993）。

注3：六郷堀近隣の調査は、本調査である。七郷堀近隣の調査は、都市計画街路「南小泉・茂庭線」関連遺跡発掘調査である。なお、「南小泉・茂庭線」関連遺跡第28次調査・養種園遺跡第2次調査・保春院前遺跡第1次調査の総称で、現在報告書作成中である。よって、本文中に記載されたこの3調査に関わるすべての記述は、報告書発行に先立つものであり、今後見解が変わることを持つ。

注4：この繩文前期頃の包含層と見られる黒色シルト・粘土層は、養種園遺跡北東部～南小泉遺跡にかけて広く確認されている層である。（遺物の出土は現在のところ、この地点だけである。）

注5：国分寺の創建瓦は、762年に修造された多賀城第二期のものと同様であり、この時期には伽藍の主要部は完成したと見られている（市史2000）。

注6：4次調査については結城1982参照。

注7：7次調査については新城・工藤1983参照。

注8：規模から見て常住施設とは考えがたいが、カマドを有するため、住居跡とした。

注9：「日本三大実録」には、貞觀12（870）年に陸奥国に派遣された新羅人「潤清、長焉、真平等」は「才長於造瓦」、よって「須陀奥國修理府料造瓦事、令長其道者相從伝習」とある。また、貞觀15（873）年には、陸奥国の存因が不穏な動きを示した際、国分寺に五大菩薩像を安置し安寧を願ったという記録がある。

注10：984年、国分寺の金堂で書写された大般若經が盜まれるという記録（「日本高僧伝要文抄」）があり、その頃までは存続が確認されている。国分尼寺については、1080年「顛倒」とある（「水左記」）。

注11：「奥州国分寺縁起記」による。焼亡の際、寺僧が本尊の薬師如来・十二神将像、白山神社のご神体を持ち出し、この地に小堂を建ててこれを祀ったという。

注12：これは千葉氏を祖とする「平姓国分氏」である。国分氏の出自については、ほかに「藤姓国分氏」説がある。国分氏は、文治5年奥州合戦の際、東海道大將軍であった千葉常胤に従った五郎胤道が、功勳によって宮城郡国分荘を賜り、以後国分姓を称したのが国分氏の始まりといわれており、それが（おそらく南北朝時代頃）長沼姓の藤姓国分氏にすり替わったと解説されてきた。

注13：屋敷の名称は、南小泉遺跡の中世屋敷跡研究の嚆矢となった南小泉16次～18次調査（佐藤洋1990）のもので、以後の報告書もこれに依拠しているため、本報告書でもこれを継承した。なお、第2回にある屋敷日～Mは、筆者が便宜的に付けたものである。

注14：南小泉の中世の屋敷跡は、田中1997・1999に詳しい。本図もそれをもとにしている。

注15：敷地を区画するとみられる溝は、幅3～5m・深さ2m程度、断面V字形の防衛性の高いものである。区画内もさらに小規模な溝で区分けされている模様で、L字形の溝や直行する溝、通路かと思われる2条並行する溝など様々見られる。

注16：井戸や土坑からは甕土も出土しており、掘立柱の建物の中には土甕のものもあったと考えられる。

注17：道路跡は、馬の背状の高まりの上を通るが、それを掘り窪め、砂に土器・瓦・中世陶器の破片ないし意図的に割ったものと大小の礫を入れてパラスとしている。この道路跡は平安時代（9世紀代）の堅穴住居を切っており、少なくともその上限はそれ以降である。またこのパラスの中には、近世まで下らない瓦質擂鉢が含まれており、少なくともパラスの壇設作業は戦国期に行われたものとしてとらえられる。

注18：擂鉢が主体である。擂鉢は被炎したものが多く、中には取手を持つものもあり、いわゆる「擂鉢鍋」としての使用が考えられる。ほかに釜形土器、風炉、香炉、鉢、皿がある。

注19：政宗の取り立てによりその刀身に九曜紋を刻むことを許された刀工本郷国包は、「小泉村若林」に居住し釘打ち職人をしていたという。なお、登米石森邑雙親子玉英が天保8年に著した「表海殿治伝所蔵」によれば、国包の5代前の国住は、「本国大和」「応永中（1394～1427）仙台国分若林に住す」とある（「仙臺藩刀匠鉢譜」）。

注20：養種園遺跡の北方700mの陸奥国分寺所蔵薬師如来像の厨子額文（1585年）には、「藤原朝臣政重（国分盛重）」の名が見え、この時期に国分氏が陸奥国分寺と深い関わりを持っていたことが知れる。また、「伊達文書」の記述から国分寺門前には、馬市が立つ「国分日町」と呼ばれる市町もあった。水様8（1565）年、伊達輝宗は、家臣を「国分」に遣わし馬を買い求めている。また、政宗も慶長5（1600）年、家臣を「国分日町」に遣わし「馬拾一疋」買わせている。

- 注21：中近世移行期の六道銭を詳細に検討した鈴木公雄氏は、永楽通寶6枚よりなる六道銭を「完全セット」と呼称し、16世紀後半より永楽通寶が東国に集中することのひとつの現れと見た。下限は、江戸幕府が永楽通寶の流通停止を命じた慶長13（1608）年頃か。江戸幕府は、この禁令の際、以降金・銀・銭の三者で取引を行うように命じ、これを寛永13（1636）年の古窓永通寶の発行でもって一本化した。（以上、鈴木1999）
- 注22：小林1996。なお、大広間の完成は落成は慶長15（1610）年のことである。
- 注23：なお、二日町の住人も国分氏の氏神白山神社の祭礼に奉仕する義務を持っており、二日町住人も日町から移り住んだ可能性がある（伊東1937）。
- 注24：1997年1月トレンチSK113。出土遺物には、中国角皿（明末清初）、中国古染付型打皿、備前壺、この時期の指標となる登窯Ⅰ期<sup>※1</sup>の瀬戸美濃灰釉輪等の陶器器と、キセル、銭貨（宋錢か）等がある。
- <sup>※1</sup>井上1992。井上編年によれば、登窯Ⅰ期の年代観は慶長10年～元和年間（1605～1623）である。
- 注25：平安通寶の出土例は全国的に見ても極めて少なく、本例で7例目の出土である。宮城県内では、比較的の出土例が多く、塩沢北遺跡（小川1980）、南小泉9次調査に次いで3例目となる。平安通寶の流通年代は明らかでない。
- 注26：「御一門始御家中御屋敷削成候」（東奥老人夜話）。
- 注27：美穂園遺跡の調査で検出された15世紀末～17世紀初頭の造構の方向基準はN-10°～20°-Eである。なお、若林城下町の範囲については、町を管轄したこの二人の奉行の職権が及ぶ範囲が不明なため、明確な結論には至っていない。
- 注28：若林城跡南側には軸線の貫徹は見られないものの、「東奥老人夜話」には、「長町の中ほどより、かねの手に東へ若林への通付申し候。御構の向かいに大橋かゝり申候。長町の橋と双橋にかゝり候よし老人共申候を承り申候」の記述があり、若林城の南に広瀬川に大橋を架け、直接南方への交通の便を図った様子がうかがわれる。また、「御名語集」に記されている政宗の直話として「若林御城南の川除昔請過ぎて後のおん話に、この頃年月の水に橋もいたみ皆替せばや」云々とある（三原1948）。
- 注29：「東藩史稿」。
- 注30：南小泉9次調査では、瀬戸美濃段付白天目茶碗が出土した第1号井戸跡がある。南小泉14次調査（佐藤洋1987）では、美濃灰釉碗、美濃灰釉丸皿、唐津鉄袖壺鉢とともに右巻き三巴文金箔軒平瓦、桔梗文軒平瓦が出土したSM1がある。現在の七郷堀（仙台堀）にほど近い地点で行われた南小泉28次調査では、4基の土坑・整穴造構が確認されている。SK120からは、時期決定資料の瀬戸美濃鉄袖壺鉢のほか、切り紙文様の黒織部、織部茶入、中国産青花小杯、唐津半筒碗、志野織部皿等が、碗状滓に混じって出土している。SK123からは、御深井釉皿、青織部六角向外、唐津半筒碗等が出土している。SI103堅穴造構からは、棒状鉄に混じって、瀬戸美濃茶釜形水指、中国産青花小杯、瀬戸美濃鉄袖壺鉢、瀬戸美濃天目茶碗などが出土している。SK110からは、御深井釉皿、美濃唐津皿、備前壺、中国青花漢詩文碗などが出土している。
- 注31：寛寶6（1678）年同8（1680）年間製作「仙台城下大絵図」には、保春院から南に延びる道の東側に「御假屋」が、東側に「鹿又久兵衛」屋敷が見える。なお、元禄4（1691）・5（1692）年製作「仙台城下五厘縫絵図」には、鹿又屋敷しか見えず、御假屋はこの頃には廃絶したものと思われる。
- 注32：宝暦7（1757）年製作「仙台城下絵図」には「小泉御屋敷」、天明6（1786）年～寛政元（1789）年製作「仙台城下絵図」には「小泉御殿」、安政3（1856）・同6（1859）年製作「安政補正改革仙府絵図」には「小泉御屋敷」と見える。この間、文政9（1826）年には、「国分小泉御屋敷御絵図」が製作されている。「高野家記録」によれば、明和元（1764）に城下北目町より出火した火事で「小泉御殿」が被災となり、「国分小泉御屋敷御絵図」にある「御殿跡地」の記載と関わるものと思われる。また、天明年間（1781～1788）には小泉屋敷内で銀札が印刷され、文政3（1820）年には屋敷内に「御物蔵」が建設されるなど、藩施設として屋敷が多様に利用されていた様が伺える。なお、宝曆13（1763）年より9年の歳月をかけて編纂された地理書「封内風土記」によれば、別荘が造営される以前、義山公忠宗の世には火薙庵をここに置き、火災の後廃地となったとある。
- 注33：この際使われた土は、所内で瓦を焼くのに撒入していた堤町周辺の陶土の残りといいう。
- 注34：「政宗君治家記録引証記 三十二上」（市史1996）。
- 注35：同上
- 注36：元禄～享保年間（1688～1735）に成立した書物。
- 注37：田中1999



写真1 若林城跡とその周辺の航空写真

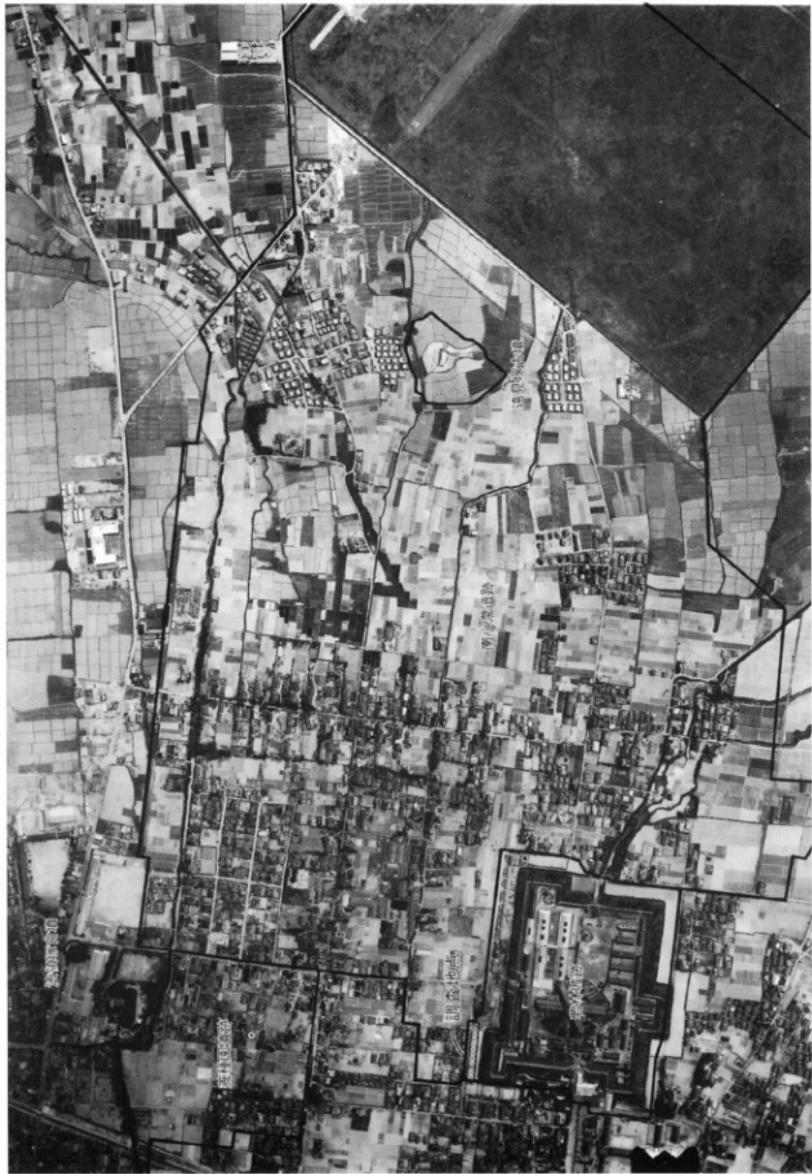




写真2 SD1 確認状況（2トレンチ・西から）



写真3 SD1 完掘状況（4トレンチ・西から）

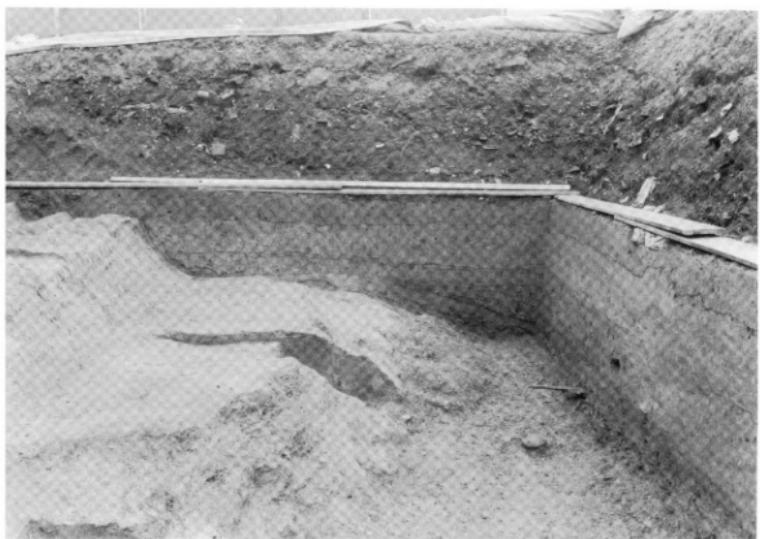


写真4 4トレンチ・東壁断面（西から）



写真5 SD1 断面（4トレンチ・東から）



写真6 SD1 完掘状況（1トレンチ・西から）



写真7 SD1 木製品出土状況（4トレンチ・西から）



写真8 SD1 断面（3トレンチ・西から）



写真9 SD1 断面（5トレンチ・北から）

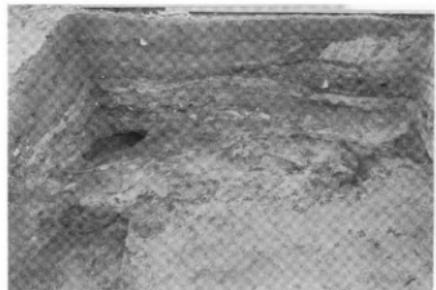


写真10 2トレンチ西壁断面（SD1・SR1重複状況）

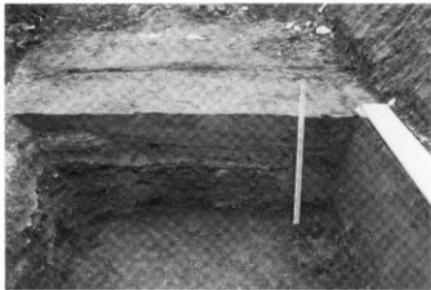


写真11 SD1・SR1 重複状況（1トレンチ・西から）

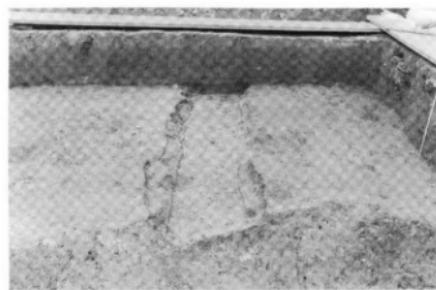


写真12 SD3 完掘状況（4トレンチ・南から）

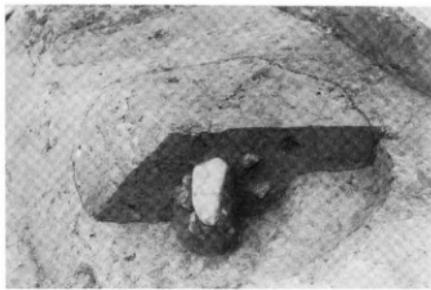


写真13 SK2 断面（4トレンチ・東から）

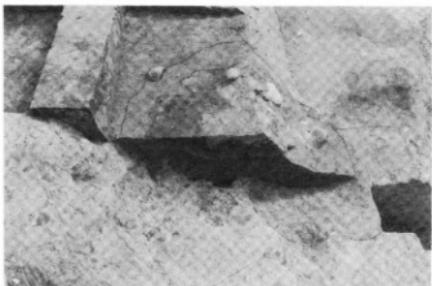


写真14 SK3 断面（4トレンチ・西から）



写真15 SK4 完成状況（4トレンチ・南から）



写真16 SD1・SK1 断面（3トレンチ・東から）

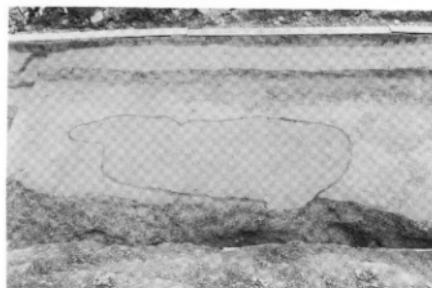


写真17 SK7 確認状況（2トレンチ・南から）

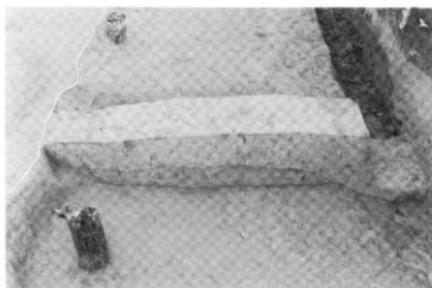


写真18 SD6 断面（5トレンチ・西から）

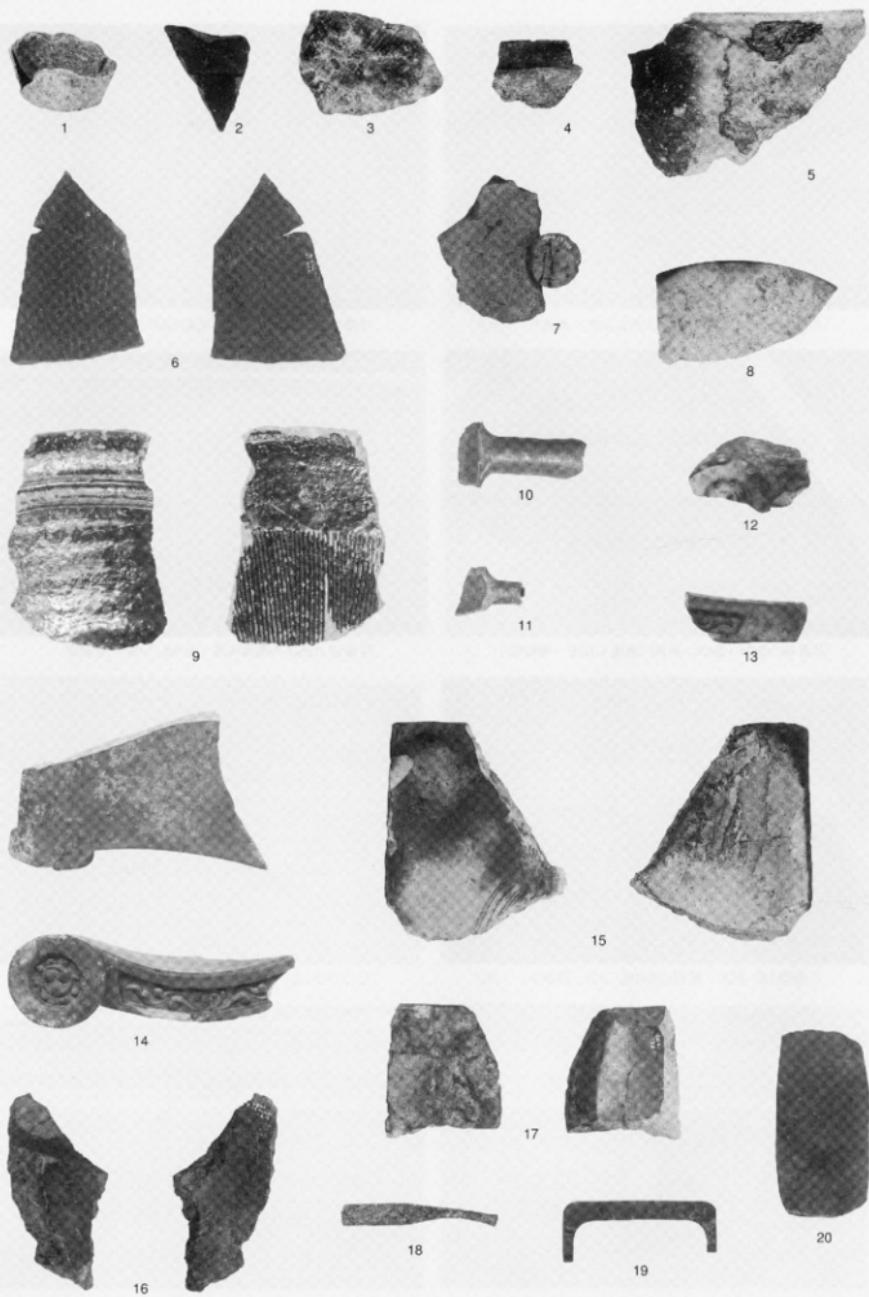


写真19 出土遺物(1)

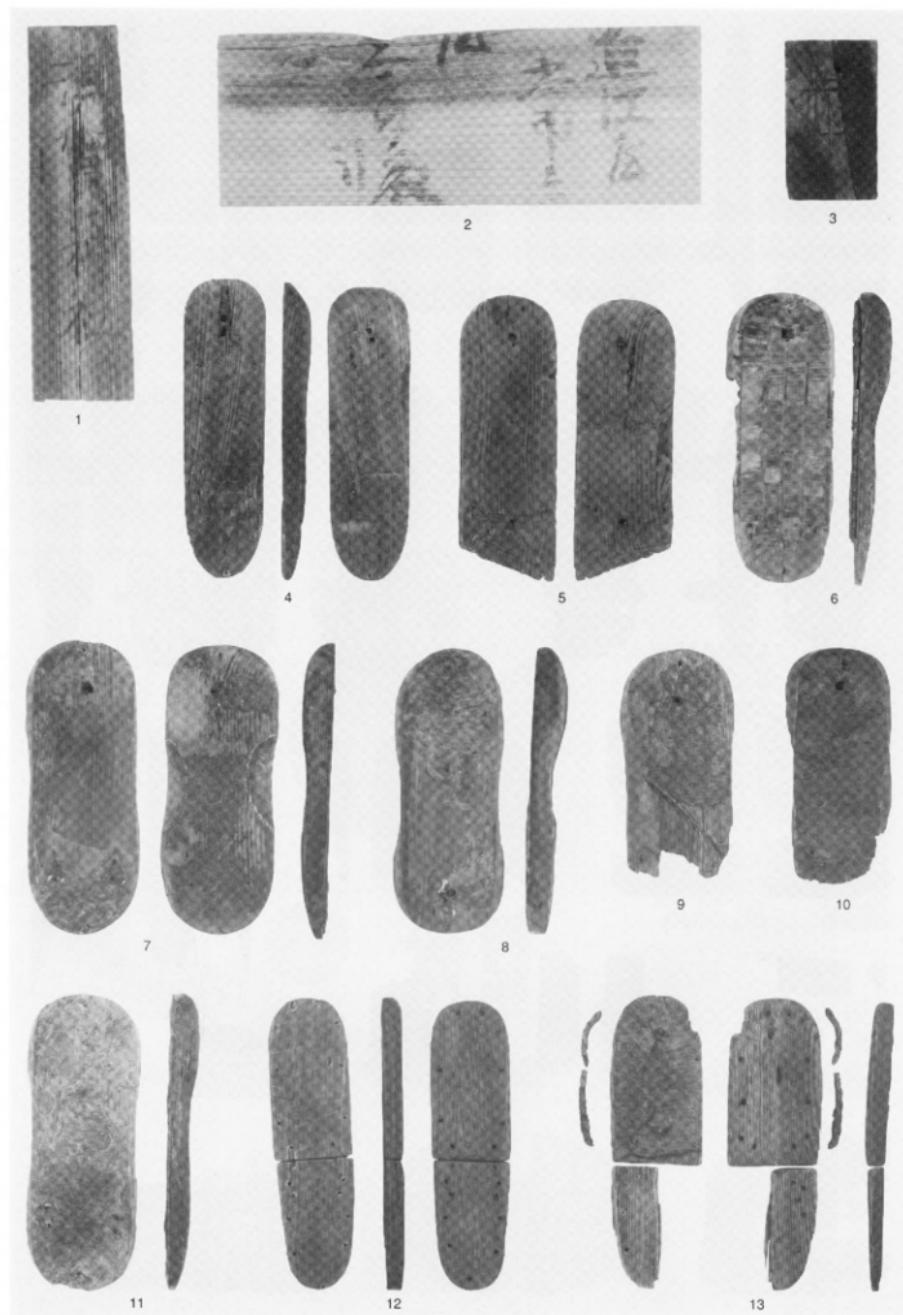


写真20 出土遺物(2)

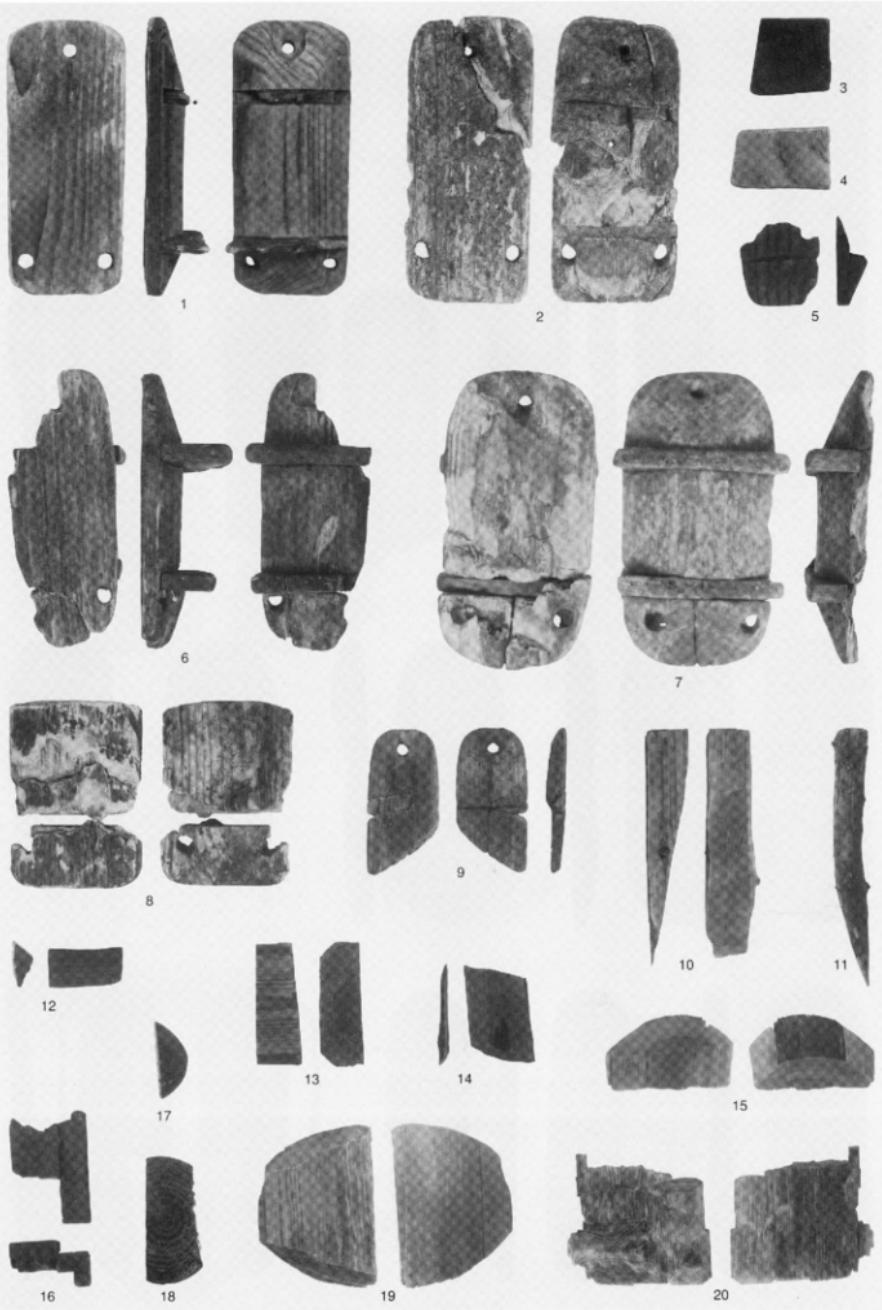


写真21 出土遺物(3)

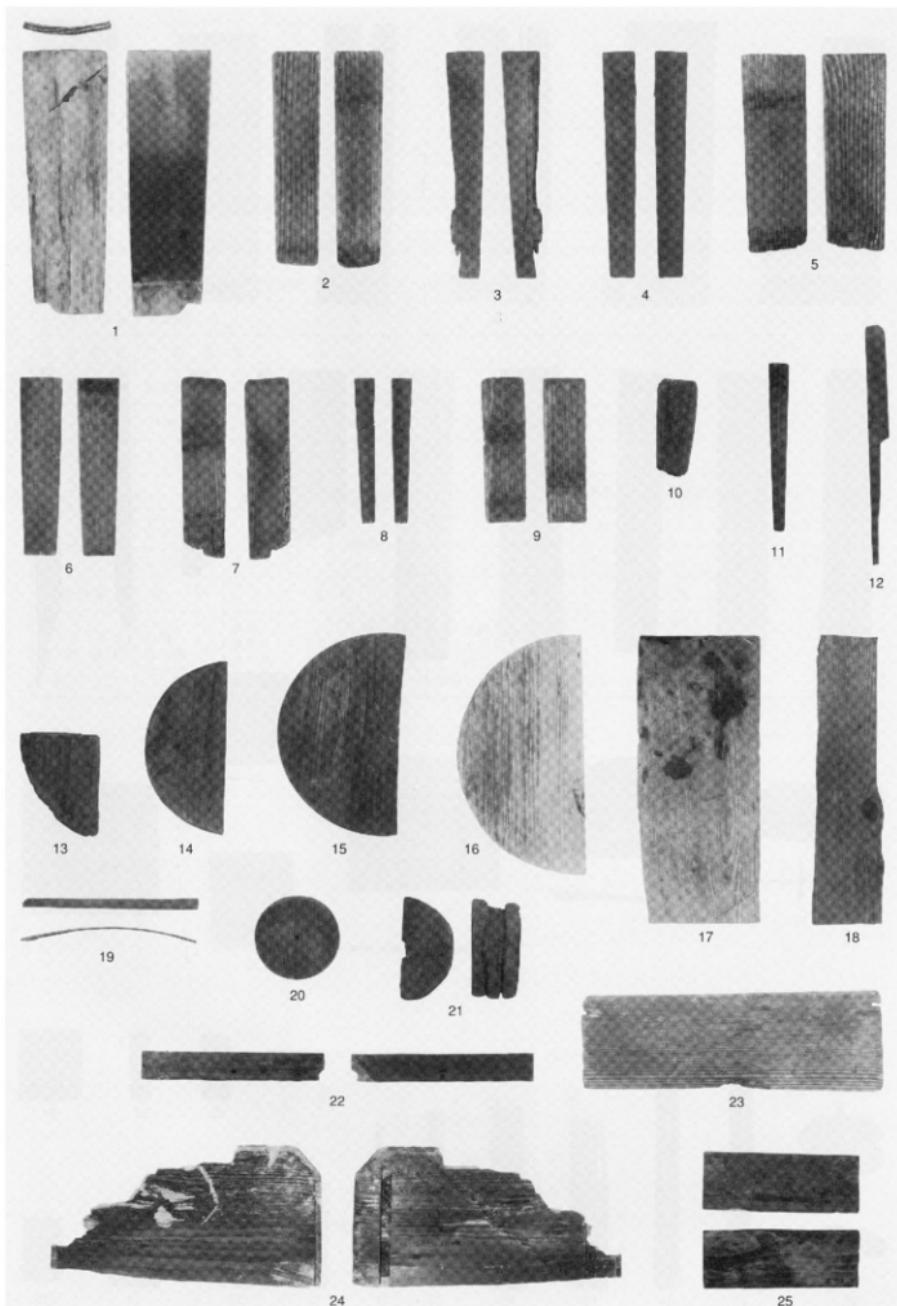


写真22 出土遺物(4)

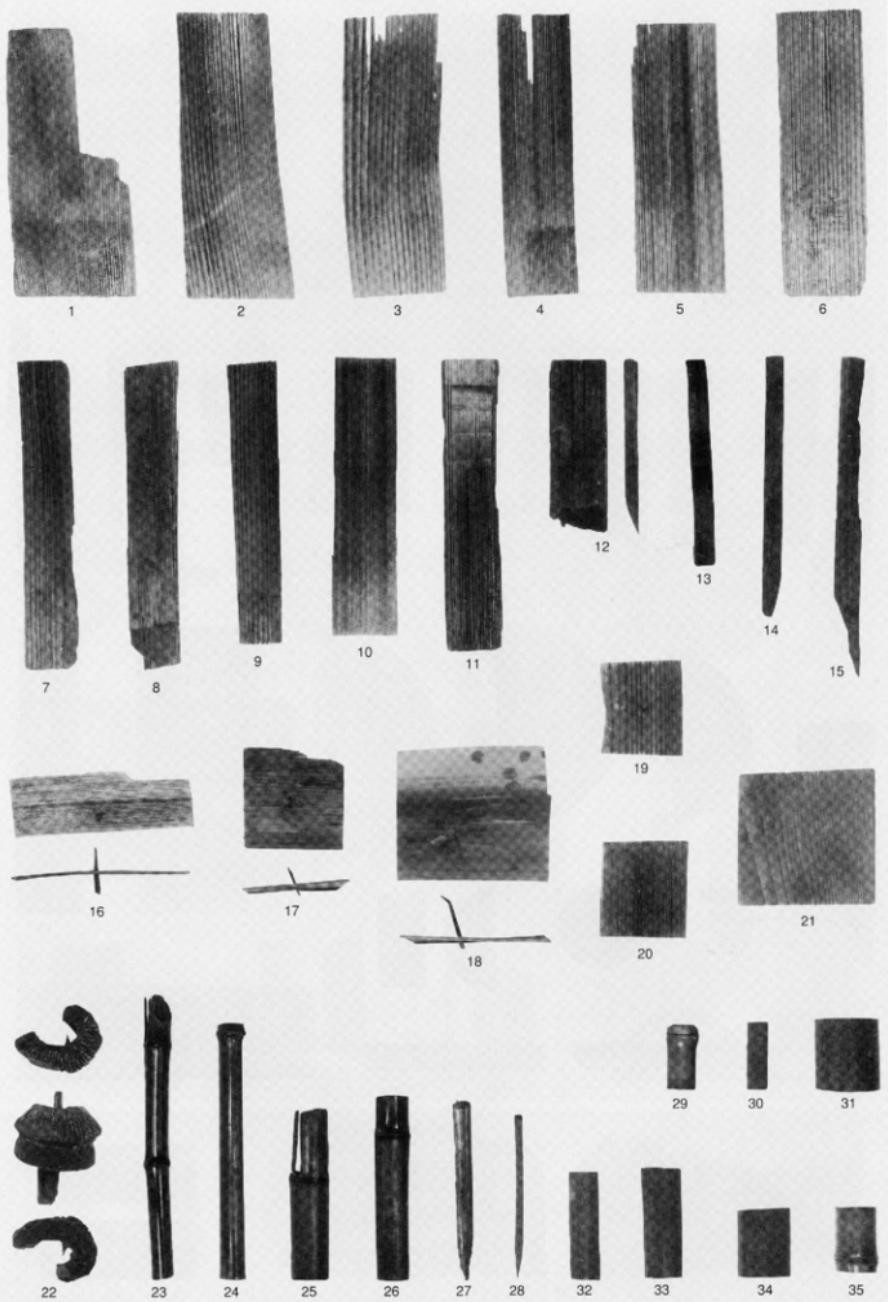


写真23 出土遺物(5)

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	わかばやしじょうあと						
書名	若林城跡						
副書名	第3次発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第256集						
編著者名	伊東真文						
発行機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7番1号 電：022-214-8893~4						
発行年月日	2002年3月31日						
所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド 市 町 村・遺跡番号	北 緯	東 緯	調査期間	調査面積	調査原因
わかばやしじょうあと 若林城跡	宮城県仙台市 若林区古城二丁目	04100 01030	38°14'08"	140°54'13"	1999.08.23 ～ 1999.10.26	370 m <sup>2</sup>	都市計画街路 「南木町・古城線」拡幅工事
所収遺跡名	種 別	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
若林城跡	古墳 集落跡 城館跡	堀跡 溝跡 河川跡 土坑	1条 4条 1条 7基	純文土器、土師器、須恵器、 赤焼土器、土師質土器、瓦質 土器、瓦、陶器、磁器、石製品、 木製品、金属製品			

仙台市文化財調査報告書第256集

## 若 林 城 跡

- 第3次発掘調査報告書 -

平成14年3月31日

発 行 仙 台 市 教 育 委 員 会  
仙台市青葉区国分町三丁目7番1号  
仙台市教育委員会文化財課

印 刷 株式会社 共新精版印刷  
仙台市宮城野区日の出町二丁目4-2  
TEL 236-7181

